增補 俳諧歳時記栞草 秋

特57
741

曲亭主人纂輯
東京
藍亭青藍増補

秋

漢書律暦志 少陰者西方、西遷也陰氣遷落物於時為秋、秋斂也、物孳斂乃成熟、

少皞 帝 礼月令 其帝少皞、注云少皞白精之君金天氏也

蓐收 神 月令 其神蓐收、注云蓐收金官之臣少皞氏之子該也

白藏 尔雅 秋為白藏、一曰收成、注云氣白而收藏萬物故曰白藏

金商 秋五行属金五音属商故有金風素商之称唐高宗九日詩云端居臨玉宸初律啓金商

明景 元帝纂要 秋景曰朗景朗明義同

爽籟 謂秋声也増韻爽清快也尔雅吹物有声曰籟

夷則 月令廣義 夷傷則法也言金氣始肅萬物于此凋傷猶被刑戮之法

七月

立秋 節 月令廣義 孝經緯云大暑十五日斗指坤為立秋七月節

新秋 韓文 是時新秋七月初金神按節来氣除

孟秋 廣韻 孟勉也始也又始初也共謂新秋也

初秋 中院通茂公御説 和歌よみ初秋八七月十四日までをいふべし

處暑 中月令廣義 立秋十五日斗指申為處暑漬暑将退伏而潛處也處上声止也暑氣

止息也是七月中也

文月 清捕典侯抄 此月七日為乞巧文ひろげ月とも書せり文をひらく故空のこげこえて書あり文ひろげ月有家文月を書くもの月のころ待えん家隆 藏玉 ふみなどのちりのひろまなぐへてやあり

機棚月 藏玉 鵲のわたりせよなどのちりのひろまなぐへてやあり

女郎花月 藏玉 名をえ月もをこあり

涼月 月令 孟秋月涼風至

盆秋 經曰毎年七月十五日為父母設盂蘭盆供十方自恣僧

相月 爾雅 七月為相疏云

桐秋 淮南子 一葉落而天下知秋 遁甲書 梧桐立秋之日一葉先墜

蘭月、蘭秋、肇秋 纂要 七月曰首秋上秋肇秋蘭秋 月令廣義 提要抄云蘭月云〻

親月 和尔雅 此月諸人請親墳墓故曰親月

餞月 餞字景曰送行燕說文送去也餞と訓ず暑の去を送る意あり

八月

葉月 此月肅殺の氣を生ず百草葉を落す故葉落月とも今略

南呂 律 礼記律中南呂高誘注云南任也言陽氣内藏陰伍于陽任其成功

白露 節 月令廣義孝經緯云處暑後十五日斗指庚為白露言陰氣漸重露凝而白也

秋分 同上 白露後十五日斗指酉為秋分陰生於午極於戌故酉其中分也仲月之節為秋分秋為陰中陰陽適中故晝夜長短亦均焉

仲秋 月令 八月為仲秋

壯月 纂要 八月為中商又曰壯月

桂月 同上 八月亦曰桂月○桂の花の咲くの月

中律 出處未考八月乃儺以達秋氣云〻儺ハ儺月の誤ヨヤ

難月 唐類函 節環より出せり

秋風月 藏玉 萩の葉露ふきみだれて音あり身よりこぼれ出る月定家の半の空そひらまとこそ長明

月見月 藏玉 名月秋の月もこそ

雁來月 月令 仲秋之月鴻雁來

九月

無射 律 礼記九月律中無射高誘註云無射陰氣上升陽氣下降萬物隨陽而藏無有射出見

寒露 節 月令廣孝經緯云秋分後十五日斗指辛為寒露言露冷寒而將欲凝結也

霜降 中 同上寒露後十五日斗指戌為霜降言氣肅露凝結而為霜矣

季秋 月令 季秋之月云〻

紅樹 藏玉 通俗志出せり疑ハくハ紅樹月の誤ヨヤ

玄月 范蠡曰王姑待之至于玄月註云玄月九月の異名

長月 夜長月と

素秋 素秋八九月に限らず秋の総名なり素

八白あり、四時を五色に配するに秋を白に中るゆゑに素秋の名あり、

菊月 又菊秋とも云ふ、月令季秋月菊有黄花、故曰菊月、

晩秋 對早秋曰晩秋、

梢の秋 季吟云紅葉をる故に木深月ともいふ、

紅葉月 證歌紅樹の下に出つ

寐月 蔵玉 月秋長くぬる長き夜をかぞへ家隆

小田 蔵玉 さを鹿の露の色どる

苅月 神に捧ふ小田苅の月 顕昭

月 梢の秋といふに同じ、

い

七月

糸織姫 棚機七姫の内 類旧事紀に、令天棚機姫神織神衣云々是

犬飼星 志の部二星の条に出

石枕 仙覚抄 石を枕とは真の石にあらず玉なり、なるべしの石に夜の玉は枕とこそ云へり、

芋の葉 藻塩草 取草とは棚機の歌を書付る芋の葉は露を書云々

露 星の一物

曬衣 小袖 四民月令七月七日麥を作り藍丸及び蜀漆丸を合し任書及び衣裳を曝し、俗に習ふて然り、世説郝隆七月七日鄰人を出て皆衣物を曝す隆仰ぎ臥して腹を出す人其故を問ふ曰腹中の書を曝す、○星の一物衣裳を曝す、物をうるを、七夕に巧を乞ふ為なり、

裳 貫之家集 世をうきは我ら糸は七夕の涙の玉の緒とぞ思ふ 秋きぞ物思ふ袖の世をうきぬべ、なるべ

づるに何をうさはー弁内侍 荒野集 七夕に物をうるきむ、越人

池の坊孤立花 洛の六角堂頂法寺雲林院八三條の南にあり三十三所順礼の一箇所也近世僧専光数品の花枝を一瓶のうちにして山水の景象を摸するを得とり和俗これを立花といふ今は至て代々の名を玩ぶ僧俗此徒弟となる、その多し、例年七月七日立花数瓶砂の物等とり人争ひて来をこるあれを池の坊の立花といふ是も又二星に供するのちなり、

伊勢踊 滑稽雑談 いせをどりとは侍るなり○世説

生身魂 蓮の飯 閑窓倭筆 ー鯖 本朝の世俗七月に親を供養して生身魂と名づく、また盂蘭盆の修行なり一切苦脳の患なくらし是七月十五日僧自恣の日現在の父母の寿命長久を祈る願の文なり、是生身魂の修行なり、和漢三才図会 刺鯖中元の日は祝用とも但背より骨に傍て割開きあれを鮨ーて、二枚を一重とも一ちをを一刺とも○同書二云蓮の飯考妣の霊前に供又以て親戚に贈るを礼式とも、ちをを称ーく生霊祭といふ荷の葉を以て蒸せる糯飯を包み観音草を用てこれを傳る俗名を以て好とも

稲妻 稲つるま 和漢三才図会 秋の夜晴て電るに、ハ常の俗傳ていふ此時稲実る故に稲妻稲交の名あり 御傘

稲の殿 稲妻の對 稲光ハ雑あり、説文電ハ陰陽の激曜なり、稲の殿といふべし、 続猿蓑

稲葉の雲 詩 稲の殿一束 獨ゐて留守りはとて

云多稼如雲○秋風八田面ヨ冬をさそふといふもの雲の姿どもなり中院通茂公○稲葉のあしもとのひたる景色をいふとぞ、

稲の花

夫木 ゆふくれはいなばの花のかをまがるしるの我宿の門田の稲の花

北浪よる後久我内大臣

糸萩

大和本艸 糸萩ハ花紅ニ盛久シ、

隠元豆

大和本草 近年中華ヨリ来ル、春子を植、秋の末ニ実多く、花咲かゝ蔓生ぜ蠟きと花英ニなる ヨ 煮食ふ京都ヨリ隠元豆と云 筑紫ヨリ南京豆ヨリ来ル○此種黄檗隠元禅師来朝シテ諸種を持来ル、其一種ノ故ヨ名づく、

稲春虫

和漢三才図会 蠶蠶春黍和名以祢豆岐古萬呂俗云祢宜 按ずるヨ蠶蠶斯ヨ似テ小く、長さ一寸ばかり、青色尖ヨとる首両眼の間廣し、但蠶斯ハ両眼の間狹し、ちがを以て異なりとなるのみ、社人立烏帽子を着るる状ヨ似るヨ故ヨ俗呼テ祢宜といふ、小兒両足を捕ふ時ハ身を伸シて首を俯き仰ぐ稲を春形ヨ似るヨ故ヨ和名稲春といふ古萬呂ハ蠶の類の和訓ノ紙

蟲冬蟲

本綱 蟲蠶ハ経名多シ数種あり草名多シ穴の中ヨ入来人多て蟲を食ふ辛く毒あり其類土中ヨ乳む深く其卵を埋む夏ヨ至て地ヲ出づ○按ずるヨ蟲冬蟲方多シ首形蛛蛛ヨ似テ小く、青白の色田の稲ヨ生る夜ハ株ヨあり朝ハ梢ヨ上り、稲の穂を飲む故ヨ稲子と名づく、これを取テ炙て食ふ味甘く美あり、小蝦の如し、形同ジクシテ灰色田野ヨ在りて地ヨ跳る者即チ土蟲なり

蝗

本草綱目 蟲蠶集解ニ云蝗亦蠶ヨ類シテ方首ヨ王字あり、冷氣ヨ生ぜる所、天を蔽ひて飛ぶ、性金の声を畏る、一ヶ月ヨ八十一の子を生ぜ冬大雪あるヨハ土ヨ入テ死ス、和名抄 蝗 和名於保 無之 大和本草 管子ヨ曰年の五害水旱風蝗ヨといへり、虫ハ蝗ノ和俗ヨ実盛虫と称するあり蠶ヨ似て小く青色あり、首ハ兜を着るが如し、稲葉を食ひて大ヨ害を夜松明を燈し、鐘鼓をあしてこれを送る、

芋虫

大和本草 蝎又葉の葉ヨ似る青虫を生ず薯蕷ヨ生ず大ヨ大なる拇指の如く、長さ三四寸あり、芋虫といふ、青色又褐色あり後ヨ化シテ蝶ヨなる、

蟷螂

時珍曰西臂斧の如く轍ヨ当て避ぜ故ヨ当郎の名を得たり又螳蜋首を驤臂を奮ふ頸修大頤二手四足髭を以て鼻ヨ代ふ人の髪を食ひよく蝨を駆シテ蟬を捕ふ深秋ヨ子を乳房を作るヨ枝の上ニ粘着ス即螵蛸也房の長さ寸ばかり拇指の如し其内重々として隔房あり、房毎ヨ子あり、蛆卵の如し、芒種の節後ヨ至て一齊出 滑稽雑談 俗ヨ鎌きりとゆかの西臂斧の如し、又鎌をめくりてとりそなへるべし○時珍曰今人疥を病者往々螳螂を捕へ焼て食し効あるいはゆる和名ちよぐるまべし

竈馬

ちろぎ 蟋蟀の条ヨ註ス

蕪三

二名一物この部

秋物

居待月

藻塩草 十八日ノ万葉ヨ座待月と書りく

絲芒

秋の千草あり、葉細く縱線のごとし長三四尺一株ヨ数百の茎叢生ス秋茎を抽で花穂をなす、

色草

芋

時珍曰芋花をひらくもの或ハ七八月の間ひらく者あり、茎を抽で花を生ず黄色旁ヨ一の長蕚あり、ちを護る半辺蓮花の状の如し○粒芋唐の芋青芋螺芋甘藷ホの種類あり、頭字の部ヨ詳ちて註シあり、

田舎柳　形四く諸柳より大よして渋し酸し樹なり塔柳又　**犬殺梨**　和漢三才図会　北國最多し奥羽津軽秋田の産他國より倍して大なり周り一尺四五寸俗呼て犬殺と名づく狗子樹下に有ときは梨落ぶ撲を死を故に名づく、

稲　禹錫食經尓雅云稲穀　**稲苅**　字彙刈ハ穫也取也

稲扱　古ハ麥稲の穂を扱に二つのふき管を以て縄を通し繋ぎ其を握り持穂を狭し扱近年稲扱を製し其捷

稲舟　古今　家上川のもれば くる稲舟のいなのふ

あるを此月なり○出羽國家上川水たぎつ舟を引のなを上舟のかりらのふをるゞ人の物をいふと言てふり

稲莚　御傘　莚をあきなるやうに稲の面の平々とあるを申也よりて夜分ふる居所

木の枝あるに、苅いなをうつてなるをも、稲莚とよめり、万葉玉なこの道行つゝを稲莚あきてゝ人をとるよ

○大ゝ是そちろ得ゞ、定雅

鰯雲　秋天鰯先ちらんとする時、一片の白雲あるに、その雲段くとして波の如一是を雲といふ、

鰯引　裂鱠　和漢三才図会　鰯俗字鰮和名伊和之性柔弱故に俗字弱に從ふ與和之と訓乃相通ふ下畧群行して至る時海波稍赤し漁人豫知て網を下し其を采る鰯好て鱗を吮ふ為に逐ふ者数万群をなして波樓のごとし其を取て膾に作る炙て食ふ又脂を取て燈油とす○鰯引とは網を引の為裂膾とは其魚刀を用ふるに及ぶ

描を以て其を解く故に本朝食鑑二名御紫或紫と云本朝宮闈の兒女鰯の賤名を忌て御紫と云鰯の塩糟其内色紫黒故に名づくこの、

八月

十六夜月　既望　古今　君やうん我やゆんのいさよひに槙の板戸もさゝまねるかな○いさよひとは十六日の月、暮てのちまでいでゝる故に○やすらゝと出ていさよふ月の雲芭蕉○此句意ハやすらゝと月ハ出ぬれども、雲のなかるゝをいさよひて云る曲節なり、

芋名月　つの部月見の条に

羊肚菜　蔡氏集傳日月相望むを望と既に望む十六日之　和漢三才図会　羊肚菜今云兎口蕈八月の中湿地に多く生ず其纖の表褐色端曲り捲裏ハ黄白色細刻あり、ふめらかなり、孔あり、蜂の巣のごとし、毒あり、

石蕈　同上　状木耳のごとし、微柄あり、黒色裏灰白色峯の頭巌の上にあり、甚得がたし、

稲　同上　守舍禾を看庁なり○田間に建て猪鹿を追ふ処なり、

小屋

稲木　多識篇　喬杆　伊奈加計○稲木俗稲掛といふ禾を掛る具なり竹の長短相等しきもの三莖を束て上に筵を用てこれを覆ひ田中に於て禾を上にあげて乾をなり、

稲掛

稲干

稲束　和漢三才図会　稲を苅て束ね一把二把とし是なり又稲塚ちゝ苅いねを束ねて後積て堆くも恰も塚の如是を稲塚去

稲負鳥　古今　我門よりふねを出る鳥の鳴あべよ行きつく風に雁ハきよりに真淵翁云稲負鳥ハいとくちなきよと

るを、さまざまに論ぜしをこゝろみに、或は鵲あり、田夫之をといふ、此奇をもくも心得ぬ人あるべし、詞をもちぬひがごとなるべし、実に秋の半をすぎて來ぬるもあり、綺語抄にいふところを稲負鳥、庭ときつるをもあるべしつぎをしへ鳥ホの諸名あり、三才図会鶺鴒雀のごゝ鵲ときは鳴行ときは揺く大さ鶏のごゝ、脚長く尾腹の下白し、頭の下黒く連錢のごゝ、故に杜陽の人色を連錢といふ、

色鳥

御傘いろく秋ごゝる小鳥

雪玉さらに又ごゝる

色とりのちゝ　政為

桑鳶

和漢三才図会　竊指青雀臘

背雀状鳩よりふく頂黒く、腹灰青色、羽の末黒く白き斑あり、背微曲て厚く、浅黄色尾短く好て豆粟を食ふ故に豆甘美と名づく俗以て豆廻しと名づく常に鳴て春月よく囀る比志利古木利〻ゝ〻ぎとし、

伊須加鳥

正字未詳　同上　状鸚鵡のごゝ〻て頭背蒼く、又腹臆最赤く紫あり、背青く〻て齟齬又を〻ゝ故に事物齟齬を、伊須賀の背〻ゝ〻

九月生玉祭

九日

神社啓蒙　生玉の社は摂津國東成郡天王寺の辺にあり、祭る神一座天の生玉の命　社家註進記　明應年中本願寺の僧ちゝに來て寺院を創し、神地を以て境内に接ぬ、神其不潔を悪みて彼僧を罰ぬ僧あれて神殿を今の旅店の側に遷し、ちゝ〻く造営ぬ、其後信長の兵火にかゝり、殿社灰燼ゝ〻ゝ人絶に神璽を別所に迁ぬ、慶長年中秀吉城廓を築くの日、今の地に遷ぬ、○例祭九月九日神輿一基遊行流鏑馬あり、社内に十坊あり、その内南坊を別當とぬ、

岩倉祭

十五日　八所明神の社八洛の北、長谷村の西岩倉にあり、王城の四隅に岩倉を置るぬ其一なり、

拾芥抄　大雲寺岩倉観音○親長卿記に云、文明三年三月廿九日岩倉長谷の観音に參る、十四日融院の御願日野中納言文範卿草創あり、○鎮守岩倉大明神所謂八所〻八幡加茂松尾山王住吉春日新羅大座是に太神宮貴船稲荷平野を加へて、以上十二社ぬを十二所明神と称ぬ是大雲寺の鎮守にして、土人本居神ぬ、例祭九月十五日神輿遊行ぬ、神主八村中の氏子交るゝ〻ぬを勤ぬ、大雲寺衆徒四人名代ぬ〻ゝ公人法師二人供奉夜宮に大炬火二ツ立、深更に及て角力五番あり、

滑稽雑談　俗に岩倉の尻たゝき祭といふ夜に入て神供を奉る一村の内新婦を〻ゝ〻て婚礼の服を着せ〻ゝ神供の器を頭に戴き、神前にもゝみゆ〻ゝ一村の老若ちひさき枝木を持、新婦の尻をうゝ、新婦うゝ〻ゝ〻ゝを立まゝりてうつもり

一宮祭

十五日○河内國交野郡北枚方村にあり、祭る神牛頭天王八王子北野の天神、摂社、帝釈天王、服立寄姫大明神、淺原大明神、鎮座年暦詳ならず、例祭九月十五日、今八十六日神輿出ぬ神楽神湯ホあり、氏子八郷坂村小倉村招提村田口村甲斐田村中宮村禁野村濃村是社僧神宮寺及社家岡田氏記ぬ處ゝ又一説に、一ノ宮平岡大明神八河内國河内郡にあり祭る神天の児屋根命姫大神、香取神、鹿島神若宮の社末社十八社神武天皇の御宇鎮座例祭九月八日九日社務水足大炊下祢宜神子五六輩皆農民にして社を兼務ぬと云、

伊勢御遷

紀事 凡大社造替毎に陣の義ありて、時日を定らる、勅使あり、伊勢大神宮春日の社廿一年を経るときハ必造り替あり、遷宮の時納る所の神宝行事官調進もこの月伊勢参宮の人多く京師を出て、十六日の御祭會並に御遷宮にあるんとなり、凡参宮の人先霊山の國阿の像に詣て、その杖履を戴拝を相傳ふ、國阿深く太神宮を信ず、時々木履を着杖を携て参詣をあるべし、終に行路の難なし、故にその福に倣ひて以平安を祈るなり

○二十一年毎に遷宮あるが故に十五年めに至るときは木引のことあり、三年あるいは木引成て、又三年木拵のことあり、材木ハ木曽山並紀州大杉山より出す○内宮御鎮坐八垂仁天皇二十五年三月外宮ハ内宮鎮座の後四百八十四年を経て雄略帝の時垂跡あり

色なる風

九月の風なり 新古今 いろなるべき風もなのりなれ身に先秋のなるるあるべし、久我内大臣

隠君子

菊の異名なり 范至能菊譜序 山林好事者或以菊比君子其説以謂歳華婉娩草木衰衰乃獨燁然秀発傲睨風霜此幽人逸士之操雖寂寥荒寒而味道之腴不改其樂也 愛蓮説 菊花隠逸者なり、

いなて草

菊の異名なり 藻塩草 長月の九日はさく、

毬栗

其実苞中に在て未地に墜ずるをいふ毛球、和名抄 無花果 和漢三才図会 其実柳に似て本窄く、俗に唐柳といふ、一月ばかり熟す、故に一熟と名づく、今の樹枇杷に似たりといへども然らず、婆娑として葉苣麻に似て小く背色淡く潤ふ、文理隆明なり、五痔を治するなり、識て、

魚毒を治するなり

櫟

くぬぎ 実ハ椎より少く大く木硬くして多く船の櫓に作る、

色見草

蔵王秋なるなれば実を以て秋とす、くきのいろ見草、ちらずくきをつき山風ぞなく、

色不變松

荀卿曰隆冬を経て凋まず雪霜を蒙るとも変ぜず、其貞を得といふべし 新拾 いろいろぬきこの色の山のこゝろは松君をぞ千世の友とこそいふ 入道前内大臣

岩蓮花

大和本草 岩蓮花倭俗の名、其草の形葉のかたと非 恰も蓮花の開るが如し異名、或ハ云佛甲是なり

鰯の黒漬

豫州の産なり、宇和鰯と称す、その製両鰯を切削て鹽の性腸の中に黒汁あり、塩水に和して其魚黒くしたせを黒漬と云なり、

七月六日 道参

九日 迎鐘 山城国名勝志 六道ハ五條の末北 槙責 建仁寺巽の角にあるべし、今の建仁寺大昌院管領を薬師堂あり是珍皇寺の本尊○雍州府志 珍皇寺ハ弘法大師の開基にして元葬場の小堂に地蔵を安置せしに六道と称す、傳へいふこの所冥途に通ず、故に小野篁この所より親ら六道に行て帰りしと、是によりて毎年七月盂蘭盆前九日に男女参詣す 紀事 今日諸人六道地蔵に詣て男女鐘を撞て聖霊を迎るといふ各槙の枝を買て携帰る、又新穀を買て聖霊に供ず是を私と称す○六道参るとて槙の枝を買ひて家に入り霊前にあり、俗聖霊槙の葉に乗りて来るといふ是聖霊を迎る意なるべし 古事談 珍皇寺の別當某云當寺の鐘ハ慶俊僧都なるを鑄る慶俊入唐の時留主なる僧ありしに此鐘土中に埋三年を経て堀撞

べしと、衆僧三年を待に堪ずして一年を過してこれを堀楼に掛て撞に其声唐に聞ゆ慶俊曰我寺の鐘声きこゆ予念じて三年を待て是を掘楼上にかくる時ハ撞ずして六時に声あるべしと歎惜せり○かの所謂聖霊をむかふるなる撞鐘ならん是を迎鐘といふ○六道ハ桓武天皇延暦十三年長岡より今の京に迁らせたまふとき諸人の葬場と定めたまひし【迁都記】にみえたり本尊薬師如来ハ傳教大師の作七佛薬師のその一とぞ

墓参 七月

七月初涼

王劉錬詩云昊天清高秋凡発初涼

朔日より十五日に至りて各祖考の墳墓に詣ることなり唐山の人清明の日上墳祭掃に同じ○源順家集に七月十五日なんめさせて山寺にまうづる所を云ふのしめをれる蓮の葉をひろふ、霧あるし山に我ハきなまなり是盆の墓参なり【和漢文撰】前文略之一家ことは杖にすがり髪の墓まゐりはみなちなろのかとこあるに芭蕉評に云故翁伊賀の西麓庵にて例の文稿をあやしむるとて今思ふに白髪の竟祭ハ其日め感情ハ演ふせど發句ハ祭る姿にあらず此故に参の字を以て歩行の様を形容せしに當季の詞も慥ならず増て切字の入所もなし此等や有様躰と云てまゐるちゝのさかみなそのつにと下の句を云ひ次で俳諧の歌もあるべきや云く

蓮飯

いり部生身魂の条に註す

花燈籠

造り花をもて美しく飾りたる燈籠なるべし

初鳥狩、初鷹

貞徳曰とや出の鷹を、はじめてつかふを初鷹ともいふなり鳥屋出の鷹とハ夏の羽のぬけかはるを鳥屋にこめて羽の出そろひたるを盆の聖霊の箸をとりて夜鳥屋より出すによりて著鷹ともいへり○小鷹狩の条をも見合すべし

鳩吹

鳩をとるとて手を合せて鳩の声のやうにふきならすなり【八雲御抄】【歌林良材】【藻塩草】【袖中抄】ホ説同じ【炭俵集】名月や誰が吹おこす森の鳩　洒堂

花火

【和漢三才図会】烽燧に代ふべきもの也又夏月河辺の遊興とす【御傘】正花を持之

萩

【和漢三才図会】天竺花ハ花史によれるが如し按ずるに枝葉長く垂地を蔽ふ状糸櫻に似て一枝三葉棗の葉に似て又南天燭の葉に似て尖らず柔軟なり秋小花を着淡紫色俗専ら萩の字を用ふ奥州宮城野方二里ばかり萩生茂せり山萩あり白花の者あり白き開なの者あり○或書に宮城野の萩ハ草にあらず木萩之弓などに作る木なり梢に青き枝生てその枝に花さくなり○そこあしの萩、鹿鳴草、古枝草、糸萩、萩さゞせ、萩ホ其頭字の部にて註す

萩の錦

錦にこゝていふなり【新後拾】いとゞまだ　ですさる秋ちぎきの花はみなしきの露のたてぬき

萩殿　萩の戸

法皇御製　【禁秘抄】萩の戸ハ常の御所【大要抄】萩に限らず色々秋の花を栽らる清涼殿の西の方貳間の前【五社百首註】菊の戸萩戸同じ

蓮の實

と蕪須曰其菂秋に至て黒くして水に沈む石蓮子といふ○山谷詩倒戟収蓮菂云々ちなみに蓮の子の房中より抜出る穴を靫と見立し

初嵐

【和漢三才図会】山の氣を嵐といふ醫書に山嵐不正の気といふ是なり今初秋以後朝夕山より吹風を俗に嵐と名づく【連哥新式】初嵐ハ七月

絡線虫

【[illegible]】六月の末より八月中なくその凧なり

内より鳴初て七月中ごろまで野叢の中昼盛に鳴く其声ギイ、スと云ふが如し一二声の内に、チヨンと舌打を俗是を蛩と云て小篭に入て市に賣て小児の翫とす今の形蟲蚤に似て大なり是をくゝなり又ギイ、こゝいふ機織の音チヨンハ筬打音なり、又ギス、こゝもいへり

続猿義夏の附句に砂を這ふ蘇の中は絡線の声沾園

螽 冬蟲 蟲冬蟲の属長サ三四寸、身もなほ痩て方翅灰赤色黒黠あり腹の下白く善跳て捕へがたし○今の俗ちゝをなつとよびて、

櫨 和漢三才図会 黄櫨以て黄色を染む天子の御袍黄櫨染と称す是なり帛を染て上に砥水を用ひ暑染すれば黒茶色をなす其葉小く浅青色莖微赤し三月小白花を開き細子を結ぶ秋に至て紅葉をなす故に加せて漆の類にして葉柳の如くにして滑なり元山木今世子を採て専ら蠟燭に作る依て多く平原の地に植て利とす

秋物

廿日亥中月 廿日の亥の巳刻に出る故なり、

簇芒 袖中抄 花芒花穂と同じきなり或ハ万葉集書に穂の出て簇をなすを簇芒といふ能因申しけるとぞ云

花野 千草の花は野に咲くをいふ之野の花といふときハ花体とありて野ハ用ゐず花野

芭蕉 大和本草 本草に湿草に載せ軟なる地に植て茂易し春葉を生じ秋に至て止む冬根莖枯ぬ年と発生せ冬を歴て大なり黄花を開く極めて稀なり東鑑に其花を優曇華と云ふ

蕪三

葉雞頭 雁来紅をいふ和漢三才図会 生薑音姜今俗多く姜字を用ふ剩我の音ときに未其據をもたず

薑 倭名抄 生薑久礼乃波之加 蜀椒奈留波之加 美蔓椒以多知波之加 美 吳茱萸加波波之加 美此等を以て考ふるに往昔波之加美といふりの八辛果の総名なり、

蓮芋 其葉荷葉に似て圓く其根栗の形の如し味美なり或ハ呼て栗芋とも、按ずるに水中に種るものを蓮芋といひ圃園に種るものを栗芋といふなり、

彈 うち部案山子の条に出づ、

班龍 鹿の異名なり、

鮡 和漢三才図会 彈塗魚俗波世川の末海近き処に多くあり常に水底を潜行小鰍を以て餌とす倫の端釣を去ること二三寸許の処に小鉛の錘を着釣を地に附し微動の響を俟て竿を揚ぐ秋月貴賤以て遊興の一つとす形色鯽に似て小さく細鱗體畧滑なり口濶く腮大に眼上に向く班黠微黑を帶ぶ尾に又小班あり虎彈魚柳彈魚ホの類多し

八月

八朔 田の実の節憑の節供 魚飛彈魚ホの類多し 特恰の節 紀事凡毎月朔ハ吉日にして相賀ものとす田面の節 中華と同し今日殊に八朔と称し又恃恰の節と称す又憑の節と号す中世農民稲の初穂を禁裏に献ずる故に田の実の節といふ世に又其訓を借用て憑の節供と称す蓋君臣朋友の間互に贈答の義あり今日貴賤各白帷子を着し互に慶を修す公事根源八朔の風俗後嵯峨院潛龍の時外戚源の通方卿の亭に在しに近習の男女密に斯義をもて囲素を慰め奉る後皇位に即

ふ尔来嘉事とす、**初月夜**　或説ニ四日五日六日迄をも○青藍曰仲秋の月ニかぎりて初月と賞するハ三五の月を待ちるゆゑなるべし　猿蓑集　粟稗と めさなくなりぬ

初月　十五日の潮をいふ一説ニ初潮の字ハ葉月の潮といふなり　初月夜　半残

初潮　五雜俎　海潮八月獨大なるハ何故ぞ、潮ハ月ニ應ずるその故ニ月望ニなる潮盛なるて八月の望尤盛之御傘伍子胥ハ死ス八月十五夜ニ風波をおこすことなりと云

箱崎祭　十五日　神社考筑前國那珂郡此社ハ譽田帝の祠なり博多ニ近し○祭る神三座中ハ應仁天皇東ハ神功皇后西ハ武内宿祢なり仲哀天皇三韓を討んと欲し給ふ神功皇后と共ニ筑紫橿日の宮ニ至り後ひ軍旅を催ふの時天皇崩御あり、この時皇后懐妊臨月なりしかども乃自ら男子の貌をなし弓鶯斧鉞をとり兇賊を平定し筑紫歸りなるを、男子降誕ありしに、應神天皇是なりしその地を呼て宇弥邑と云ふ、胞衣を宮ニ籠めて地ニ埋み松を栽て標とす、その地を呼て箱崎と云ふ、醍醐天皇延喜廿一年六月廿日託宣ありて宮を宮崎の松原ニ建らる例祭八月十五日ニ○古老傳へていふ昔この松原ニ戒定慧三字の筐を埋む故ニ箱崎と号ス松をその所ニ植て標とす、その松猶在り、**縁起**　昔白幡四流赤幡四流虚空より降其所ニ松を栽て標とす、故ニ八幡の号あり、諸説迭ニ異なり、

花畠　式御傘ニ四花あり春あり細ニ窠鑿ありバ種々の理屈あり置方がきあり、如何なる秋事ニやあ

ら尟ぞ今按ずるニ花櫨も花畑も決して秋ニ定むべきなり○花畠々草花なるべきなり、

初紅葉　初花初櫻といふニ同し　新拾遺　ちはやぶる山木ことの梢のそらもえぬべきかな　宗良親王

薄荷　和漢三才圖会　薄荷、菝葜蕃荷菜、本の諸名あり本綱曰二月宿根より苗を生ず、清明の前ニ苗を分つ方ある莖赤き色其葉對生ス初時形長して頭円し長ずるニ及て尖る其莖葉莊ニ似て麦より長し冬を経て根枯ず、按ずるニ多く山城より出ス、

花紫　花景　大和地方多く蒔春種を下ス長ずて苗の高さ一尺以来葉ハ謝落金の葉ニ類して小なり又俗ニよぶ琉璃草ニ似て差互して生ず、三月花を開く、梢の葉の間ニあり、形狀四く瓣五出して内ニ莢髭あり、又瑠璃草の花ニ異なるて、その色白し又粉紅及び黄色のあり、下ニ長蕚あり、大なり、秋ニ至て熟ス黄白色なり○按ずるニ御傘本の俳書ニ花紫を秋とし、若紫を春とす然るニ本草花景本の説三月花を開くと云ふ、味草を種て試る人ありて曰此草秋種るゆゑハ春花を開き春種るゆゑハ秋花さくと云へり、御傘ニ花秋ありと云ふ亦拠なきニあらず、

花芒　和品　濱木綿の部穂芒の条ニ出ス、

濱木綿の花　大和本草　濱木綿　万年青ニ似たり俗濱おもとと云ふ、海辺ニ生ず七八月白花を開く、莖高く延て只梢ニ数花あつまり和く紫丹の花紅形ニ似たり、好花ニあらず、季秋実を結ぶ花咲くる跡ニ数顆ありて一顆の大さ胡桃の如し内ニ核あり白肉あり　中略　篤信曰今按ニ西土

まもあり濱芭蕉といふ紀州熊野に多し甚だ雪寒を畏る宅中に植ゑ冬月葉ゑて厚く包み或ハ苞を以ておろふべし、もろせざれハ枯る盆に植ゑ屋下の暖き処に置べし、海濱にありて八潮風温にして雪早く消る故なり、二種あり、一種ハ葉柔く薄く其莖の皮多く重れ重、是百重なるとよみしもの、一種ハ葉つゝ厚く、莖の皮重なるべし、万葉三熊野乃浦乃濱木綿百重成心者雖思直尓不相鴨 人丸 滑稽雜談此者未俳書に載せ然るに古哥に

針草

和漢三才図会 鼠草に似て微ち小長さ二寸ばかり灰白色

初茸

同上 浅山松樹の陰處に生ず、色平地に叢生も、状松茸に似て小く初生ハ傘もりて内に細き刻あり内外赤黄色立秋の初に出づ柔ありて味甘く諸茸より先に出づ故に初茸と称ス

白雁

白雁全体白く翅翮黒く背と脚と赤色其肉脂少し凡中秋白雁先来て雁金もを次真雁又ちがへに次て遅し春ハ真雁先て帰り白雁ちがへに次く

初鰒

和漢三才図会 鮭ハ鯉の木字、臭臭あり、正字未詳、状鱄に似て四く肥大なるこの二三尺細鱗青質赤章腹淡白く肉赤し細刺あり脂多く味厚美く、頭の枕骨軟らかして瑪瑙の如し、氷頭と称ス、味亦佳之

大和本草 本邦東北州の大河に多し、南州にもこれあり、和名抄曰鮭和名佐久

鮞

鮭の子 同上 其子二肥俗鮭字を用ふ非なり、肥中数千粒明透上に一紅点あり、鮞と云又筋子甘子と云ことあり

放鳥

祭の条に註ス

月

海贏廻

紀事 この月九日小兒小石を以て海螺の殼を穿ち鉛を鎔して

九

殼の内へ入れ或ハ洲濱餡を殼の内へ充て、其力を助け各緒を以て海螺を纏ひ勢に乗じて壘中に投げ運轉せしむるの力つよきに依ハ其力弱きりを盆外に出を互に勝負を争ふなり、これを海贏撃といふ、席の両端を巻てこれを盆とし、和漢三才図会 ゆゑの時より始るてこれを、田夫野人の玩ぶ所なり、海螺の殼を用て頭の尖りを碎き平げ尻の尖りを摩して四め糸縄を巻て引てこれを席盆の中に舞ふ、二三の螺を以て勝負をなす、打出さるゝ者を負とし、先に入るものを伊加と云、後に入るものを乃宇と云ふ、打合て円く出るてこれを張と云ふ張のとき八伊加を勝

婆利女祭

廿日○婆利女の社八洛陽高辻の北室町の西にあり、祭礼昔八七月なりしを中ごろより九月廿日とせり、雍州府志繁昌の社元針才女を祭る所なり、実ハ辨才天なり、針才女と繁昌と和語相近し依て謬傳なるなり 宇治拾遺むかし出雲の前司といふ人のむすめ、此所にそうせしかば葬るをさめんとて鳥部山に具し行くなりけるに、その死骸ありの所にとりて後ハさらに動らけべくもあらざりけり、せんかたなくて、此所にをさめ侍りしに、その塚のかたへ六七間ばかり人も住つらぬ荒地にて有けるを、後に何人やらん社を建つゝ侍り故有て辨才天と祭せり、籃籃内傳牛頭天王婆喝羅龍王の三女を娶りて名を婆利女といふ○安藝嚴島の弁才天女婆喝羅龍王の第三女なるよしいひつたふ、志らせバ婆利女を弁才天といふなり、故なきにあらず、○太閤秀吉ある社を東山佐女牛の八幡宮の傍にうつし、志らせるる甚だ崇敬をなしたりてあそびしるの所

に安置

花の弟 異名分類 花の弟といふべきもの〻之いふこゝ、夫木に草のたぐひ咲ゆる名ゆゑ

ぬぎ〻八重〻のみゆる也〻菊、顕昭 **榛** 時珍曰 榛樹低く小〻て荆のごと〻叢生也冬の末花をひらく 榛の花の如し條を出て下に垂る長さ二三寸二月葉を生ず初生ハ櫻桃の葉のごし、皺文多くあり、細き齒及び尖りあり其実苞をなす三五相粘一の苞に一又実々と〻て榛の実の如し下ハ上鋭し生ハ青く熟すれバ褐に其殼厚く〻て堅く其仁白し 圀 大さ杏仁のごし、赤皮に尖りあり、然れども空なるもの多し、故に諺に十榛九空○その葉悉く皺也依て和訓ハシバミなり、実を以て秋季とす、

柞 者二三丈葉ハ柏に似て秋紅葉し冬落つ城州柞の森名所あり、且奈良の西南に祝園といふ所あり城州の内なり、元柞園に後祝の字に改む、祝園の神社春日大明神なり此神の森皆柞の木にして秋甚だ紅葉を他邦に稀なる木〻

番船 摂州大坂にあり、江戸へ積出す綿なり、その廻船に一番二番三番ありて江戸へ着岸の遲速を以て損益を定む商賣専ら勝負を争ふ、

初鴨 貞享式此名ハ全く新撰なり、或ハ賞翫とも加減とも いへん今按むるに奉膳式に雁鴨と並ぶ、賞もる処ハ秋冬の差別あり、見聞の姿情を論ぜず、初雁と云ふ風雅をあるに、初鴨と云ふ風味を思ふ、爰を天眼とも天耳とも、鶯ハ初雁と音に喚とも風味を先にあるべきなり、鴨の冬なるハ勿論にして初の字を久て秋とすべし

番綿 肌

寒 秋声賦 其氣慄冽 列子人肌骨

琴 江次第 乞巧奠に御所より筝一張を申下し、東北西北の机上の妻に置く、註に延喜十五年の例和琴を用ふ裏書に云柱を立てる三様あり常に半呂半律を用ふ秋の調子なり 公事根源頭書 半呂半律とハ楽書に云黄鐘調大食調ハ律呂の調なり半律の調なり 夫木 ふるあらしのあ山夜の庭にあく琴のあらしに引をそ

七月庭の立

糸 寂蓮 **藻塩草** 七月十六日なり、内裏の貢の綿なり、俳諧に八貢作者なるべし

新綿 正月の節立春の初日なり、此ころ秋の最中にて、金氣殺伐の氣変動する時に故に必風雨あり、此時節中稲の花盛にて、その花をそ農民恐る 続猿蓑

二百十日 正月の節立春の初日なり、二百十日といふ

廿六夜待 江戸の俗今月廿六日の夜月の出る三尊佛の影向を拜むとて、高輪に群集す、此夜蔭芝居手踊或ハ音曲八人藝、うゝ僧等を仕組者あり、是を一夜藝者といふ、酒楼三月を待遊客是を招き與しぬ、又虫賣菓餡餅いろ〻の商人来りて賑へり、土人幇間虎八云、土人廿六夜祭と称す、其由来を尋るに審なし、近村の民此處に来る海岸に生ずる菰を刈取圓座として月のぼるを待しとなり、今聖灵棚に敷る菰を敷物に賣ハその名残群集もをゞ、高輪の賑ハひに及ぶ、

無三秋 物似柳 御所柳に似て肥満扁 **八月庭**

たゝき 鶺鴒せの部こゝろべ

濁酒 醪ハ汁滓の酒あり、和名毛呂美今俗濁酒といふ

九月

鬼箭 良安云衛矛和名久曽末由美其葉秋ニ至て紅葉ス面色丹の如くして青赤相襍錦の如し故ニ俗錦木といふ子を結ぶ一顆ニして光り小ニして紅あり信州野州の山谷にあり

七月

星合、星の契 齋諧記天の河の東ニ織女あり乃天帝の子なり機梭ニ労役して容を理ニ遑なし天帝其獨居を憐て将ニ嫁せんとす河西の牽牛を夫ニ與ふ嫁して後竟ニ女工を廢ス天帝怒テ責て河東ニ帰らしム唯一年ニ一會せしむ、

星祭、星の手向 周處風土記七月七日の夜庭を洒掃して露ニ几筵を施し酒脯時の果を設け香粉を河鼓織女ニ散し云云注ニ云二星辰会ニ当テ夜を守る者皆私願を懐く或云天漢の中を見ニ爽爽ニ白氣あり光耀五色あり此をもつて徴應ともし見る者拜して願ふ富を乞ひ壽を乞ひ子なき人子を乞ふ唯一を乞ふ事を得無求る者あらしむ三年ニして是をいふ願ニ其祈を受る者あり○牽牛大銅星織女祭河鼓秋ニ至り姬薫姬ニ嫁ス姬百子姬絲織姬朝顔姬梶の葉姬ともし妻梶の葉天の川秋去衣石枕九枝燈庭の立琴紅葉の帳火取香願の糸衣裳を曝ス芋の葉の露索餅銀河銀漢雲漢烏鵲の橋年の渡二星の屋形乞巧奠乞巧針乞巧瓜七箇の池百箇の池妻迎へ舟妻ち舟七種の舟以上おの〳〵頭字の部をもつて註ス

星の加

物 いの部衣裳を曝をといふ条ニ注ス

星合の濱 増山の井伊勢にあり星の逢ふ所なり、

本願寺の籠花 七日 紀事 昨六日晩東西の本願寺末流並家礼花数種を以て船の状を作り中ニ草花数品を建て御門主ニ献ず市を堂上ニ立て諸人ちなををる、

盆市 草市 荷の葉 賣麻 賣盆太鼓賣 紀事 凡七月街市ニ太鼓圏鼓大小加伊雅楽三尺手拭奇特頭巾作鬚金銀箔の紋所を賣是盆踊必用の具なり又盆前蔵子燈篭蠟燭金灯篭草挑灯小行灯を賣是皆中元の夜点ずる所なり又索麺私米乾麩茄子角小豆空閑梨木酬柘鼠尾草荷の葉麻ら、大小の土器供饗膳破子ゑんなりけを賣是民間聖霊会の處用なり、

穂屋 みの部御狭山祭の條ニ出ず

鳳仙花 時珍曰其花ニ頭翹尾足具ゼ翹然ニして鳳の形ニ如し故ニ名く、二月子を下し五月再び植べし、苗の高さ二三尺莖ニ紅白の二色あり大指のごとし中空にして脆し葉長くして夫り桃柳の葉ニ似て鋸齒あり極の間ニ花をひらく或ハ雜色亦變易ス狀飛禽の如し夏の初より秋の盡まで開謝相続て実を結ぶ

木瓜の子 時珍曰其実小瓜の如くして鼻あり津潤ニ味不木なるゆゑを木瓜ニもし鼻ハ乃チ花の落ル處臍蔕ニあり故ニ木瓜灰ニ焼て池中ニ散ず以て魚ニ毒もべし、和漢三才圖会世ニ木瓜と称するの木草の註ニ合ず是木桃にして木瓜ニあらず武州江州より多く来ルを出ス藥肆以木瓜ニ充ル近頃唐木瓜といふ

者あり、人其花を愛せ、是真の木瓜なり、

穂掛 藻塩草 田舎の稲のとり初め新らき藁の

まろぬるとゝふことを入て穂を組合せ、門戸ゝ倉戸ゝ掛て神に奉るを、穂掛と云、

物

鬼灯 和漢三才図会 酸醬 五月小花を開く、

他白葵も亦白色にして蔕は青し、宿根より自ら出る、小児中の白子を鑿去空殼とし、舌上に含て厭吹し、音あり、○今の世に女の童ども吹つゞき吹なり、栄花物語 初花の巻寛弘五年

此所に御色白くうるはしくつゞきたるを咲くらめと云、源氏物語 野分の巻 ゝつゞきしらるゝめるまゝ

ふくらうて、こゝたうしくふき事なるへし、と醒齋亦

瓜 時珍曰南瓜の種南蛮より出る、三月種を下す、沙汰の地に宜し、四月苗を出し蔓を引き甚だ繁し、一蔓十余丈延べく、節々に根あり、地に近き即着其蔓中空其葉の状蜀葵の如く、大さ荷の葉の如く、八九月黄花を開き瓜を結ぶ、正円にして大さ西瓜の如し、皮の上に稜あり、甜瓜の如し、一本に数十顆を結ぶべし、其色或は緑或は黄或は紅なり、霜を経て収む、暖處に置けば留て春に至るべし、○一種南京瓜一名東埔寨一名唐茄子 本草南瓜の下に所謂陰瓜なるべし、

螺芋 形螺に似て大なり故名づく

ど鶴 志の部鴫の条に出づ、

星月夜 星の多くて明るき夜をいふ、只秋季にあり、東花式 古抄に星月夜の名をあげて只秋にありとなり云捨て、月に去嫌の論ふくなれども、是は秋にして月はあるべき発句眼目三ヶ条、此名目あるときは其三句は素秋にして、七句目の月の坐

秋

八月

に、他の季にて異名をもべし、ちなみに例の埒ありとなれども、故翁芭蕉の遺訓なり、

誉田祭 十五日 河内國長野山護國寺地蔵院の縁起に云、當社八人皇十六代應神天皇の御陵なり、母后神功皇后御胎内にましまして三韓征伐の後、筑前の国に於て降誕、御腕に鞆の形あり、故に誉田別の皇子と号し奉る、是ち矢の家を守り給へきなり、此時に頸ばかり治世四十一年仙齢百十一歳の春大和國豊浦の宮に崩ず、玉躰を瑪瑙の棺に納め河内國藻伏の岡に葬り奉る、三十代欽明天皇の勅によりて宝殿を営み、三所の神明を祀る所謂中殿は八幡大菩薩、左は仲哀天皇、右は神功皇后なり、世に神祠多しといへども、當社は玉躰を納め奉る、実廟なりて、八幡宮の根源威験深きなり、毛るべし、○神祭八月十五日なり、先十四日の夜、興の院の御廟前木堂へ鳳輦を御幸なり、翌十五日午の刻還幸舞あり、四月八日若宮祭申楽兒舞隔年なり、ちなみを行ふ、放生会は當社なり、ちなみを記す、

放生會 やの部八幡の条に出づ、但し社説の趣を記す、

菩薩祭 廿二日 肥前國長崎に於て、来船人舩神を祭る、八月廿二日ちなみをほさまつりとなり、和漢三才図会 舟の神を媽祖娘々といふ、俗ちなみを舟菩薩といふ、唐船長崎に来て往々祭る所の神是なり、船中の品物を水揚○長崎に唐人寺とて四ヶ寺あり、福州八石灰町崇福寺、漳州八下筑後町福濟寺、南京八寺町興福寺、この三ヶ寺昔八唐僧住せ今八看主持なり、外に目付寺とて筑後町に聖徳寺といふあり、昔より和僧持なり、ぼさつ祭の日八、和僧も唐装束にて法事修行あり、本尊八観音なり、此日来船人もこの寺院へ参詣せ、

其異体をこんとそ、諸人群集もとゝ

穂芒 花芒 芒の尾花穂を

いよ四箇寺ミも黄蘗派あり、

獸の尾に似る故に名く又花芒ともいふ

牡丹の根分

和漢三才図会 夏月川の圮を採晒乾し古き畑の土と細き沙と以上三品篩和八九月紅き芽を出さを移し栽べし、ちゝ培ふる糞溺を用ふへゝ冬月油滓を用ひて少し根の傍に入る或ハ鮮魚あゝひ汁を灌ぐも亦佳ゝ

頬赤鳥 正字未詳 和漢三才図会 状雀より小く背の色も亦雀のごとし、其頬赤く胸白くして鳴鶉の文あり声青鶉に似て細く高し常に蒿間に棲む

畫眉鳥 同上 俗頬白鳥あり状ち鶯より大く、灰赤色眉白く畫くが如く頬亦白くして間黑し背上に黑点あり、翅尾畧黑く、尾の両端に白毛あり、腹微赤黄色臆下に赤き斑あり、其足赤黑く其声四滑にして多く囀る小鈴の音ある者其声を謂て行鈴諸鈴の名あり

九月

星見草 菊の異名あり

藏玉庭のせまきにてふいろやほゝミぐさまぢをぬ色をまがきにうゑこそ

清輔○異名あるにても星にうゑてよむあり 古今 ひさかたの雲のうへにうゑこそ

鬼目 戸 鴨上

菊ハあるにあらずしてこれなり

人家の垣根に自然に生ず蔓草あり葉朝皮に似て小白花を開き秋実を結ぶ秋季にもるゝの八其実を賞して暮秋その実甚だ紅あり鴨好んで花を啄む依て名とす

時珍曰白英ハ其花をひ鬼目ハ其子の形に象る

菩提子 校量類珠功德經 諸陀羅尼及び仏名を念誦するに

あり木患子ハ千倍あり浄土に生ぜんことを求めば此珠を受よ水精ハ百万倍あり菩提子ハ無量倍なり

花已昔洛東建仁寺の千光国師宋に入て種を得て帰朝し筑前の香椎報恩寺に植られ今に伝ふ

其種を京師の寺に傳てこれを植泉涌寺六角堂叡山の西塔本覚寺宇治の興聖寺に予これを見る一樹に葉二色あり一ツの葉ハ椋に似て厚く大あり又一ツの葉ハ犀に似て其葉に並ありて並より嫩なる細枝を出して花さ紅実を結ぶ其実淡黑堅硬して会疎にして香氣芳しく興聖寺の僧曰是經に説る菩提樹なり天竺此樹下に於て佛成等正覚したまふ樹なりとて樹の高さ一丈ばかり枝極のあり百日紅に似て甚だ奇樹なり

杜鵑草 大和本草 和名和品葉ハ紫草に似て短く小く筋多く六歩あり中より葉出て又花の形をなせり葉ごとに小紫の點あり杜鵑の羽に形に似たり志賀の如し、並の高さ一二尺にすぎず

無三秋物

辨慶草 和漢三才図会 景天和名以岐久佐俗にいふ弁慶草、本綱に景天極めて種易し枝を折て土中に挿ば、澆灌旬日便ち生ずるなり二月苗を生ず脆き並微赤黄色を帶ふ高さ一二尺ばかりを折ハ汁あり葉淡緑色にして光沢あり葉に厚く狀長き匙の頭及び朔豆の葉に似て表裏共に白花を開き実を結ぶ連翹のごとくにして中に黑子あり粟粒の如し人皆盆に盛て屋上に養ふ故に辟邪と大を辟べし故に慎大草の名あり按ずるに景天佛甲草に似て大なり、ちゝを折取て掖間に倒に懸るに日を経て凋まず後地に栽るに亦活るもの馬齒莧に勝れり蓋弁慶ハ源

の義位の家臣ゐて女童相伴へ強弊の士ゝ故ゆ相比ゝてちせを名づく以岐久佐も又洛の字訓ゆ

瓜 時珍曰六七月黄花をひゝく五出微胡瓜の花ゆ似り蔕瓣具ゆ黄あり其瓜大さ寸なり長さ一二尺甚ゝき八三四尺深緑色皺の点あり瓜頭鼈れ首れちゝ嫩ある時皮を去る蔬ゆ老るとき火さ杵のごと

八月

紅蕈 和漢三才図会 陰處ゆ生ず其繊紅色裏白く細き刺有て毒有 **蛇蕈** 大毒有故ゆ人近よゝ蛇穴ゆ入ば

蛇穴ゆ入 月令仲秋月雷始收邑蟄虫穿戸 和俗春の彼岸ゆ出秋の彼岸ゆ入と云

七月

とゝ一妻 とゝ一ハ乏の字をよみ稀少の義女年ゆ一度あきゆあふをとゝ一妻とよみる奇ゆ珍しき妻ゆ故ゆ織増山の井 芋環きくゝ活法の書ゆ織女の異名のやゝゆ出せるハ誤ろ

織女のあゝ一ゆ有べ 万葉 玉葛不絶物可良佐宿者年之渡尓直一夜耳

年ゆ渡 織女の年ゆ一度天の川を渡る意

燈籠 一切経音義燈篭又爐ゆ作る 紀事 九中元燈篭を用ふるて寛喜前後ゆ起て今ゆ至て相続て故事ゝ定家卿明月記 近年民間ゆ長竿を建てその末捕ゆ燈篭を設け紙を貼一灯を挙て遠近ゝ照ちせをそゝ流星ゆ似ゝ 五雑俎 宋の初ゆ中元下元皆燈を張るゝ上元の例の如一太宗淳和年中始てちせをやゝ○本邦の俗中元の夜家ゝ燈を張て廿四日乃至晦日ゆ至る或八朔日ゆ三十日ゆ至るもあり又白き提灯を出すもあり○高燈篭折掛燈篭花燈篭禁裡御燈篭キリコ燈篭以上各頭字の部ゆ

燈篭影燈篭舞燈篭揚燈篭増山の井ゆこんとり其のうち未考

燈籠踊 紀事 洛北岩倉花園両村少年の女子各大灯篭を戴き八幡の社前ゆ聚り男子大鼓を撃笛を吹踊をもゝ是を炬篭踊ゝ云ふ頭ゆ戴ゝ所の灯篭踊る女子の家々春の初ゆりこれを作り互ゆ其作る所の模様を秘ゝ云ゝ

鳥居の火 せの部施火焼の条ゆ注ゝ

鳥屋勝 鷹新毛を生一羽翼全く備り人ゆ屋を出るの時逸勢特ゆ称ゝ云ゝ○去年ゆりハゝ中ゝ比ゝ一ゝ定家狩ゆ一ゝ名の秋ゝ云ゝ

蜻蛉 秋津虫 和名抄 蜻蛉 和名加乎呂布 和訓栞 ヤンマを以て秋津州と名づく

富 呂華紀年 神武天皇高きゆ登て此邦の形蜻蛉ゝ似たるゝ云ゝ

草の花 風俗哥 あゝとゆ入てこゝやこんあゝとみくゝの大ゝ稲の花をゝ云ふ

頼桐 大和本草 倭俗唐桐とゝ云ふ高サ二三尺ゆ過ぎず夏秋花をひゝく花繁多ゆて盛り久ゝ

苞麻 和名唐蓖 又くゝぶ一ハ葉ハ大麻のごゝ一甚ゝ大あり夏冬の間花穂を抽て色黄ゝ高さ丈余ゆ及ふ実あり大毒あり

兼三秋物

番椒 天井守

和漢三才図会 番椒 南蛮胡椒 今唐芥子、二月種を下し葉柳の如くして小亦胡椒の木の葉に似て和く五月小白花をひらき実を結ぶ数品大小長短ありなると聞きしとの種あり初めは熟すれば紅あり秀吉公朝鮮を伐ときに彼四より伝る故に俗に又高麗胡椒といふ○天井守番椒の一種なり土を和く故に名くとぞ 猿蓑 俳諸 唐の芋 是を連禪芋 芋といふ 藷 ありいろ色つく、去来恭曰毒少し、煮て食べし 時珍曰連禪芋魁大 鳥 みて子少し○蓋紫色を帯ぶ味甘く栗のごとし

八月

富賀岡八幡祭

十五日名所記 江戸城南深川にあり祭る所鶴が岡に同じ 宗門 深川第一の大社なり 或ハ云ふ神体ハ菅公の作なり源三位頼政深くあがめ崇敬し其後千葉家に移り足利高氏に使へ基氏持氏に至り後上杉に傳へて太田道灌ふかくあがめを信仰せり 廣石集 寛永元年長威法印夢のごとくして永代島に宮居を建立し同八年成就せり○深川の土人本居神と祭礼八月十五日放生会あり三十年に一度祭を行ふ

豊浦祭

神社啓蒙 長門國豊浦郡亀山にあり祭る神中ハ應神天皇左ハ神功皇后右ハ仲哀天皇なり 二十二社註式 人皇五十六代清和天皇貞観元年男山に遷座の時行教和尚行宮を造りしを勅請せり後土御門院文明年中建立せり○今八月祭あり二月十四十五日の両日亀山祭あり安徳天皇の御祭礼あり阿弥陀寺に御陵あり海辺に宮あり此祭前後四日の間鳥飛ぶを得ず又平家蟹赤間が関の海辺に上る者ハこれ是先帝の御祟なり又九月十四日十五日八幡春日の両社を祭る國主より馬二疋を牽せ競馬あり是八幡祭なり

烏頭

蘊頌曰附子其苗高三四尺莖四稜を作せ葉交互に似て其花紫碧色穂を作せ其実細小桑椹の如し 黒色本附子一物を種成熟するに至て四物あり天雄烏頭側子附子是なり

黄蜀葵

時珍曰二月種を下し或ハ宿き子土にあり生ず夏に至り始て長ず葉の大さ蓖麻の葉の如し深緑色莖を開く五の葉ありて人の爪形の如し秀に小き尖あり月花を開く大さ椀の如し鶏黄色蕊心六瓣まして側て下に向き午に収て暮に落亦呼て側金銭花と云其莖長きもの六七尺皮を剥て繩索にもつくり

木賊刈

禹錫曰木賊苗の長さ尺ばかり叢生し根毎に一幹花も葉もなし冬を凌て凋む四月これを採○時珍曰木骨を治る者ちこれを用ひ磨擦して光沢あり木の賊に似たり 和漢三才図会 物を磨て砥の如し故に砥草と称せり○本邦秋月に採る

胡黄連

千振 和漢三才図会 苗の高さ五六寸一根数莖其莖細くして淡紫色葉地膏草に似て小く七月花を開く桔梗の花に似て小く黄色○千振 大和本草 胡黄連ハ黄連に似て大なり黄なり色味苦し妖草日本にあり未詳千振と秋白花をひき葉細く味甚だ苦き小草山野にあり

酴醾酥

大和本草 酴醾花の條下に云本邦の八白花千葉菊の如し依て苑茶して菊いとくらふ中花に黄色なる者あり農政全書に記せり故に黄色の

醯を酴醾醯といふ、

唐黍 江戸の俗とうもろこしといふ　春

の日　待宵ある殿を唐黍といふし　こもろこし ん　荷兮

九月

杼の實 蘊須曰三四月花をひらく、黄色、栗の花に似より、つくらせし 山木にて大木あり、葉の大さ七八寸、実栗よりやゝ大也、餅に作る、麪として凶年の食とす、木ハ斑文あつて諸の器につくり、箱とす、甚美なり、木曽の山中に多し、是を麪とするに、其粉を熱湯にてこね謂へ、温飩のごとく棒に挟て温なる内に急にこれを伸ぶ、冷すれバ堅く縮つて伸ず、其手廻し甚急なる故に俗諺に橡麪棒なるといふことなり、

罌子桐實 大和本草 荏桐とも油桐とも云、‖ダモとも訓ずるハ非なり、桐に似たり、其実大毒あり、食ふべからず、実に油多し、民用をたすく、此油をぬりて青漆の如くなる法あり○時珍曰罌子桐の実を荏桐と名づく、罌子ハ実の状罌に似たるに因てなり、荏ハ其油荏の油に似たる也 和漢三才図会 濃州江州多くこれを種、油にしぼりこれを販る、其功荏の油に同じ、煉成て漆に代ふ、桐油漆と名く、五色をぬるべし、常の漆ハ白色を塗ことあたはず、又松脂をくはへ、船槽を塗るに水を漏さず、故にこれをチヤンといふ○年浪草に桐油ダモ、同物とよぶハ可ならん、

唐柹 無花果の異名也、‖いの部によるべし

‖**團栗** つくらせし 櫟の子之数種あり、ドングリハ櫟の一種小橡といふ木の実なり、推に似て大也、味澁く食ふべからず、橡の形状ハとの部によるべし、

ち 七月 **中元** 十五日 修行記 七月中元ハ大慶の月、道書に云、七月中元の日、地官下り人間の善悪を定む、諸大聖普く宮中に請し、道士その日夜に於て経を誦し、十方の大聖ひとしく其名を録し、餓鬼囚徒ともに解脱を得せしむ 五雑俎 道経に正月望を以て上元とし、七月望を中元とし、十月望を下元とす、遂に三元三官大帝の称あり、是俗妄の甚しきもの、

地藏祭 廿四日 紀事 洛外六所の地藏詣なり、加茂御泥が池、山科、伏見、鳥羽、桂、太秦これなり、凡一日六所の行程十四里也、文徳天皇仁壽二年、小野篁地藏の像六体を造り、木幡の法雲山大善寺に安置せる故にこの所を六地藏村といふ、其後保元二年平清盛六ケ所に堂を造り、これをこゝに置く、七月廿四日供養西光法師これを與ひ行ふ、今に至りて七月廿四日諸人六所に詣す、これを地藏祭といふ、洛下の児童も又各香花を街衢の石地藏に供して、これを祭る、又今日六齋念佛の徒も、又六所の堂に詣て太鼓を撃鉦を鳴し以て踊念佛をなす、俗これを六齋太鼓と称す、洛東光福寺千菜寺之一派なり、

ちゝろ虫 きりぎりすの異名 異名分類 ちゝろむし夜ふく風やさむくなりぬれバにしきよさる声うれし、

兼三秋物 **茅** ちがや 大和本草 白茅本艸に藾須云、春芽を生ず、針のごとし、俗にこれを芽針といふ、小児好て食ふ、毒なし、血を破り血を止む是なり、

九月 **重陽** 潛確類書 重陽ハ魏ノ文帝の鍾繇に與る書に、歳往き月来て忽ち復九月九日、九を陽数として日月並び應ず、故に重陽といふ、俗其名を嘉して長久によろしとて、故に宴して高会を享す、

重陽宴 公事根源 九月九日ハ節日として侍せぞ菊の宴行ハるゝ也、これを重陽の宴とも東九月九日ハ月と日と九陽の数に叶ふがゆゑに重陽といふなりし

八天子南殿に出御ありて節会行はるる上達部御子達
らり始て其道の八こゝ〻擬韻絃管文つくり文臺によそ
講ぜらる十月の旬のころあるべけれども氷魚こゝろ例あり
又羣臣に菊酒を賜ふる大〻〻八五日の節会にあるべし御帳の
左右に茱萸の袋をかけ御前に菊瓶をおく又茱萸の房を
折て頭に挿めば悪気をさるといふ本文あり下畧

千代見草

ちよみくさ

菊の異名あり慈童八百余歳の後出て彰祖と名を替て長寿の術を魏の文帝に伝へ奉り文帝百歳の寿を成ることあり和哥にも菊に千とせの秋を詠ずるを珍しかるべし此意にて

契草

ちぎりぐさ

菊花の異名之藏玉陸奥国に兄弟あるもの世にありて別れけるとき兄庭前の菊を一本を二つに分て意ありて

千代見草

ちよみくさ

菊の異名あり慈童八百余歳の後出て彰祖と名を替て長寿の術を魏の文帝に伝へ奉り文帝百歳の寿を成ることあり和哥にも菊に千とせの秋を詠ずるを珍しかるべし此意にて

契草

ちぎりぐさ

菊花の異名之藏玉陸奥国に兄弟あるもの世にありて別れけるとき兄庭前の菊を一本を二つに分て意ありて名付けるとあり九月花を開く花蕚の下に紫へりもつて下向して此ちぎりをこう云ふ〻〻この菊二に分ちて〻〻かと故なりとあり

り

魚三秋物

律の調

索隠曰按ずるに律十二あり陽六を律と云黄鐘大簇姑洗蕤賓夷則無射陰六を呂と云大呂夾鐘中呂林鐘南呂應鐘是也名づけて律といふ○貞徳曰ものこと共らく秋あり春にあらざれば呂の声は春にあるべき道理なれば共其さ〻〻なるべし呂を雑〻〻〻

八月

龍膽

えやみぐさ

三才図会其葉笹の葉に似て厚く九月花を開く花蕚の下にて形のごとく上にむく花中に蕊子あり又白花の者あり笹龍膽〻〻あり〻〻

八雲御抄えやみ草まんさう〻〻〻○思ひ草八重垣龍膽をりふしまく露くさをひよ通具卿説

道のへに尾花がうへの思ひ草今さ〻〻はあらじ物をあるらん
○〻〻に真渕翁云こい木丹は梔子の花也と出る是あり源氏をとめ巻に四季をいへるその夏の方に花橘撫子さうびなどくさ〻〻の花くさ〻〻〻あり是れ夏あるべしてはくちなし〻〻なるべしくちなし〻〻○尾花がうへの思ひ草は龍膽と定家卿の御説あれども〻〻〻〻〻にを龍膽といふべし誤とも〻〻〻

九月

鯉魚風

九月の風あり李賀詩門前流水江陵道鯉魚風起芙蓉老

ぬ

魚三秋物

零餘子

野山

薬と草蘚と蔓葛の形状混雑して分別あるべし〻〻草蘚亦零餘子あるべし山薬のごとく〻〻故に諸説草蘚を以て山芋と長山薬は其蔓紫色を帯ぶ其葉四く尖りあり全其花白色穂をなして下に垂る草蘚は其葉四くして尖り四稜あり其蔓青色淡黄の小花をひ〻〻隨て莢を結ぶ三稜あり山薬もまた莢をむすぶ故に見やすこの〻〻

九月

白膠木紅葉

時珍曰楠木木の形椿のごとく五六月青黄色の穂をなして一枝に累々として七月実を結ぶ鹽膚子と名づく葉の上に虫あり五倍子を結び成す

3

八月

縷紅

るこくさ

せとまめ

蔓を出し八月に紅花をひら〻〻形丁子に似て長さ六七分の花あり愛もべし

瑠璃鳥

和漢三才図会碧鳥俗に留里大さ雀のごとくして頭背翼上翠色頰頷臆下に至て純黒胸腹白く蓄脚尾共に蒼色其声圓滑にして清く囀る

を

七月

鬼の洞念佛

七日より十五日まで滑稽雑談河内八瀬河の西の山中

にあり、俗鬼のすむ洞といふ、口狭く中闊し、高さ二丈ばかり、深さ三丈、昔酒顛童子、此洞より丹波の大江山へ移りしといふ、或ハ昔叡山に一童あり、僧徒其美しきを愛す、歓酒交歓の時、時人を齩血をとり、酒に和してまぜを飲む、一旦魅となりて此洞に入、云々 此話羅山詩集酒顛童子の洞に題せしものゝ序に見えたり、雍州府志 毎年七月七日より十五日に至り、村中の兒女此洞に聚りて鉦を鳴らし、大に弥陀の号を唱ふ、是を先祖祭といふ、

踊 書言故事 王子醇など漸可を平らげ軍士にをしへて訝鼓戯をなし、遂に世に甚だ行はる、子醇四人と對陣せし時、軍士百余人に命じて訝鼓をなさしめ、隊に軍前に出す、虜見て驚き愕く、遂に之是を撃破る、注に云 訝鼓戯ハ、楽人雑劇をなして跳躍をなるなり、世人ならせるに效ふ、○本朝の俗、七月十四日より晦日に至り、毎夜大人小兒街頭に踊をなす、○懸踊、念佛踊、題目踊、燈籠踊、伊勢踊、木曽踊、小町踊、七夕踊などあり、各其頭字の部にくはし注す、

折かけ燈籠 用捨箱 魂祭にもちひし折かけ燈籠も江戸にハ絶たり、中略 續虚栗 貞享四年 附句刻 親ハ鬼子ハ口をあきき蓑虫よ 其角 折かけをらん月の文月 野馬 中略 竹藪を折かけて、その侭垣にするを折かけ垣といふ、此燈籠も竹を折かけてつくる故の名なり、されど今ハなく、家ごとにて青くりしとおなじく、よく竹をあまして作るもあり、名のみとく折かけて上をおほくうちの をろきもあり、一ツ一ツに異なりし、

麻柄の箸 聖霊祭に供ふる 箸之 続猿蓑 かなしさや麻木の箸もおしをらへ 惟然○時珍曰 大麻其稭白うして稜あり、蛭虚燭心とすべし

送り火 むの部迎へ火の条に注す、

女郎花、茶花 和 漢 三才図会 女陪之山蘚に生ず、高さ二三尺、莖に稜理ありて蒿の莖に似たり、枝両々對生し、節の間に葉を生ず、其葉三七及前故の葉に似て細く長し、七月穂を生じ花をひらく、最細小にして黄色愛すべし、本朝文粋に源順の詩に云 如蒸粟、俗呼為女郎、者是なり、随て子を結ぶ、花白き者男倍之と名づく、大和本草 敗醬、藻塩草に白花あるを俗にをとこへしといふ、又オホトチハ女郎花に似て花白きなるをとこへしをなの花とも、より敗醬と名づけしハ、此花葉の臭、醬の損じたるがごとし、本草によりて今試るに然り、○此花を女子の艶姿にたとへて讀て、哥俳諧ともにする同じ、古今 名にめでて折れるばかりぞをみなへし、われおちにきと人にかたるな 僧正遍昭 続猿蓑 をみなへし鵜坂の杖にかくれら せなな

荻 荻の風 荻の声 大和本草 荻ハをぎとよしといふ、馬莧 淀川其外處々にあり、山野にも水辺にも生ず、中実にしてよしに似たり、少ハ其中とあり、葦とはドり生じ、似たるもまた出草なり、○荻の葉に風をよりて音せるを荻の声ともいふ、荻の上風などもいふ、

翁草 大和本草 麥門冬の一種なり、葉ハ大葉の麥門におなじ、暮春及び夏の初め純白なり、故に翁草といふ、後漸く青くなる、根に門冬あり、尤大葉麦门のごとくゆりて異草之 滑稽雜談 按ずるに和名鈔などに白頭翁を翁草と和らげたり、然れども本草綱目を考ふるに別種なり、白頭翁ハ俗にいふ猫草に略似たり、今云翁草にハあらず、翁草ハ初生の葉純白なり、秋月紫花をひらく、穂の如し、猶考ふべし 又菊をも翁草といふ、混ずべからず、九月の部に注す、

弟切草 青くさうり 薬師草 和漢三才図会 初生地膚子の秧に似たり、両々相對し、枝に椏あり、莖葉ともを按めば汁あり、須臾をれバ紫色に

爽ぶ、六七月小黄花をひらく、單五瓣、ようて細き蘂あり、莢を結ぶ三稜あり中に細子あり、茎に用ふ相傳ふ花山院の朝に鷹飼あり、晴頼と名づく、其業に精しく神に入鷹傷を被ふりてある時八葉を挿して持ち来る傳く紀八愈曰人草の名を乞ひ問ふる秋て言ぶ然るに家弟密に持ち来る露洩晴頼大に怒て持ち来を刃傷ふ故に世人鷹の良薬を持ち来る弟切草と名づく○又薬師草と名づく

慈鎮和尚鷹百首　秋の野ふまよりなをこそ青くもろ〳〵に鷹やさ〳〵ゝゝらん

旋覆花

蘊頌曰二月以後苗を生ず多く水の旁に近し、長さ一二尺以来柳葉のごとく、莖細し六月花を開く菊花の如し深黄色七八月に熟す

秋物

鬼芒

時珍曰葉芽のごとくして長さ四五尺、基に快利ありて人を傷ふ鋒刀の如し

芋生の浦梨

芋生の浦伊勢にあり和哥に浦の浦梨名高しとあり

又古今　をふのうらのうらなしさもあらばあるかなきかのうらもうらまん

小田守

山田守　九田を守り稲を防ぐ人畜の傷残を防ぐ

八月

晩稲守

尾花の粥

大内記田原康富日記　文安五年八月朔日乙卯天尾花の粥の事その由来何事なる自然見及ぶのよし聞しめ及ぶ甚子細を尋ぬ返答一畢ぬ海人藻芥　八月朔日小花の粥内裏仙洞以下令用給良薬云彼粥調法薄黒焼ヲ粥二入合也後水尾院當時年中行事　八朔の条云夕〳〵の御膳に初献よりそなへを供ふ

鬼のおこ草

茶苑

の事之志の部

白粉の花

和漢三才畜会白粉草字未詳春苗を生ず冬枯る高さ二三尺叢生す葉淡青うして柔く白鶏頭に似て微小く円し其花朝以後萎み暮に至て開く深紅色五出単葉まれに萼の長さ一寸余赤紅花の中に紅の蕊細糸の如く蕊糸の末に黄色皺胡椒の如くして中に白粉ありこれを採て婦人の面に塗光澤鉛粉に優れり中華の書に云へり外国の物なりと大和本草に云へり

車前子

蘊頌曰俗春の初め苗を生ず葉地に布く匙の面の如く年を累ね者長さ又余中に数莖を抽て長き穂を成す毘の尾のごとし花甚細密なり青色微赤き実を結ぶ茎麻性ごとし今人五月苗を採て七八月実を採る滑稽雑談　者苗或八花をひらく古来まれ実を以て八月の部に出す古実に准べきか

尾花

ほの部穂芒の条に出す

思草

草の部龍膽の条にあるべし

黄蜀葵

ワウスケトロロ　二名一物との部にあるべし

落穂

詩経　此有滞穂伊寡婦之利注云滞遺穂を棄るの意なり収成の際に洩れ漏れの禾穂の餘あつて尽く取らず又鰥寡にあたへ共にそなへ見

列子　拾穂者行て歌ふの如き者暖に満其背淡斑の文を生ず刀刃の鋪くるが如し故に鋪鰤と云ふ八九月滞の水草の間に子を生ず後漂泊して流に隨ひ下り死を是落鮎あり其下を捕ふ名づけて下り簗と云九月より肉瘦てあり甚劣

九月

岡崎祭

十五日或東天王祭八十六日　九月十五日洛

東岡崎より、名勝志九月十六日祭礼云々、紀事東山岡崎正一位東天王祭神奥一基鉾七本あり、その内一本の鉾、鰹下より埴を以て鷹二連獵犬一足を造り、彩色を施す是を犬鷹鉾と云、其傍より感神院の三字を彫刻を疑らく八舊感神院の鉾なり、云々、當社八聖護院の杜なり、故有て吉田の地より移す然るに日神社亦岡崎にあり、故に東西を以てせをかつ、雍州府志犬鷹の鉾八村人神宝と称してをを崇む、之候祭獸者祭之於天、戮禽者殺之食也、

豺祭獸

月令此記戌月

弟草、小女草

菊をいふ、ををめ草同前と藻塩草に云、梅を花の兄といひ、菊を花の弟と云故なり、古歌にあひあり、小女草あり、き瓜なる花、

翁草

菊をも松をもいふ、住吉の里に八あて、ゆ、五位の松と云て年ふるく松あり、この此松の神やあるらん、後に八化して翁と成て住けり、常に心をもはげまして琴をもてべ又庭に菊をうゑて愛しくり翁が奇我庭八まつの松蔭ちりをもむ翁が門の花もさくらん、此故事によりて松をも菊をもいふ、

老母草の實

三四月一莖を抽ぶ淡黄花を開く、穂の如し、其莖高く長く、隨て実を結ぶ、生八青く熟すれば真紅、累々として天南星の実に似て可愛、三才図会万年青、葉芭蕉に似て隆々として表へ裏に其多壽を以て万年青と名づ、大和本草唐に八一切祝儀に用る、花鏡に云、

落栗

熟せんとして子出て其苞自ら裂て地に墜る物是之

遲稲、晩稲

時珍曰粳稲早中晩の三収あり、六七月収る者を早粳と云、八九月収る者を遲粳と云、又呼て晩稲と云、

落水

李環拾遺者を晩粳と云、云、ちを晩稲とあり、田のあ〜ゆ〜ゆ〜と云、畿内に八所〻稲を苅て後田に菜種を植る之両作所と云、田の水を落すに八菜種を植る用意なり、

おもさと

やくらせり、飲酒の木と日事紀に載る、しるりの是なり、秋甚紅葉にして花を好む者秘蔵して ちをを挾む、早粳と云、食に尤つ美〜、

童相撲

扶桑畧記延喜元年七月廿八日丁丑童相撲廿番を御覧綾綺殿に於て行事あり、古今著聞集延長六年七月六日童相撲廿番仕て舞を奏す、

燕三秋

物木綿取

桃吹、和漢三才図会其実桃の如し、四つに裂て中に白綿を出す、古れを桃吹と云、綿車を以て中の子を繰り去り竹を以て小弓を作り弦を牽て綿を弾くそれを白と云、

若煙草

和漢三才図会煙草、相思草、淡婆姑、淡芭菰、羅山文集佗波古希施婁、皆番語也云云、按むるに天正年中南蠻の商船始て此種を貢す、以長崎の東北土山に植、二月種を下す、五月移し植、新芽を摘去り蕊を除くて、毎日怠るべ〜、高さ三四尺葉南蛮に似て長大七八月蕊を采る葉莖を霜てらちをををし、盦一宿して取り、一蕊ごとに繩にまきみ編るがごとくして晒し乾し、一夜露宿して後晒し乾す黄赤色となる、皺を擴げ袋を収むべし、

八月

楓菌

和漢三才図会ちをを

渡鳥

此月諸鳥異國より群飛して山林江湖に来る是を伝ふるとい、

月

度會新嘗會 外宮十六日、内裏より初稲内宮十七日を伊勢両宮へ奉らせ給ふ、大嘗会とゆふ、御即位の後、日本國中の神々へ御饌を奉らせ給ふをもて、新米を奉る故に早稲米の御祭と云、

吾亦紅 陶弘景曰地榆其花子紫黒色豉の如し、モカウ 本名玉豉一名地榆比叡山鞍馬及び近辺に生ス、宿根より二月苗を生ト初生地に布く、独並直上、高さ三四尺對しかて葉を出ス、榆の葉に似て稍狹く細長く〻〻鋸の齒の狀に似て青色七月花をひらく、櫛子の如く〻〻紫黒色、

か

七月梶の葉姫 棚機七姫の内〻 異名分類 梶の葉姫ハ八雲御抄に梶の葉にて書、皆由緒あるなり、渓雲問答に芋の葉は雨を現の水とし梶の葉七枚に奇首づ書あり、是芋より皆二星を祭る具、要の物を以て多づくとこれなり、

梶の葉 年浪草 和俗七月六日市中に穀の葉を賣、明夜詩哥を書て以て二星に供ずる所なり、又短冊に楸の葉を用て詩歌を書く 和漢三才図会 和名加知 俗云加 按むかしは楮の皮今多く紙に造る又布に織て昔木綿と称せ今は亦祭祀の人木綿鬘に被る上古の衣服に象る歟、今二星に供ずる時詩哥を穀の葉に〻〻に牛女神を祭るの故、木綿の義に象るか 菅章長高辻家朗詠抄に昔余吾の海に天人下る羽衣を獵師に盗まれ心ちなく獵師の妻となり八年月を經て羽衣を取得て天上し再び人界に下りて獵師と共に天上せ女ハ織女となり男ハ牽牛となる其再び天へ上るの時梶の木の上より糸をおろし是に取付て登る故に二星の手向に梶の葉を用ひ願ひの糸とて五色の糸を用ひたり、畧して爰に記す 淡海志に〻〻、

梶の鞠 部飛 あの

河鼓 島井翰の 部二星 の条に出つ

烏鵲橋 藻塩草 鵲鷺記 条に出つ

云史記に云瓊に夫婦あり夫を遊子といひ婦を伯陽と云、偖老を契り子ハ二八の候陽ハ三四の旬也と云、狀文の心ハ、遊子十六歳伯陽十二歳より夫婦となり五に志切なり、共に月を愛もるあり限りなし、夕に八月の出るを待て里に行、曉に八月の入るを惜こそ高挙に上る、伯陽九十九まりて死ぬ、遊子深く歎て月を形見とする、或夜伯陽鵲に乗て空を飛ゆきて遊子殊に歎きて百三歳にて死せり天の星となりて烏に乗て天を飛行て銀河に望て川を隔てて人〻を有て泣るを帝釈哀ひ水をあび給ふ故に水帝釈善法堂へ御参の日まれに水をあび給ふ故に泣るを許さる、年に一度と云ども人間の為に八日一夜なり、此と烏〻群と羽をつらぬ橋となり彦星織女を通ス、是を鵲の橋と云ふ、

大和本草 鵲ハ鵲肉東北の国に多し、鳶紫に多し、朝鮮より来りしなる高麗烏と云、鳩に似て黒白あり、尾長し、本草に載る、

門茶 せの和 振徒 の条に注ス、

懸躍 紀事 十四日より 晦日に至て夜に入大人小児街頭に躍を催し或ハ又各回列して相知處の家に至て大に踊躍を成是を懸踊と云、掛らず所の家再を〻を催し酬ゆ是を返〻と称ス、

蜻蛉 うの条に注ス、

螢 との部に注ス、

蜻蛉 いなむし 鐘切同物 いの部に注ス、

柏ちる 御仝 柏ちる 夏ちり無言抄

に秋と有ハ、俳諧にかぎりの常盤木の散ハ夏之部中略令此國の人の中柏ハ初秋に紅葉してちるものといへり、此注につきて無言抄なとにもされたりとこそなれ至、増山井 夏の部に貞徳説夏なり、又一説秋之 貞享式 此柏ハ御令に説ありて論語の松柏を證文とし、畢竟ハ雑となせそれも知るに散字を結びて決す秋と定べきあり、下略

兼三秋物

桂男 つの部月の桂とよる条ニ出づ、

雁

来紅 葉鶏頭 時珍曰雁来紅、並葉穂子ともに鶏冠と同し、其葉九月鮮紅之ちなを望に花のごとし故に名く、呉人呼て老少年とも又一種六月葉紅の者あり十様錦ともあり○雛頭や雁のくる時初赤―芭蕉 増山井 雁来紅一説かまつかの花云て枕草紙にかまつかの花雁の、来と書とえり云、

桲 時珍曰桲高樹大葉圓にして光澤あり四月花をひらき黄白色、実を結ぶ青緑色、八九月熟を○烘桲、醂桲、白桲、胡盧桲、樹練桲、木淡桲、似桲、伽羅桲、四座桲、筆桲、田舎桲、君遷桲、樽桲、椑桲、以上各頭字の部にゆづりて注す、

桲餻 蔵器曰桲餻黄桲に米粉を和して糗蒸てふ児にあたふ食して下痢下血を止む、

案山子 彈 烏却 僧都 添水 和漢三才図会 藝文類聚云古者三皇の世にハ人死して未棺櫬殯葬あらず、裹に白茅を以し、これを中野に投ず、孝子其禽獣の食ふを視るに忍びず彈を作以てこれを守り鳥獣の害を絶つ、按ずるに俗にいふ案山子今田圃の中に草偶に弓を持せ以て雀を防ぐ之備中國湯川寺の女賓僧都迹を民间の奴に晦まして田に入稲を護以て鳥雀を驚らして務ともに今に至て多く雀を懼を畱

靈を僧都とよする 續古今 山田守僧都の身こそあはれなれ秋はてぬればとふ人もなし 玄賓 和訓栞 傳燈録にいふ案山子なりといへり鹿こゆじあるべし、山田のそほづといへるも是なり信野にて節分の夜いわし豆がらをさしてやきかゞしといふ焼かゞしの義なり、埃嚢抄に又灸串と名くといへるいわしを焚ハ魍魎の畏るゝと傳ふる意なり 増山の井 そほづハ添水と書て水辺にかけて水のちからを添ふるを出まで鹿おどしとも暑かぐしともよべるハ別の物なれども、玄賓の山田守をそほづと僧都によそへてよみ給へる故にあるおどしの人形と心得て古哥にもあまた多し 然れども実ハ別の物なり 石川丈山覆醤集 竹筒尺餘上短く下俯し桔槹に髣て首を下流に矯さしむる故尾片石を鼓く、旋轉俯我巨々の声を発揮す、遠心院云我巨 八分筒り鳴声也 声韻凡なりといへ是添水なり、

鎌帛 中に 躬恒秋藏抄 家の鎌といふ物を立て、又それに鍬といふ物をそふ、菅笠をきせて立しきぶ、鹿の田をもちぬと思へりそれを鎌帛といふ歌に 我宿のかこゆしめ立るもうしのやまが小山田に鹿のこのよすまぬ、

鹿火屋 年山紀聞 説に鹿のつく所に小さき家を作りて塵埃何くれの臭きものに火をくゆらし、烟をもつて鹿をやらふやうと心得べし、或ハ香火屋又置蚊火などの字をかりて書る所もあまりよりて、すぐふ人もあれど、用ふべからず、又火の字渦りてより、頸翳から飼屋の説に迷ふ

かせぎ 鹿の異名也 玉葉 山ふかみあそのふむぞ云、るゆかせぎのけぢかきにせよ遠ざかるほどぞなかりし 赤染家集 朝おけあらざとをあくとおこえつゝたかせぎのちかくなそる之ゝ

肩抜鹿 匡房卿哥 かぐ山のたぐかづ下ようらしとけて肩ぬく鹿ハ妻こふなせど 旧事紀才二云 復令中臣祖天兒屋根命忌部

祖天太玉命内抜天香久山之真牡鹿之肩而取天香久山之波波加而令占焉古事記の説なれハおほよそ神代より鹿の肩骨を抜てうらなひたるにて其かの木ハ和名抄ニ云櫻桃 和名波々加 一名朱波 佐久良 延喜式ニ云元年中御卜料波々加木皮ハ大和國有封の社より仰て採て

片鶉

夫婦相そふて離れずを進らしむ、

駈鶉

付て居るなどいふ、

藻塩草 鷹狩あり、あせハ馬上にてとるを居てのり立て鳥に合するを云之

八月

菅大臣祭

十六日 雍州府志 京四条の南、後の小路西洞院の東にあり南北道を隔て是善公の宅地也その内北に菅神の祭あり是菅神降誕の地なり故に社を建てこれを祭る、神社啓蒙 或人云此所昔菅家の館之一夜飛梅の天神といふハ是なり、今に飛梅の跡あれ地に存せり、又説に文字の読まず菅神をはじめて遷座の地なり、洛の人阿米神と称せり、例祭八月十六日、社辺の氏子是を祭る又神輿一基、童子素袍供奉、社僧あせよあとこのふ、

亀戸天神祭

廿四日○江戸本所の末亀戸村にあり祭る所筑紫太宰府の神体に同じ寛永三丙寅年菅家の末葉大島居信祐建立せし、祭礼八月廿四日本所牛の御前と隔年なり、當社の神宝天國の剣といふありてあれ外後水尾院の宸筆安楽寺の毛硯、すみちの文臺大閤秀吉公の文臺之連歌師昭巴に賜ふといふ紅葉の蒔絵あり 等神庫に蔵祭の日奉幣神楽等あり近来正祭あし、

貝割菜

菜の芽に出 まの部間引る

刈萱

大和本草 霜草、茎葉節穂皆葦のぬくしそ小也、宿根より春苗を出せ葉に青白のすぢ筋多く、まず其本末に通せり、四五月穂を生せ中華の書にいまだ見えず葦茅の類あり、カルカヤといふ 新撰六帖 嵐ふく岡辺に茂るかるかやの上葉の露ハいつこそれぞれ、衣笠内大臣○万葉集に苅萱とよめるハ後世にいふ一種の苅萱にあらず、秋苅と曰いる萱をいふとぞ、和訓栞 萱刈 萱葺 萱に雀麦ありとゝいへるところ、

萱刈 萱葺 萱の軒端

倭名抄 茅 和名智 萱 和名加夜 大和本草 芒 スゝキ カヤ 長短一種あり短き者をカヤといふ、御令 萱菅萱が軒端植物にあらず秋みな萱なるおほき道理なれバ、かやりの名草ハ秋の季大切なる故に用ゆるがよきしく之ごとく うせ旦 御傘 編集の時事甚ざ無数によりて、如此了簡多し、屋根に葺て何十年にあるもの秋季植物に用ひがたし、宜しからざる式なりとぞ、蕉門の徒ハあきを用ゆべくんば、

桂の花

木犀 南方草木状 江南の桂、八九月花をひらく、子なし、状木犀なり 本草綱目 菌桂 巖桂の二種あり菌桂ハ葉柳の葉の如くにして尖り狭く光沢あり三縦の文ありて鋸歯なし其花に黄あり白あり、巖桂ハ其葉に鋸歯あり、枇杷の葉の如くにして粗澁なる者俗呼て木犀とせり、木犀の花香氣高く人をして酔しむ、○

藎草

藪須曰藎草ハ葉竹に似て細く若し、赤田かく荊襄の人煮て黄色を染む極て鮮好なり、和漢三才図会 多く越前より出せ、又染家必用の物とせ、按ずるに倭の藎草竹の葉に似せ、芒の類なり江湖大浦の辺山中最も多し、

老鴉爪

玉章 ○時珍曰王瓜一名土瓜、其根土気を作し、其実瓜に似るより、故に土瓜と名く、王の字何の義といふことをしらず、瓜雹子に似て熟するときハ色赤し、鴉喜て是を食ふ故に俗赤雹老鴉瓜と名く、三月苗を生ず、其蔓鬚多し、其葉円くして馬の蹄のごとし、六七月五出の小き黄花をひらき族をなせ子を結ぶこと累々として熟するときハ紅黄の二色あり、

大和本草 其実はうく長し、玉章と云王瓜の実ハ丈をむもべるゴ似ゴ、故ゴ玉章といふ、

蘺豆

本草を考ふゴ、人家の籬垣の側ゴ三月種を下ち蔓生して延蔓ひて蘺を蔽ふ故ゴ沿蘺豆と名く、又和俗破墻豆といふ此豆一粒を植ぜば豆八升を得るゴ破墻ゴ八升と音近し故ゴ云数種あゴ皆八九月ゴ種をあらそ、

鴈

月令 仲秋月鴻雁来賓、○時珍曰雁の状鵝ゴ似て赤蒼白の二色あゴ今人白くしてふるゴ以て雁ゴ云、大なるものを鴻ゴ云蒼き者を野鵝ゴ云、雁ゴ四徳あゴ飛ぶ時序あゴて前ゴ行ゴて後ゴ和ふ其礼也寒きゴ臨ハ北ゴ南ゴ帰ゴ雁門ゴ帰ゴ其信也偶を失ひて再び配ゴ其節也夜群宿して一奴巡警ゴ其智也人捕ゴ者ゴ其智ゴ以其類を誘ふ是一愚ゴ南ゴ来ゴ時瘠ゴ食ゴ肥故ゴ云ゴ取べし○白雁、鴻、鵠、海雁、なのむの雁代ゴ雁、二季鳥、以上頭字の部ゴ見ちて注ゴ○ちらはゴゴとゴ二種あゴ目ゴ黄ゴて其外ハ雁の色○新方雁ハ頭長し関東ゴ

雁の書

漢書 前漢の蘇武字ハ子卿杜陵の人武帝の時節を持て匈奴ゴ使ゴ単于ゴ降ゴ欲し武を出し大窖の中ニ置漢武を求む匈奴詭ゴ言武死ゴ云、常恵漢の使者ゴ教ていゴ天子上林中ゴ射て雁を得ゴ足ゴ帛書を係ぐ武其澤中ゴあゴ足ゴ由て還ゴ得ゴ、

古今 秋風ゴ初ゴ雁ゴ帰ゴ

友則 曠野 ゴ雁つきゴ花ゴ文ゴ天つ雁 其角

本朝無題詩 雁陣数行微月冷

虹橋一道遠天晴 茂明

雁金

和漢三才図会 所謂雁金と

ハ雁之鳴也万葉集ゴ多く此三字を用ふ然ゴ又雁鳴者今者来鳴沼と詠むゴ時ハ自ら雁の名とあるゴ似ゴ、遂ゴ雁金の二字を用ひゴ本意をうしなふ、云し

雁字

山谷詩三云雁字一行書 蘇霄○談林派発句 阿蘭陀の文字

檀鳥

和漢三才図会 好て檀樹ゴ棲む故俗呼て檀鳥ゴ云天つ雁、檀ゴ云ふ又懸巣ゴ名く形鳩ゴ小ゴし、頭背順共ゴ灰赤色眼の辺ゴ白色あゴ翻反黒其小羽ゴ青黄の斑あゴ啄二才許稜ありて黒色脛亦黒し、能鳴て諸ゴの声を為ゴ又人の言を為ゴ南家除夜元旦ゴ炙り食ふ以て借て取の義を表ふ、

河鹿

俳諧歳時記 蛙ゴ好こそ山川ゴあゴ夏の季ゴ秋ゴ至りて鳴哥ゴ云かゴとのゴとゴみてかゴゴ詠ぜゴ、俗傳ゴ西行ゴ哥あゴとゴ云ふ故ハ臆説ゴ云ゴ考ゴ所あゴ、その声鹿ゴ似ゴ故ハ俗呼て河鹿ゴ云ふ、

鯢

同書云正字ハ黄頷魚杜父魚の属ゴ水底ゴあゴて鳴魚ゴ故ゴ此魚を誤ゴて河鹿ゴ称ゴ諸国ゴあゴ伊豫越前越後加賀近江山城ゴ多し、その土地ゴよゴて名ゴ異ゴ、形ゴ声ゴ大同小異ゴ、石伏コ、石クラヒ石モチ又川オコゼ 伏見 クチナハドンヨ 伊予 マル 嵯峨 ムコ 近江 アラレ魚 越前 ゴの外ゴ猶あゴ近ゴ山海名産図会ゴ書ゴ委しく論じゴて詳ゴ畧記ゴ○青藍云、蕉門の先哲のゴ蛙ゴあゴ

狭蓑 あゴ

ゴ鱠ゴ云 崇柔

九月

桂の宮相撲 八日

拾芥抄 六條の北西河院の西九月八日桂の宮相撲

今昔物語 天暦の御時ゴ、震旦ゴ渡りし僧長秀ゴあゴ、元医師ゴあゴ桂の宮の前ゴ大なる桂の木あゴ人ゴ桂の宮ゴ人ゴ長秀唐の桂ゴ

まされりとぞ、雍州府志桂の宮一町ばかり○神社第宅詳なりがたし、

神田明神祭

十五日○神社江戸陽島にあり、祭る所の神二座 神社啓蒙 大己貴尊鎮座なり、将門の社ハ本殿を去ること百歩ばかり、○大己貴尊ハ人王四十五代聖武天皇天平二年鎮座なり、将門の霊ハ六十一代朱雀帝天慶三庚子年二月十四日将門滅亡せしその後怨霊ますます崇あるに依て、延久のころ一遍上人三世真教坊、将門の霊を以て神田の神社に合せ祭る、當社ちなめハ今の神田橋の辺にあり、故所いうゝ芝崎村あり、今に至りて祭礼の日、神輿をもちゐ、くゝ故所に留りて奉幣あり、祭礼九月十五日、糀町山王と隔年あり、神輿二基、引山三十六本、踊屋臺、太神楽おもをもて従ふ、ちの祭の練物に頼光大江山入の形状を模して、二間余の鬼神の頭を造り臺にのせて数人ちをを荷ふ、引山の外今ハ是ら神事に預るの町内、神田外神田大傳馬町、濱町、辺日本橋通り町、前後都合三十六町あり、神幸の町々ハ夜宮より桟鋪を構へ種々の提灯を出し、甚賑へり、神輿渡御の町ハ、本社より鑑倉町通り、飯田町より田安御門に入、上覧所前、常盤橋十軒店通り、筋違御門を過て、本社へ還御なり、大低祭式山王祭に同じ、ハ神事終あり、今ハ、神主芝崎大隅守社家五人巫女等あり、

上難波祭

廿日○摂州西成郡大阪博労町にあり、祭る神三座、第一稲荷倉稲魂神、第二祇園素盞嗚尊、第三平野仁徳天皇、後三条院延久三年勅請俗に仁徳天皇の祭とゝ、毎年九月廿日神事、神湯等あり、氏子醴を醸して互に相贈るあり、社記に仁徳帝の社ハ元大江橋の東上町の内にあり、是いにしへ皇居の跡なり、秀吉公の時上難波に遷せり、桂川の御祓の

部野の宮社別とゝる条に注せり、

かさらよもぎ

和名抄 菊 和名加波良 良子茂木又云加波良 北波岐

大和本草順に和名抄にかさらよもぎと訓ぜり、但野菊にあるべし、

かさみ草

菊の異名あり、藏玉ものがたりにもこれにのるこの草あれども秋とあるゆゑ名残に成り、次菊ハ奥州新妻の里にあり、因縁無常の新妻といふ物語にあり、業平作、是ハきくとゝいふまつきて秋に入らるゝ、彼物語ハ十月十五日とあり、然ハ冬の時珍曰其木丈木と名づく、斐然として章采あり、故にまれを榧とゝ、信州玉山懸の者を佳とす、後中略按ずるに羅願尔雅云、榧ハ杉に似て異あり、榧ハ美しき実ありて木に文采あり、其木枏に似て柔杉に似たり、絶て長ド難し、木牝牡あり、牡ハ華き牝ハ実るあり、棗のごとし、其核長くして撥攪のごとし、核に炎る者あり、実らざるものあり、稜あり、殼薄し、黄白色、其仁生にて食べし、赤焙て収て下し、一樹数十斛に下らず、大和本草其木屑を焼て蚊退く、力ヤリの木くりの

櫧の實

時珍曰三四月白花を開き、穂をなす、栗の花のごとし、実を結ぶ、大サ獬の子ばかり、小苞あり霜の後苞さけて子墜ち、

雞冠木

和漢三才図会本草綱目を案ずるに、枫ハ岐あつて三角をなす、霜の後に至て葉丹一変すべし、雞冠木も亦枫の属なり、然一枫の花ハ白色実大にして赤の卵のごとし、雞冠木の花実に迥に異あり、狂朝鮮の松の子大にして常に異なるが如し、雞冠木ハ数種あり、高き者二三丈、葉実りて岐あり、蝦蟇の手の如し、大低七八岐、或ハ九岐、又十三葉の者あり、ちなを十二一重とゝ、三四月嫩葉紅色を満山に映ず、五六月に葉に復て深秋其葉黄に落つ、歳を経るものハ五月小黄花を開く

狀飛蛾のごとし。楠頭より実を結ぶ中の子牛房の子の如し。和州竜田雁州高雄山最多くあり。秋に至て柔丹く赫耀とし。天下あまねく賞美す。凡草木秋紅葉する者多くあり。蝦手の樹の葉勝とし。故に此紅葉と称する八即蝦手。

栃紅葉 八雲御抄 紅葉に詠ずる木、栃の葉あり、一説に実の赤きを栃もちとよぶ。是栃紅葉、夫木 秋くれぐれ山の木葉のいろあん園生の栃八もちもちまつる為家

川の紅葉 紅葉の川水ようつるをいう、又うきて流るるもいう。

枯草は露 枯野枯草八冬なれども露を結びて秋と

九月

淀祭 廿三日 神社啓蒙 伊勢向の神社八山城國紀伊郡淀の駅小橋の東河中に在り、祭る所の神一座天逆向津姫尊 宝基文図に云石清水社家説八幡迹幸の縁なりて、伊勢向と号し、天照太神なり、初め、一説に淀姫の社祭る所今三座淀姫の神千観内供の夢神、天神以上三座傳に十観法師肥前國佐賀郡淀姫の神をこの地に勧請し、淀姫の明神八八幡宗苗の叔母神功皇后の御妹ト云、紀事淀大荒木の社祭に廿二日或八淀水垂淀姫大明神の祭廿三日、何れも是なり。也土人云淀祭と称する者是なり、是淀の鎮守之神輿一基淀の堤路狭く神輿還幸の時行列を立ざるしよりて跡を先へ振こなりて同じ堤を帰るなり、故に跡ら先らとあれ祭をいふなり、

齢草 ちの部千代見草の条に出づ

夜寒 御傘夜寒秋なり寒き夜夜を寒く夜の寒き皆冬なり、

七月

織女祭 牽牛 或書に云牛女の天河に會あるハ坎流俗の雑書に出て、ちなみを経史に尋ぬるに未見據なしと雖、詩經二晩彼牽牛跂彼織女とくくを説者以為二星名あるて実なり、夏小正に言ク七月初昏織女正向東十月織女正向北五雑俎牛女の事齊諧に始り、武丁の妃言に成る博物志に成る槎に乗の浪説千歳の下に婦人女子傳に口実とせるて可なり、文人墨士乃習て常語とせ、天上の列宿をして横に汚蠖を被らしむ亦怪むべきの甚きに近ども、用ひざんバ有べからず。

薫姫 織女の異名なり 異名分類公事根源に乞巧奠に机の上に火とともしたるもの

短冊竹賣 空焼物 ハ七月六日市穀の条にあり。

短冊竹 明夜詩歌を書て二星に供ず、或八短尺に楸の葉を用ひて詩歌を書星、公ハ民間の児女五色の紙を剪て短冊とし、ちなみに古歌を書て竹の五緑糸に換るものの、昨今市中短冊竹賣多し、又近来五色の短冊紙を賣ひ

七夕踊 小町踊 還魂紙料三保の頃の画巻に、七夕踊の曲を載せる其詞書に云そも七月七日八中略乞巧奠とて、人これ今宵八七夕祭もるもあかめのしもるに七ツ八ツもありなる小姫と美しく出立太鼓を手毎に持つ色面白くうるはしく踊まるもの、是七夕をもるに来昔今に怠らずとやいふ七夕踊とて別にあるにあらず、小女の人情に盆をまちかねて、七夕まつりをする故の名なるべし、愚按問答三云享保十七年著七月七日七夕を祭る中略面白く歌をうたひ、大内に町の小路と友達のうたひ踊をうたひ、むかし一小町と云だ人毎に美人のやうに思ひ名つけて、小野踊と名付ける説ハ

○七夕をどりを小野踊とも小町踊といふ。街踊といふる説ハ

題目踊　洛北修学寺村の老姫法華の題目を唱へ踊をまなび是を題目踊と云

松ヶ崎も同じ、

高燈籠　用捨箱昔々物語親見る翁著る昔八死去して其年より七月高燈籠とゝ

ふりをとゝのへ七回忌まゝとなるもあり立ぬ八六月晦日

長さ五六軒の杉丸太上より三角のいらをを結び杉の葉を

て包四手をきつて付燈籠八辻番の行燈の形ちゝ

さゝ作上ひろき下もゞ屋根も板ぶきもゝ玄

関と墨所の間の廣こゝに建て七月朔日より晦日まで毎

夜暮六ツより明六ツまでもゝ一向宗ゆえこゝんぞ、他宗ゆ

えゝかのぶゝ、哀よゝるゝ也とあり是享保十八年

の記さゝ也ゝ　ゝれば既に當時在家の高燈籠の絶とゝ

ハ明らかなゝ、いつの頃まぐゝありゝゝ

下略○狭衣集

霊祭

霊棚、棚經　高燈籠ひろハ物ゝき柱ハ千那掛索麺麻柯の箸枝豆枝豆根芋

青蕎麥和米瓜茄子此類聖昊を

祭る意あゝば秋ゝべゝ青藍云ものハ在家ハ佛檀を

飾りあゝてゝあゝゝ故ゝ七月十二月二度魂棚を飾り設

け聖昊をむゝ祭りゝゝあゝ志ゝの邪宗門御改の砌我

家ハ何宗ゆゝとゝゝあゝゝ常ゝ佛檀を設ゝる支ゝハ

ゝゝ也月の祭ハ年のをゝりゝゝ也ゝをこれゝうゝゝ

徒然草十二月晦日の夜のゝをゝゝる者ゝ亡人の来る夜と

て、魂祭るゝをハ此頃都ゝゝゝゝゝ猶もゝ

ゝゝのゝゝゝゝハ哀ゝゝを　枕草紙ゝゝ葉を所走の晦日

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人の食物ゝゝ、ゝゝ　棚経菩

提寺の僧来ゝて牌前ゝ誦経ゝゝゝを棚経

ゝゝゝゝの部盂蘭盆会の条ゝゝゝゝゝ

大文字の火　せの部施火の条ゝ出づ

鷹の塒出　和漢三才図会四月羽毛を易

んゝもる時韋偏を解き去り鳥屋の内ゝ放つ日を逐て脱

落ゝて還新毛を生ぜゝ七月中旬ゝ日のぞゝ、ゝゝを片鳥

屋ゝゝふ二歳毛を易ゝを兩ゝ屋ゝゝゝふ三歳を兩片鵜ゝ

ゝゝ　鷹ハゝゝゝゝゝゝゝ過ぬゝゝ今ゝゝゝゝゝゝゝを

ゝゝゝゝ

鷹の山別　或鷹書曰鷹の山別ハ七月廿

定家

五日ゝゝ、鷹の巣を立父母ゝ

別ゝゝをゝゝ下学集鷹ハ猛惡の鳥ゝゝ子生ゝて巣こゝ

り其子成長ゝゝゝゝハ親を食ふゝゝゝゝ父ゝゝを畏

ゝ居ゝ巣ゝゝ一尺枝を去ゝ子を養ふ、

鷹打　凡七月八月

ゝゝゝ一尺量を呼ゝ鷹秤ゝゝゝ、

嫌を以て鷹を取ゝゝ呼ゝ鳥屋待ゝゝゝゝ鷹の雛巣を離

巣を離て飛翔ゝて自食を求る時常ゝ絶崖断巖の喬樹を度

る其巖窟の辺ゝゝ茅を結びて居ゝ鷹の至るを窺ゝ

羅を樹間ゝ張死鳥を以て嫌ゝゝゝゝゝを捕ふ此を阿

賀計ゝゝゝ或ハ網掛ゝ

鷹祭鳥　月令鷹乃祭鳥處暑候七月

作る是を鷹打ゝゝゝ

之中

玉ゝゝき　大和本草其実ハ梅蠟ゝ似ゝゝ立

花をあゝむ人七月七日花ゝゝゝゝゝ

葉を去り其実をのこして多く

挾むゝの時其実粗熟ゝ

無三秋物

姫　岷江入楚竜田姫、ゝを按ずるゝ春ハ佐保山の神

より事ゝゝゝゝ山の霞の色ゝゝゝゝ春をゝゝ

神ゝゝゝ秋ハ竜田山の神ゝゝ事ゝゝゝ紅葉を詠ずる

故ゝ秋をゝゝ神ゝゝゝゝゝ又共ゝ神の名ゝゝ

竜田

玉兎　つの部月の蟾ゝゝゝ条ゝ注ゝ

立待月　新撰六帖ゝぶ門をゝゝゝゝ

ひとねるをのこさぶなちまちの月もこゝろ〳〵ん 家五内大臣 十七日の月あり山の端のぐ〳〵の月をまちてひとりつゆ〳〵

鷹の羽芒 白き毫ありて鷹の毫に似よりて、

樽拔 是酬樽あり、関東の俗ものを拔とゝ、

田の色 酒樽の中に入置て淡をぬくの渭あり、

田の庵 許慎が説文曰稲二月始めて生ず八月熟をこゝ志うる時名七月八青黄半熟をる時あり、故に熟を田の色とゝ、御傘田を守る時ばかり作りて居る庵あり秋にあり、後撰秋の田のかりほの庵のとまをあらみ我衣手は露にぬれつゝ

八月田の實 弘

節、恃怙の節 むの部八朔の条に出づ

端正月 昌黎月詩三秋端正月今宵出東溟事文類聚前輩中秋の月を名づけて端正の月とゝ 季吟云端正の月八日満るを

竹の春 竹譜竹は八月を以て春とゝ筍譜いへり 竹は八月おそを小春とゝ熟さんと欲し寒来んと欲し故に小春といふ

檀特花 呉響集客又曰檀特花とゝ名のあり、花炬火の如しとも亦芭蕉の類に長、答て曰是亦芭蕉の別種あり、和漢三才圖会高サ三四尺茎芭蕉に似て小く、甚柔なり又薏苡に大く、甚硬らむ、長サ尺に餘り、濶サ三四寸、冬枯て春生ず七月莖を抽んで花を開く、深赤色形穂最も愛すべし、子を結ぶ円く黒色甚硬く用て念珠を作る本西南外國の草、性最寒くをおそる、

龍舌草 多識篇龍舌草今按多豆大和本草水中に生ず葉は車前のごとし水中に花を生ず花白く菱のごとくにして大なり、處々にあり、本草水草の類に載す、西土の方言にこゝろなりと云、水かつけは茶枯る又水葵と云葵の茶に似なり、花は三出あり八月あり、実は三角あり細し

煙草花 花鏡烟花一名淡把姑初て海外に出る後種を漳泉に傳へ今地に隨てあり、木春不老に似て茎葉大なり、茎白の細花をひらく、和漢三才圖会八九月莖の頭に茎穗をひらく、小白花を開く、赤色を帯ぶ畧紫苑の花に似て子を結ぶ内に細子あり黄褐色、

玉章 加の部王瓜の条に注ず

蓼の花、蓼の穂 和漢三才圖会二三月繁茂し、秋に至て穂をなす細花をひらく、紅白色数品あり花穂をもて実を結ぶ俗これを穂蓼といふ、

種瓢 瓢の種子と収て是を擂の下に鉤る或火炉の上に鉤て水氣を去り乾き過して褐色となる時種子をとり出し蓄へ、

種茄子 時珍曰茄中に瓤あり瓤の中に子あり、諸茄老に至て皆黄なり、

草狩 木の子取尓雅菌は形蓋に似たり、木菌土菌石菌あり、草のうへ鼻の先なる哥かゝ、其角、

大根蒔 和漢三才圖会蘿蔔大抵八月種を下し彼岸に苗を出す、

魚のむね 伊勢物語こゝろのたけむの雁もひとつゝよる君がかゝるとあり

雁 八雲御抄基俊八頼の狩東人隣家相とりる鹿狩事と俊頼八田の面の雁と云、諸抄雁を用ふ田の雁の事と、

太刀魚 時珍曰鰿魚江湖の中に生ず魚の形物を剖裂箋刀の如し故に鱿魚勦魚の名あり常に三月を以て

始て出づ、狀狹くして長く、茎くして削せる木片の如く、亦長く薄くして尖る刀の形の如く、細鱗白色、吻の上に二の硬き鬚あり、腮の下に長き鬣あり、麥苗の如く腹の下に硬き角刺あり、快利刀の如し、腹後尾に近くして短き鬣あり、肉中に細き刺多し、大和本草 本草綱目に載せる鮒魚に相似たるものなり、

九月

きよ登る

きの部菊酒の条に出て

醍醐祭

九日 城國宇治郡小野の南深雪山醍醐寺にあり、紀事 九月九日醍醐天神祭能あり、又昨日夜に入て、清滝権現の社前に於て能三番あり、こなを夜宮能といふ、神輿三基、内一長尾天神、内二清滝権現、内三勝間明神、以上三社あり、當寺縁起に云、祭る所清滝権現は沙迦羅竜王の内一女なり、長尾天神は延喜帝の御願によりて、御願寺となる故に勧請あり、勝間明神は神縁社説詳なり、糸切歯例祭九月廿三日に記を誤り、廿三日は同所笠取祭あり、當寺の伽藍は、山上山下にありて上醍醐下醍醐といふ、土人長尾天神を以て本居と崇む

宝の市

住吉の部相撲会の条に出づ

旅夷祭

昔洛東建仁寺の門前にあり、今建仁寺の千光國師栄西帰宋の日、船中暴風の難ありたる、蛭子の像波濤に随て漂ふ、栄西これを収めて、これを祭る、風やゝ波静りて恙なきことを得たり、栄西寺に帰りて社を立て、今の夷の宮是なり、今に至るまで西海に赴く人、此社に詣て風波の難なきことを祈る故に旅夷と称す、祭礼の日宮川町辺の居民遂物造物を出す、神輿一基持鉾一基あり、

大般若

菊の異名なり、黄大般若一万重ま

花葉九六百葉、故に大般若六百葉に

なぞらへて名づく、白色の者又あり、

だもゝ實

大和本草 方土にこれをダマともダモともいふ、漢名未詳、桂の類なり、二種あり、一種は白タブと云、葉は桂樹に似て香氣あり、冬末に実あり、ツバノことなり、鳥好んで食ふ、其実の大さ木槵子ほどなり、中に肉を去れば其内に四き実一つあり、一種クスタブと云、其葉白タブに似たり、最よく桂の葉に似たり、桂葉とクスタブの葉とは共に本よりこれなり、凡他木は其葉の中に一條あり、桂葉は三條あり、本艸に如此いへり、クスタブの葉も桂の葉と同く三條あり、白タブは中のみなり、クスタブの実は又枝にもつ處々にあり、クスタブの実は冬熟して黒し、皮肉を去れば其内に実あり、クスタブの葉の形は桂と同じ、味も桂に似て香氣やゝ劣れり、白タブは香あり、味辛し、木理クスの木に似たり、良材なり、白タブ、クスタブとも大木なり、略白タブ、クスタブの実は大なり、油多し、皮肉を去て肉を去て中の実は油をとりて燭燭に作る、

橙

秋の部に載せる黄熟せるをいふ、正月の部に載せるは嘉祝に用ゆる故に委しくは、

八月

荔支

時珍曰 錦荔枝、本居苦瓜、一名癩葡萄、皆実及び茎葉相似たるを以て名を得、五月実を下し、苗を生ず、蔓を引き茎葉疎鬚並に葡萄の如くして小なり、七八月に黄花を開く、五瓣椀の形の如し、瓜を結ぶ長者四五寸、短者二三寸、青色皮の上に瘢痕癩及び荔枝殼の形の如し、熟するときは黄色、自ら裂け内に紅の瓤あり、子を裹む瓤の味甘く食ふべし、形扁にして瓜子の如し、亦瘢痕あり、南人青皮を以て内及び塩醬に煮て

蔬ヨ充苦く淡く連雀 和漢三才図会 今處々ヨあり、形雀の大さのごとく、頭背胸赤色、翅黑く黄白の四文あり、羽尾の端畧紅其尾短くて黑く、頂の上ヨ毛冠あり、眼領の辺ヲ黑く常ヨ林ヨ棲むヨ群を為ふ、形美くきを以て人ありを樊中ヨ畜ふ、或ハ尾を披き伊比伊と囀ふ、おとなし、蓋練鵲と字同音ヨて物異、

九月

例幣 九月朝日より十一日ヨ至て伊勢例幣の端ヨ門前ヨ注連を引門外ヨ標木を建て僧尼及び軽重服の輩門内へ入べからの字を書て表ヨ立前斎とふ十日の朝幣使発足 公事根源 例幣とハ伊勢大神宮へ御幣を奉らせ給ふ毎年のことなり 續日本紀 孝德天皇天平始て伊勢大神宮へ幣帛を奉らる詔して今より以後中臣朝臣を差して他姓の人を用ふることを得ざると命ずるに依て大中臣藤波家祭主として代々掌ら来る最上所を神祇官代とも云ふ、

そ

蕪三秋物爽氣 連哥 新式 漢和の篇ヨ云爽ハ秋の氣也、爽ハ清快なり、さやかハ即ち清く快きの義、増韻 爽松年詩 爽氣流出千林赤

袖の露 袖の時雨ハ涙ヨ掩つ瀬ハ涙なり、袖の露ハ涙ヨ袖の部案山子ヨ条ヨ出、

八月

添水 加の部案山子ヨ条ヨ出、

獻胙 せの部秋夏の条ヨ注ス、

蕎麥の花 呼珍曰蕎麦一名荍麦荍弱く翹然として長く易し、收め易し、麩ヨ磨て麥のごとく故ヨ蕎と云ふ荍と云ふ麥と名を同じくするなり立秋前後種を正し

八九月收め苅ヨ性最も寒ヨ苗の高さ二尺赤莖緑葉葉烏梅樹の如く小白花をひらく繁密繁々然として実を結ぶ累々として羊蹄の実の如く三稜あり老るときは黑色、

九月

蘓我菊 黄菊をいふ、蘓我といふ名の説あきらかならず、

拾遺集 雜 かのこゆる池辺よりそなるたぐ菊のちぐさの色はさてこそらさ よみ人しらず ○たぐこそ〜たぐハ繁き枝ヨいろのそてこそ色のてりまさるなれ

袖の霜 増山の井 獨誓古 糸衣 等ヨ出ス

つ

七月

机洗ひ 現ちひ 児童七月六日ヨ机硯を洗ふ、北野の神事ヨあらふべし北野の社ヨおいて六日ヨ松瓜の硯ヨ梶の葉を添て供ス児童の手跡を学ぶの専ら北野を崇信ス故ヨ机硯を洗ひ清め北野の神ヨ梶の葉をもて向るなるべし、

妻迎 又二星ヨ向るのを書ふ前説ヨ出ス、

舟、妻おし 舟、妻送舟 万葉 ひさかたの つまむかへぶねこぎ出らし、天のうらなりたち立ふ 新勅 天の川うきらきらあまとひこぼしのつまむかへぶね今やこぐらん 新六帖 ひさかたの天の川門ハ明ぬるつまあらぶねいかやいのらん

續猿蓑 舟ありの雪ふる〜くや星の影 東湖

辻相撲 公事ヨあるべからざるもあるを里神楽といふがごとし、神社ヨある常の相撲あれども禁裡の相撲ヨあらず、

衝突入 十六日

滑稽雜談 昔ハ諸国ヨそれぞれ入ると、家々秘蔵せる器物或ハ其家の嫁娘妾妻ヨて常ヨ〜きと思ふりを客

殿居間に限らず深く入て恣に見〳〵近頃まで勢州山田にあり〳〵ゆえ世人山田の〳〵入とらん傳へむ〳〵八諸國にあまた〳〵ありて捻て密財の類を蓄ふ八貪欲の道あるゆえ志を戒悔のつめこゝを〳〵とらふ今世八他てあき事〳〵

爪紅

大和本草 女児風仙花と酢漿草の葉を〳〵合せて爪を染む紅色とあるこゝ故に名づく

無三秋物

露

露けき霧の玉 月令章句 露八陰液多く釈て霧となり結びて霜となる○増山の井に出る波の霧八袖の露上露以上頭字の部に

露の身

露の身とゝふ霧のでき出るなり紀身注也

曠野集 附 霧の身八泥のやうなるもの

月

物理論 月八水の精潮に大わあり人月に虧盈あり 説文 月八日の照也処より生也故に哉生明とゝ魄八日の敵に処より生也故に又哉生魄とゝ日に當る時八光り盈ツ日に就ときハ明盡

桂男 ぞてらえん男照月次新月弦月三日月玉兎銀兎玄兎在明哉生明既望既生魄いさよム哉生魄暉素金波夕月夜暁月夜夕月日朝月日立待月居待月臥待月夜半月廿日夜中更待月常娥真如の月心の月胸の月盃の影まゆゝ朔日ころの月ねまち

の月以上各頭字の部にまち注也

月の霜、月の雪

杜甫 仲秋詩云満月飛明鏡帰心折太刀轉蓬行地遠攀桂仰天高水路疑霜雪林棲見羽毛此時騰玉兎直欲数秋毫

桂男 西陽雜俎 月中桂ハ高さ五百丈下に一人あり常にあをを斫る樹創ふに隨ひ合也其人姓八吳名八剛仙を学ぶ過ありて謫せらを樹を伐らしむ 桂男吳剛

月の桂の花紅葉

月の桂の子

蘊詩注 杭州の天竺寺八月十五夜常に桂子ありて落つ 本草図経 江東の法安多く衢路の間に桂の子を拾ひ得これを破せば辛香こ古老相傳ふ是月中より下る 御今 桂八こゝ三五の秋と

月の鼠

仙説譬喩経 黒白の二鼠あり互に樹の根を齧む乃至樹根八命に喩へ黒白の二鼠八晝夜に喩ふ 興俊抄 無常の喩に人虎に逐せて野中の井に隔入んとして岸の草をひく底をみれば毒蛇口を開きて〳〵のまんとも又黒白の二鼠〳〵もるの草の根を食ふ

せんとすべふ〳〵毒蛇の為に害せらるゝ是虎八平生造悪の罪業黒白の鼠八月日の過ると毒蛇を地獄にまとゝ〳〵より是を月の鼠とゝふ

月の剣

三日月の状を刀剣の形にまとゝるあり

月の都

月宮殿 太平廣記 羅公遠傳云中秋の夜時に玄宗宮中にて月を翫ふ公遠奏して曰陛下臣に従ひ月中に遊んや否乃ち杖を取空に向い擲つ化して大橋とゝる其色銀の如し帝に請て同く登る行て数十里精光目を奪ひ寒気人を侵す遂に大城闕に至る公遠曰此月宮也仙女数百皆素練寛裳にて廣庭に舞ふを帝問て曰此何の曲と曰霓裳羽衣の曲なり玄宗密に其声調を記して回る顧ひ其橋歩に隨ひて滅す

月の蟾、月の兎

玉兎 五位通義 月中に兎と蟾とあるハ何ぞや月八陰に蟾蜍八陽に兎と並ひ明に陰陽に係る○杜甫詩云搗藥兎長生○白居易詩云 照地幾許人斷腸金蟾玉兎速不知○蟾を云に八雲御抄月の桂を老たるを云 古今 久しくの月の桂も秋八あらしくもれたやてりはさらん 忠岑 冬の日 附 月

西南に桂の花のはゝ月む時羽蓋

八月中三足の蟾是を玉蟾といふ、

月の蝕 天経或問 星月皆日の光を借、日ハ月天の下にあり、朔日月行て日天の下に在て、日の光を掩ふ、人地面の上に在て日を仰き視るとき、其月の日を掩ふを云、こゝに人地面の上にあり日光あきゞ如し、然る寔に常を失なはざるゝ、人其光をこざる故に日蝕といふ、月蝕ハ朔に月望月に至る、一向八十度にして日月望む、中間に正對もるとき地球障隔も、月地影の上にあり、日地球の下にありて日光ちさを燎さを、故に月其光あり、是を月食と云、

月讀男 拾穂抄 月よみ男、月讀月夜見、皆月の名あり、日本紀に云、

月の出潮 性理大全 余襄公安道云、潮の派退ハ海に増減もるにあるを、蓋月の臨む所に則水往て西極に臨む、故に月卯酉に臨むとき、水東西に派る、月子午に臨むとき、湖南北に平らあり、彼竭き来絶を、皆月に繫るあり、

月の秋 御傘 夜るあり、花の春として植物にあるに同じ、

月の宿 御傘 露水あるに依て、月をこる宿の事之居所あり、

月をあるゞ 御傘 人倫にあるを、月のあるトハ人倫あり、人倫にあるを、

月の友 御傘 人倫之但一句体によるべし、月を友、

朔日頃の月 源氏浮舟の巻 ついたちごろの夕月夜、云〻 炭俵集 細〻とついたちころの宵の月利牛○月のすゞめをついたちごろといひ、月をこゝろをつゞりごろといふ、一日三十日にかぎらず、

月の舟 半月を云ふあり、

月のこゝみ 満月を云ふあり、

蔦 蔦紅葉 時珍曰蔦ハ松柏の上に寄生女蘿ハ是松蔦ゝ〻の上に浮蔓也○地錦 大和本草 葉ハ衣の紋に付るツタに似て、冬月ハ葉あちを、皆本草にいつるがごとし、和俗壁生草といふ、秋ハ紅色又常のツタハ是に似て、冬ハ葉あり、和漢三才図会 鳥蘞莓 俗云豆太 本綱に墻壍の間に多し、藤柔〻〻て稜あり、一枝一鬢九五葉、葉長くして光り、疎歯あり、面まゝ背淡〻、白蘞の茎の色故に名づく、七八月苞を結び、簇をなを、青白色花の大さ粟のごとし、黄色四出実を結ぶ、龍葵の子に如し、生ハまゝ熟もれバ紫之、肉に細子あり、云〻是大和本草にいふ夏蔦之秋に至て葉深紅色

甘藷 和漢三才図会 仏掌薯 葉薯蕷の葉に似て、頗黄、獨の葉に似て畧小し、其根の状仏手柑に似て肥り大く、攫渡者の如し、故に名づく、鎮江府志にいはゆる佛掌薯ちを、

粒芋 其葉に茶の理あり、子ふく四くして味美し、乾を、或ハ糸に繫て晒し乾を、初蕎麥稽稲藁を用て包宿して〻霜を生を、豫州西条の産甘美あり、備州これに次く、濃州及び尾州の産ハ、長さ三四寸ばかり、

白栁 渋柿を以て枝を連ね曝し乾を、

亜安梨 具さにハ軒のつまあ〻といふ、

八月

綵雀 瓦の部會行器の条に出づ

敦賀祭 十日 氣比大明神ハ越前敦賀郡にあり、祭神仲哀天皇瓦土記氣比の神宮ハ宇佐同体、八幡ハ應神天皇の垂跡氣比ハ仲哀天皇の鎮座あり、例祭八月十日○今月二日より十日まで近国廿里四方の諸商人放下師狂言師等来集る、二日神輿洗あり、敦賀紙屋町といふ所より、例年紙細工の家臺燈籠を出し、京の祇園囃しを模も

三日神事四日を後宴と称し、町々の氏子東番西番とつとめ、引山を出し、地車にて町中を引廻る、山の上に一丈ばかりの松を立四方錦繡の幔幕水引ホ、洛の祇園祭の山に如し、上に武者人形を飾る、山の数或ハ五ツ或ハ六ツ、祭礼當日に出る、天神の森といふ所、御旅所にて神輿遊行、

鶴ヶ岡八幡祭

十五日相州鎌倉にあり、一名ハ雲井ヶ峰、上の宮三座中ハ應神、東ハ神功、西ハ妃大神〳〵、姉神下の宮四座、仁徳天皇、東ハ久礼宇礼の二神、西ハ妹比咩〳〵、後冷泉帝の御宇伊与守源頼義朝臣、安部貞任を伐時、丹祈の旨ありて、康平六年八月石清水の神を相州鎌倉郡今の下若宮の地に勧請ス、永保元年二月成就、義家朝臣修覆を加ふ、治承四年十月右大将頼朝卿小林の郷に迁〳〵ふ、ときに今の窪ヶ岡にあり、毎年八月十五日放生会並に祭礼奉幣流鏑馬角力

司召

敦隆卿記　司召ハ秋の除目なり、京官除目と号ス、春の除目ハ縣召と号ス、各拜任の輩ときを召、春ハ太政官の廳、秋ハ外記の廳に於てこれを召、御司召と称ス、○司召定考同例なり、猶ホの部定考の条を見合セ、

月見

名月　望の月　十五夜　三五の月　芋名月　今宵の月　くまの月

月華　事文類聚　歐陽詹、翫月詩序云月之為翫冬則繁霜大寒、夏則蒸雲大熱、雲蔽月、霜侵人蔽與侵俱害翫、秋之於時、後夏先冬、八月於秋、季始孟終、十五之於夜、又月之中、譬於天道、寒暑均取、月数則蟾兎圓、況埃壒不流、大空悠々、蟬蛸能徊博華、上浮昇、東林八、西林肌骨與之疎冷、神氣與之清冷、○名月　湖東問答　去来云三五十五夜あり、もべて名月といふ、そのうちいづれの月ともなく、名月といふ故ありとき〳〵ぬ、然ども今日名月の詩哥を作らんにあるべき故実に限るべ〳〵ども、尤故実にもよるべ佳あるべ〳〵又明の字を用ゆるとハ、和漢ともに三五の法、先を賞し来る故に明と名と通ひ、ともを通用ス、○今宵の月、今日の月以上十五夜の月に限りて、ひとへに今宵と賞するなり、句中にはいづれ共、

賞花義

やまとあべひさしせんなの月智月　芋名月　御湯殿記　名月御祝三方に芋ばかり高盛

歳時拾遺

浪華の俗十五夜を芋名月といひ、十三夜を栗名月といふ、○三五の夜白樂天詩三五夜中新月色、○月華　五雑俎　人ふ八月望月華あり、或ハ中夜来、或ハ微雨後、或ハ中夜、或ハ八月の末、秋後の望、これあり、或ハ中夜その五采鮮明、旁照数十丈、金像の如きの百餘道、或ハ但紅雲ときを囲こ繞るのみ、臨川吳比部捲謙少、のり一対一度ときを見るそのの景象鮮妍千態万媚真に人間いまだ古ときを見ざる所の奇あり、

月草、露草

時珍曰鴨跖草花を碧蟬花とふ、三四月苗を生ず、莖紫ゆえ葉竹に似て、嫩き時食ふべし、四五月花をひらく、蛾の形の如し、両葉廻の如く、碧色愛すべし、巧匠其花を採り汁を取て画色を作ス、青碧ゆえ黛の如し、倭名抄　鴨跖草　和名都岐久佐　仙覚抄　鴨跖草、月草と称ス、月草ハ露草なり、万の花ハ朝日影にあたるとき、此花ハ月影に吹けハ月草といふ、

土菌

和漢三才図会　土中より生ず

月夜茸

大毒あるゆえ人近よるべ、

燕帰る

格物総論　燕春社に来り秋社に去る故に是を社燕といふ、

鶫

和漢三才図会　百舌、反舌、鶪、鶪馬鳥、俗ニ云真豆久見状鸚鵡のごとく灰黒色、京師除夜毎にあれを炙り食ふを祝例

九月

津村祭

廿七日 津村の御灵社ハ摂州西成郡大坂津村と去にあり。祭神鎌倉権五郎景政を灵といふ。摂陽郡談 昔津村何某専ら武勇を励み、諸国を巡行して軍術奥義を極め、相撲の國に至りて一夕景政の社に詣て神殿に通夜せし時に神渠が武勇を感じ託して云、摂津の國難波の勝地に祝ひ祭せよ、我将に汝を擁護せんと。答云何を以てか證とせん。曰枕上に神幣あらん。明旦さめてこれをみれば果して神幣あり。みづから是を負ひ津村に帰りて叢祠を造り神幣を納てあがめ祭る御灵の宮これなり。元禄のころ御灵の大明神と贈号あり。毎年九月二十七日神祭神湯の式あり。津村の土人本居神とす。

椿の實

和漢三才図会 海石榴その実円く無果花に似て老て枯るときハ殻四ツに裂け中の子海松子のごとし。皮剥仁を取り搾て油を取。但千瓣の者ハ実をむすばず。

露時雨

露霜、露寒

古今 みさぶらひみかさと申せ やどりの木の下露ハ雨にまされり

暮秋の露のさむくなるをいふ時雨よりふる露。霜露寒ハ露の氣が凝んとするを云なるべし。

七月

願の糸

公事根源 乞巧といふことも行る由し よる事なり。七夕祭ともいふ。あり香花をそなへ供具をとりのへて庭上にかざをあきて竿をのぼしに五色の糸をかけ一事を祈るに三年のうちに必叶ふといへり。此ゆゑに乞巧と申とぞ。

念佛

朗詠 憶得少年長巧竹竿頭上願糸多 白居易

踊

洛北川合村一乗寺村に念仏を唱へをどりをする故に此称あり。

兼三秋物

ねまち月

新六帖 秋の夜はひとりねまちの月ゆゑに身を吹しほる庵の松風 衣笠内大臣

八重垣 ねまちの月ハ十九日の月也、一説に子待なり、廿日の月也

八月

蘑菰蕈

和漢三才図会 俗ニ云鼡茸、朽木及び老樹の根上ニ生ず。九十月盛に出、一根生をなし数十叢生ず。微凹く泡頭釘に似て長一二寸、茎細く柔軟なり。微の内外灰白色、兀て灰白色なる者を呼て鼡色といふ。其内浅鼡色あり、故に鼡茸と称す。

な

七月

七日ハ御節供

日本紀 持統天皇五年七月七日公卿を宴し朝服を賜ふ。

事紀 今日武家并地下の良賎、各白帷子を着慶を修す。家々索麪を喫し又互に相贈る。

七箇池

百箇池 事林廣記 戚夫人傳云、高祖漢宮七夕に百子の池に臨み、五縷を以て相羈ぎあはせを相憐愛といふ。○七箇の池とハ星を祭るに七ツのたらひに水を入て鏡をつけて星の影をうつすをいふ。百箇の池ハ天の川をもいふなり。二姫ともいふ。桐機をいふ。又百のたらひに水をたとへてなるをいふ。

刀豆

時珍曰 莢の形を以て名を命ずる之、案ずるに段成式酉陽雑俎に云、楽浪に挟剣豆あり、莢横に斜みして人の剣を挟めるが如し。即挟豆なり。三月種を下し蔓生じ引て一二尺、葉豇豆の葉の如くみじかして稍長大、五六月紫花をひらく、蛾の形のごとし。莢を結ぶ長き者尺に近し。微皂莢に似、扁して剣脊三稜、宛然とあり。

棗の實

時珍曰 按ずるに陸佃埤雅ニ云、大なるを棗といひ、小なるを棘といふ。大和本草 夏芽を生ず故になつめといふ。○花のうちなれば春の部なつめの花といへる条に註す。

梨子 時珍曰梨樹の高さ三四尺先りて葉光賦あり細き葉あり二月白花を開く雪の如し○大殺紅花子梨観音寺梨妻梨松尾梨水梨四梨空閑梨鹿の梨なとの浦梨山梨ほの種類多し各頭字の部にもちて註せ

鳴子、鳴竿 躬恒秋杉棹の先に鳴子をつけ片山里に栗とひろりを作り猪を追之○秋の田畑なる物を驚く是

八月

長き夜 夜の短き至り八夏至に過ぎ夜のながき至り八冬至に過ぎ然せども秋の夜を以て長夜ともる所以八秋分昼夜等しく初て夜は長きを覚ゆ夏の短夜に対して秋を長夜ともいふ

名の木散 鹿文曰按ずるに栃櫨柞ほのごとしまた櫨ちる柞ちるとふべきを略して名の木ちるといふ歟然るに未練の俳士多しまた花句に千梅も如事如何のよしいふ人

滑煤莖 和漢三才図会榎の樹より生ず大なる者今寸なり小なる者三四歩大小叢生淺褐色を帯内刻あり甚滑其莖煤黒色奈女八滑之

中稲 和漢三才図会九八九月刈収る中稲と也

中板大根 和漢三才図会八月に種を下彼岸の中に苗を生ず稍長して鳧の尾の如きを中板大根と

菜種蒔 注に不及

中汲酒 半清半濁の称なり

九月

鳴瀧祭 福王子祭 鎮守の社洛北鳴滝にあり 諸神記 王城守護三十番神右白虎八神 西仁和寺の西 高雄の麓下鳴滝川の辺にあり封ず西朱雀より西洞院に至りて九町の擁護神なり 擁州府志 福王子の宮八西鳴滝にあり封ず辺の地主の神なり仁和寺の鎮守と両社とも土人本居神とす同日に合せ祭る 紀事 鳴滝福王子祭九月廿日神輿を墓鉾五本御室の御所の庭に入る○福王子の宮祭る所班子皇后と皇后八桓武帝の孫女なりて吏部尚書仲野親王の女光孝帝立て皇后とす宇多帝を生む 此辺の地主神と崇め奉り仁和寺の鎮守と滑稽雑談 俗に五器洗ひと也是一年中の諸社の祭祀の終なり又當月の外に神祭なき故なり毛吹草に鳴滝祭廿八日記也近来の俳書外に福王子祭と並載とり同社の祭を謬て再び出也

楢 和漢三才図会 倭名奈良俗に古奈良樹の高さ丈なり花実擬作の輩のでし秋月紅葉する時人ありを賞也大和本草擬を大奈良といふ葉栗の如し秋冬枯て落ず四五月花ちる栗の花に似て実八椎のごとく大し其苞半つゝむ又小楢小木なり材木ともに炭の好也実の苞あり半をほゝむ故中即團栗なり

南天の實 蘇頌曰南烏株高三五尺葉苦楝の葉ごとひろく小なり冬を凌て紅子を生ず穂をなす人家多く庭除の間に植俗に南天燭と云○夏のあけ部南天花の条に

五七月

蘭 宗奭曰葉麥門冬のごとくして濃ト且韌長さ三尺四時常に青花黄緑色中間辨上に蕚の點あり春芳しき者を春蘭と色深し秋芳しき者を秋蘭と色淡ト開く時満室尽く香ト他花と又別なり○山谷曰一幹一花にして香餘りあるを蘭と一幹数花にして香乏しきを蕙と大和本草是世俗に花を玩賞する蘭と真蘭とあり今の蘭八本草にこれを出ず蘭草集解正誤に載せ

七月

迎へ火 送り火七月十三日黄昏より及びて都鄙ともに麻柯を焚てあなを聖灵を迎へ火とふ十六日又おれを行ふ也あなを送り火とふ 報恩經七月十四日卯時来り次の日十六日午時三返八五雅廻閻人最モ中元を重む家々猪酒冥衣の具を設け先人の号位を列ね祭て古を燎く女家則父母の冠服袍笏の類を具し皆低よ為る者あなを篭るよ仏を以ちあなを紗箱とふ父母の家より送る女死もれば婿亦代て送る前中より至る時八則清晨陣設くるあり甚嚴あり子孫冠服を具し揖讓罄折して神を導き以入る祭畢

迎鐘 乃の部六道参の条より出

虫送 紀事 年より依て田蝗害をあると時民人鐘鼓を擊野外より巡るあなを虫送とふ凡旱歳より五穀の枯萎むを焼て虫送ふ茄の根の枯るを舞とふ凡の蔓の枯るを上るふ名民間の訓之いの部蝗の条かるべし

木槿 時珍曰此花朝より開き暮より落故日及と名づく槿と云ふ蕣と云ふ猶僅呉一瞬の義あり其木李の如く其葉末尖りて極薄あり其花小にして艷之或ハ白く或ハ紅単葉千葉の者あり五月始て開く

室の早 古今六帖津の國のむろの早ゆせいでぬとも人をはつるとなるべし此哥夫木集より きの國の室の早ゆせとして入る紀伊國より牟婁郡あり夫木の古説より ものふべし さて牟婁郡の早ゆせとよるべし こゝな杜撰あるべし

無三秋物

虫、虫籠 尔雅 足あるを虫とふ足なきを豸とふ疏云此文は對をるのこと敢て言ハ足あきも虫と云雍州府志下賀茂の社司の婦人松虫鈴虫を養ふ籠を作る其式鐵細竹を刻て籠を造る内より一寸の土角を安き土を盛り苦土を敷き毒草少しなりを種倭俗より所謂露草ハ鴨跖草あり紫白の条を以て藤花の形を作り籠の上より下より垂る其躰觀るより堪と云秋より至て虫を入擔の下より掲或ハ籠外より掛く負ハ虫合 虫の声を聴て目を悦しむ夜ハ灯を聴て耳を娛しむ

胸の霧 思ひの晴やぬ胸の霧

胸の月 萩の志をり 胸の月胸のうちの憂ら

八月

紫草花 花紫草の部より出

椋葺 和漢三才図会椋の木は土より生ず形状榎葉より異なり

椋鳥 漢名未詳 和漢三才図会椋樹より棲故ニ俗呼で椋鳥とふ形小鳩の如くして項白く背灰黑色背の下黑白層々眉淡黄頷の以下腹より至て俱より白し翮の上灰黑色の斑あり翅の本微白し羽黑白交り尾黄色嘴の辺微黑を帶脚脛黄なり声鶏より似て喧く好んで群をなすと又也椋鳥あり状相似て小多

九月

撰虫 公事根源是ハあるべきの式あり支ふあり殿上の遊遥とて殿上人とも遊びて嵯峨野ちぐくむひて虫を花

木欒子 藤恭曰稟華此樹柔よくとゝ入て奉るべく木槿より似て稍長大あり子殼酸漿より似て其中実あり熟せる豌豆の如く円く黑くして堅硬て数珠とまるより堪る者是あり五六月花咲むへ

椋の實 時珍曰無患子樹甚廣大枝柔こゝ椿の如し特より其葉對生て五六月白花を開き実を結ぶ大さ彈丸の如し状銀杏及び苦楝子の

如し生ハまく熟もれバ黄老るときハ文紋あり黄む剥
栗 殼を去て仁ともる者 搗栗のるゝ あり

5 七月

烏鵲の橋

しらかの部に注ス

盂蘭盆會

日本紀 齊明天皇三年七月始て盂蘭盆を設け同五年勅して盂蘭盆会を諸國に下し講ぜしむ釈氏要覧盂蘭盆ハ是釈氏の孝を述恩を報ひ苦を救ふの要なり目蓮の母をもてふを以て始とす梵語に盂蘭此に倒懸といふ盆ハ方の器之事文類聚盂蘭盆経に云目蓮比丘その母の餓鬼中に生るを見て即鉢を以て飯を盛り往て与母に飯を食いまゝ口に入らず化して火炭となる仏に食ふて食を得ず目蓮大に叫ひて馳還り佛に白す仏の曰汝が母罪重し汝一人の力いかゝともする所にあらず当に十方衆僧の威神力をもつむべし七月十五日に至り当に七代の父母現在の父母厄難の中にあるもの為に百味五菓を具へ以て盆中に着て十方の大徳を供養すべし仏衆僧に勅して皆施主のために七代の父母を冗願し禪定の意を行ハしめその後食を受よこの時目蓮の母一切餓鬼の苦を脱るゝを得たり目蓮仏に白す永く来世の仏弟子孝順を行ふ者又盂蘭会を奉しその苦を得せしむべし可なんや仏言く大に善し故に後代の人もまた因て廣く華飾をなす乃木を刻み竹を割り餅餙剪糸花果の形をなし工巧の妙を極るなり

鬱金の花

時珍曰鬱金二種あり鬱金香是花を用ふる者ハ其苗薑の如し其根大小指頭のごとく外黄内赤く人以水に浸し色を染む又微香氣あり又曰四月の始め苗を生ず薑黄に似て花白く微紅あり未秋に莖中を出して実なり

兼三秋物 上露

嘉元御百首 瓜のうへの野ならの草の上露ハ花にて下葉にまとゝ結びけり 頭覓

鶉

和漢三才図会 按ずるに處々の原野に多くあり甲州信州下野最多し畿内の産又勝れり黄赤二白斑の彪あり珍き彪の如ハ人甚これを賞す其色知地快と云が如し数系有囀々快を上とし毎に早旦日午夕暮に鳴凡春二三月始て鳴芒種に至て色を止む六月又更に色を発し中秋に至て声を止む人是を養ふ其雌ハ小く足卑く轉らず呼て阿以布と云○片鶉 駈鶉各頭字の部に分ちて註す

鶉鷹

鶉を取る鷹之

衣

荀子曰子夏之衣懸結と云 鶉のごと云 御今只俗人の短き着物をいふ然るに秋の季もつゆ多生類に三旬去あり○一説に衣の裾破れを繕の毛に似たるをいふ夜分に鶉の床とゝ成り出せ人此道理を了簡もなく余のなにかりてさらに空を翔らむ昼も草のうちに隠れ夜分にあるゝと定とるとこそ云へ

鰻簗

和漢三才図会 鰻鱺物冬春ハ泥穴に蟄て五月に至て潜ぎ出ず故時味勝れ子を生ず鐵くゝ長サ三四丈性滑なり利く泥中を潜る故捕へがたし江州勢田城州宇治名を得たり紀事 秋月鰻鱺魚流に従ひて下る是を落鰻鱺と云簗を以てこれを捕るに流に従て簗の中に落入故に捕へ

剔くして魚店に多く是を賣る、

八月

宇佐宮祭

十五日　豊前宇佐郡築紫にあり、欽明天皇三十一年豊前國厩の峯菱形の池の上の民家の児に託して曰我は是第十六主誉田天皇廣幡八幡なり我を護國霊驗威身大自在王菩薩と名づく、迹を諸州に神明に垂る今顕に此地に在をくよりてこれを奏せ勅して祝をこふ八方に八色の幡を立つる故に託宣して八幡と号す、社説に當社祢宜奏して云大神の託に宣く、我元量劫よりあのかた三有に化生して善行方便を修し、諸の衆生を済度せ我名を大自在王菩薩と申せと、帝叡聞ありてあまねく許しくはふ公事根源八幡八番跡の号後は豊前國宇佐に鎮座ましまし聖武天皇東大寺建立の後巡礼ましまさんと勧請申されき、されど勅使あるは猶宇佐に参せず、宇佐宮祭りの人は勅會なり

宇治の花園

山城　放生會等は地をたまはるも風土記兎道とは輕島明の宮の御宇天皇の御子宇治の稚郎子桐原の日桁の宮をつくり宮とし給ふ年浪草三除齋云兎道の稚郎子崩御の心を新勅撰に晋こ人のあらじや兎道の稚郎子宇治山の秋の花園あまたこそ思ひよ宇治の花園を桐原の日桁の宮の花園に歌に惹鎮和尚の稚郎子崩御のあとをとこの人千梅春耕に頼通卿の花園と記せり稚郎子の崩御のあとを詠る哥に臣下の花園をとり合せて詠る例なり殊更惹鎮は宇治の関白頼通公より五代後法性寺兼実公の子に其先祖の花園をとりてまはらん

薄紅葉

薄色のうみ和漢三才図会梅嫌木　百字葉　同

九月

太秦の牛祭

十五日　紀事山城國太秦の廣隆寺は常盤村の南山の内村西北にあり桂の宮院内に伽藍神あり大辟の神社と号す祭る所の神秦の始皇帝なり元亨釈書聖德太子九つの伽藍を造る四天王寺法隆寺元興寺中宮寺橘寺蜂岡寺廣隆寺池

尖り微小き鋸歯ありて野梅の葉に似て小く冬凋に春芽を生ず五月小白花を開く畧南天の花に似て子を結ぶ初は青色十月華落て子紅に熟す枝幹に添て多く美し一種白き者あり異として珍とす然

漆の花

韓保昇曰漆樹高サ二三丈餘皮白し葉椿に似て花は槐に似たり其の子は午李子に似て木心黄に六月刻て滋汁を取る

苗香の實

才蔓會倭名本綱尚書宿根より深冬三苗を生ず叢をなす高サ三四尺肥ある莖葉糸の如し五六月花開く蛇状の花の如くして色黄実を結ぶ大さ麥粒のごとく輕くして細き稜あり俗呼て大苗香と也今惟寧夏より出る者を以て第一とす他国より出る小き者これを小苗香と云ふ按ずるに懐香を天苗香と称す雖今唯大苗香と称する者は八角苗香（本朝未有之）小苗香と称する者即懐香なり和多くこれを種て用る高サ三四尺肥ある莖粉青色細き葉浅緑糸のごとく柔軟夏小花を開く淡黄色子を結ぶ形秋の麥に似て小く節稜ある中の子は皮と共に色まことに黄ばみ乾散る処に苗を生ず

鶉草

一切の園史草史和名抄等に此名あるも祢付るに粟の異名なり或僧師よりこれを聞きしに

海雁

大和本草海に在て其大なる者常の雁に比べれば微小なり色灰色の如く味及び足黑し其頸に環のごとき白色あり翅短し江戸にあり

秦の牛祭

十五日　紀事山城國太秦の廣隆寺は常盤村の南山の内村西北にあり桂の宮院内に伽藍神あり大辟の神社と号す祭る所の神秦の始皇帝なり元亨釈書聖德太子九つの伽藍を造る四天王寺法隆寺元興寺中宮寺橘寺蜂岡寺廣隆寺池

後寺葛城寺日向寺云々紀事上宮王院の庭にあつて牛祭を修し、寺僧各集会し相伴ふ慈覚大師帰朝の日順風を摩多羅神に祈る、皈山の後此神を叡山の麓に勧請し赤山太秦にもまつる此社あり故に今宵寺中の神事も摩多羅神を祭る者なり寺中の行者紙衣を着牛に乗て上宮王院の前に出祭文を讀誦し是悉懺悔の詞なりて いつの〳〵か寺僧のそれ〳〵ちかをつくむ志ろせどもその戯謔に近きを以て近世行者をして此事を修せしむ法令畢つて門前に角力あり○寺説にあの会は大念仏会と称し十日の暁開闢十三日の暁に至るまでの祈願なり下略

雲州橘 大和本草 温州橘其葉蜜橘に似て薄く小なり其実肥蜜橘に似て大きなり亦同上

漆掻 漆樹の注八月の部漆の花の条にこれを掻漆の木の枝梢まそれを悉く鋸を以て挽目を附其挽目より膠を発し是則生漆汁なり奥羽及び下野和州尤多し中國にも所々あり其膠を掻取諸国皆六七月より出せる八違あり

裏枯 御今草葉の外色つきてあること事あり〳〵れとなかハせぶ菌野辺原庭などの文字を入るべし植物に二句あり草の名草の字所ハ植物に三句に連に裏枯過て秋草の句にのるとよふ字もたゝせぶれて俳に今一ツ有べしなり○青藍云木の梢の枯てるを〳〵ら枯とあるろうるこのあまどころ〳〵御今の文体にて草に限せるらしをもべし、

梅紅葉 梅の木の葉の紅葉せるあり

う 寒 秋の寒さなり

ゐ いの部に俤せ出す

の 七月 残る蚊

残る螢 残る蠅 貞享式残るとよふ字を其季より此季に残らるべ残る

と云る道理なり、中略、壁へた残菊八重陽に残るべし、残る蛍ハ何に残るべきや残るの字ハ絶て其季の次に取りて此詞を残るの字は例とせ〳〵 青藍云年浪草俳諧歳記に残る蠅を通俗志に考ずして六月の部に出せり通俗志ハ椎泊の書にして、

残暑 秋暑山谷詩西蕉門の式に所ゝ故今改て秋季とす 凡挽不来残暑推不去 掛軸来て みる秋のあつさかな 支考

後の歎入 春の部三注に後の字断らるべし、秋季に連さらに秋でるべし、発句も秋季の所ゝ後の字に及ぶべ

八月野

口念仏 十五日 播州加古郡教信寺にあり世を野口念仏とよふ浩和天皇の御宇教信とよふ者あり姓氏詳なるべし或ハいふ南都奥福寺の住僧永西坊の弟子なり〳〵加古の駅舎の北に草庵を結び常に西に向て称名念仏を性仁愛にして旅人の荷を助け労を救ふ貞観八年八月十五日完栗の卿に なりて殺されぬ首ハ教信の庵に贈りぬ骸ハ其地に葬る毎年八月十五日僧徒多く教信寺に集りて仏事念仏をなす 釈書の略に云摂州勝尾寺に僧あり勝如と名く八月望の夜一僧来りて門を敲く即迎へ入る客僧に吾ハ播州加古の教僧なり念仏の功力によりて今宵極楽に往生をるあり尊僧ハ必翌年の今宵往生せべきなり 中略 去る時に空中音楽きこえ明年八月十五日の夜果〳〵死せり

後は彼岸 春秋の彼岸ハ昼夜等分にして長短なし、仏道ハ中道を崇ぶ此時節にして中道の辰なり故に仏事を修す提謂経に浄土三昧経に八王子に善を修せるあるべし八王子とハ、立春春分立夏夏至立

秋 秋分、立冬、冬至、是也、天神の治神陰陽交代まる時なり
なの日梵天帝釈鎮臣三十二人、三十二人司命司録閻魔大王、
八王使者悉く出て四方を巡り見人民の善悪を校へ録まるといへり、
故に善事を修すべき也善導大師観経釈念仏して西方
往生の願行をなまと云、冬夏の両時を取まず、春秋の二節を
とる又仲春二月仲秋八月両時ハ正東より日出て真西に没る、弥陀
仏の國真西日の没所にある故に弥陀の
在所を衆生に指示して往生をとげしむる也

後の出替 紀事

雲嶠類要に云秦の人本家婢を得て一子を生む妻ましせ
を悪こと乞て隣家に與ふ、鄰家大に冨貴なり、本家貧し、
後二月二日を以て取帰まる、后復本家富隣ハ貧し、和俗二月
二日を家僕の交代の節とまること元此本くなり、後二月二日
八月二日

野分

月令仲秋月盲風至注盲風疾風
とまく、也倭名抄 暴風漢語抄云 八夜知又乃和木乃加世

野の山の色

御令 あのくなるこの秋なり、植物に二句之中略
又枯野も色の字なくバ秋なり、枯野とせかりハ
冬なる

野菊

こくらせ也 野原に自然と生ずる菊を
云なり、花筆にも菊に似て小之、褐紫の
花多し、稀に黄花ありとぞ、是上古より本邦にある菊なり、
小毒あり、今ハ合食ふべからずと云り、今人家に植て翫ぶものハ唐
土より来る上古ハ
野菊の外なし、

鴨

和漢三才図会按まるに俗ニ云野
雁なり、頭頸灰白色觜の端黒く、
其脊に黄赤紫の豹文あり、翮深黒腹
正白脚掌蒼黒にして后の趾及蹼なし、

九月

後 秋雛

滑稽雑談和國の女兒雛遊をなまて事古き物
語まもみえ、上巳の節に拠あるのみし、今又九月
九日に賞まる女兒多し 源氏物語にも常ににも雛あそび
まこころんじせバ重陽にありてあそぶ左もあるべきか、俳諧
是を名づけて後の雛祭とも云、後
と、上巳に對してえるなり、

後の月

なの部十三夜の条に注せ、

野の宮の別

桂川の御祓 山城國葛野郡小倉山の下 椿原よりして伊勢の
斎宮始め所に柚とまうふによりて伊勢太神宮を勧請まる
所嵯峨野なり、故に野の宮と称ま、延喜式凡斎宮の親王
定り畢りて宮城の内便りよき所をトして、初斎院とし祓
禊して乃チ入る明年七月に至りて此院に斎ま、更に城外の
浄野をトし野の宮を造り八月吉日をトして河に臨みて
祓禊して、即野の宮に入云と 野の宮の別とハ斎宮なるよ
絡らせのひて、二年めの九月伊勢へ発りさまふとき、天子へ御
暇乞に参内しゆふ之、此时天子御手づから由豆の小櫛を
斎宮の御頭へさしてまふとて古を別の櫛と申とぞ、是
によりて伊勢斎宮に移りたまふ之、故に野の宮の別と申之、
この小櫛ハ素盞烏尊稲田姫にさけなれし因縁を以て
斎宮にさけのふとぞ又別の御櫛由豆の小櫛とも 日本紀四ノ分 崇
神天皇六年、天照御神を豊鍬入姫の命に託して大和國笠
縫の邑に祭りのふとぞ 同書六ノ分 垂仁天皇廿五年三月天照太神を
豊鍬入姫命に離まて倭姫の命に託のふとぞ 同昼七ノ分 景
行天皇二十年二月五百野の皇女をつかハして天照太神を
まつらしむと云とありし三代らくのあとくなる故に代て皇女を伊
勢へ奉り宮仕させのふなり、天皇即位の後親王の内親女を
えらこ、太神宮の御給仕と定めなふことをトとうふ、内
親王なきとさハ諸王の姫君をト定まる例ありしとなせよ
も定め奉る、二年めの八月より翌年の九月迄野の宮にま
しまし、此間三度の神事三度の祓ありて土御門院承元
二年四十一代の斎宮後鳥羽院の皇女粛子内親王の後此
事断絶しとかぞ、凡斎宮群行ハ九月十七日之、其前日
桂川においてさ祓禊を修まし、ちとを桂川の御祓といふ、桂

川名山城國葛野郡にあり、**残菊** 菅家文章黄花之過重陽世俗謂之残菊〻重陽以後の菊をいふ、残菊の宴八十月五百〻冬の部にべし、**残草** 菊の異名藏玉に載せり、按ずるに万花にあるを残る故の名なるべし、**野山の錦** くの部草の紅葉の条に併せ注す、

七月

化生 五雜俎歳時記にいふ七夕に俗蠟を以て嬰児を作り水中に浮へて婦人子に宜しきの祥とす、是を化生といふ王建詩に云水抱銀盤弄化生是なり、今の人泥塑嬰児或ハ銀範を以てもちる者、**苦丹** 苦丹を龍膽といふハ誤なり、龍膽の条に注す、**觀音草** 花蕚に似て少く狹く短し、石菖に似てもの〻きなり、六七月莖を抽でゝ花をあらはし穂をなす、淡紫其蕚さき長くべし、是なる大和本草にハ、觀音草無花無穂といへり、京師の俗中元の日此草を以て蓮の飯を搏る、觀音草の名義なるべし、**常山花** 和漢三才図会根を常山と名け茎を蜀漆と名く和名久佐木処々にあり、其茎甚だ臭し、高さ丈許、茎梓楸の茎に似て圓く夫呈器鏃にして澤あり、六月細花をひらく白紅雜横る、**常山の虫** 同上蟲ハ此木株の中にあり、蝎〻木の心を蝕ふ六七月株を破てあをを取用て痢の藥に入る、或ハ炙て小児に食しむ凡蝎を取の法豊ある木ハ株に必小き穴あり、管を以て水を中に入るべし虫首を穴より出す、輙木を剪而端を鑄られを探り得る、**粟奴** 和漢三才図会粟の苗に穂

を生ずるを呼て黒き蝶を生る者穂の奴麥の類のごとし、**鑣蟲** 和漢三才図会蟲俗字正字詳なし、按ずるに此虫莎雞のごとし、翅青く腹黄色前脚長く疾走る跳る毎に穴に出入る故に獲がたし、秋分色馬の嘶の音に似たり、因て名づく、**蛁蟟** 呼珍曰秋月鳴て青蛙なる者蟬蛁とす、

物

降り月 滑稽雜談師説に十六夜の既望をいふ月を上弦と下弦月八十居待月の比より廿一三夜迄の月次第に魄を生ずるを望くどうとも云べし月と也べし藻塩草の傾くの義も捨べう〻ぞ、**葛、同根を掘** 真葛が原 和漢三才図会其葉ハ似て面青く背白し瓜至せば〻翻る恰も掌を反すごとし、婆娑として声をなす、故に寿人葛の茎を裏見と称し人の恨に比ふ、大和本草根を冬月或ハ春苗を生ずるに用ふ長きハ数尺乾して用ふ葛根是〻古式八月の季とす不審○真葛の真ハ蔓の辞なり、真葛が原ハ京師知恩院山門の南にあり、只葛の生ずる原をいふなり、**花壇** 貞享式今按ずるに花壇ハ花畠も決して秋に定べきに〻草の花、草花實 諸草のごとく春夏に花を開く者あれど、秋多き故無名の草花を秋に実をなす者多し、古今 **栗** なるひとつ草にぞ春ハ花秋ハいろくの花まであり、**芋** 芋の部蓮芋、**觀音寺梨** 近江國芦浦観音寺に生ず微赤く甚だ大きく多く味甘し、口中にとろけるがごとし、**丸万疋** 鑢一名丸万疋とも云ふ、右の部

鰹の条に注せり

八月

桑名祭

十八日春日大明神の社勢州桑名の城下にあり祭る神四座別當仏眼院説に云経津主命ハ、神護景雲元年下総香取の宮より勸請せり文武雍槌命ハ、正應二年八月十八日常陸國鹿島の宮より勸請す天兒屋根命姫大神ハ永正二年八月十八日伊賀の名張より勸請あり毎年八月十八日を以て祭神とせり王応永仁の月日を以てもせを修せりとなり○先十七日社前の南北に車一輌を飾夜に入て試樂あり翌十八日祭礼の式件の車を南北へ引渡し音楽を奏す明和十年の春田禄以前ハ両社六座とし北三崎の神社三坐南春日の神座三坐共に往古ハ春日鎮坐の日を以て祭る田禄後祭礼延引せり三崎大明神ハ土地の神へ鎮座の年月詳ならず凝洲崎烏洲崎泡の州嵩合せて三崎とかゝ又七月七日の神事あり氏子貝殼川に於て石を拾ひ来て両社に献ずる古石取の神事といふ此日雛逐物を出す○此八月祭を天武天皇の祭礼と記せる書あり日本紀に天武天皇元年九月朔車駕還伊勢國桑名宿りかゝ今駅中に神社あり、よりて誤り記せり

苦参引

時珍曰苦ハ味を以て名く参ハ功を以て名く和漢三才図会其花莖の梢に穂をなす七八月間に莖根葉ともに薬用とす故に根を連ねて採る

薬堀

秋野山に生ず莖草をとる茯苓突あり句よりて秋とあるべし

虞美人草

大和本草名花譜に云花四瓣色艶嚢に類して小なり國史に云呉俗呼て虞美人草とす云是ハ四五月花をひらく者なり

花彙 虞美人蕉 紅蕉 此芭蕉の一種 類説 褒斜山谷の中に虞美人草あり形鷄冠のごとく大なり花あり葉皆相

九月

菜の袋

きの部菊酒の条に注せり

栗の節供

きの部菊の節供の条に注せり

九日小袖

菊襲 清厳正徹記 九月衣類菊襲面白裏紫の今日縹色の小袖を着一互に相賀せり是を九日小袖と云

鞍馬祭

九日 諸神記 鞍馬寺田岐の社天慶年中勸請せり 神社啓蒙 鞍の社ハ山城國愛宕郡鞍馬山にあり祭る所の神一座大己貴命○此社ハ天子不豫世騒動の時鞍を此神前に懸く故に由木と号蓋大己貴命少彦名とも疾病を療し天下を治るの神なりをもて五條天神及當社に鞍をかくるの遺法なり或説に祭る神素盞烏尊とせり例祭九月九日あり八日の夜氏子の男女供物を旅所に献ず

勸學會

十五日 三月九月十五日一年両度行なる 公事根源 勸学院の大学の南に此院を立られ一ハ南曹とも申ける冬嗣大臣遠き慮りまおもへけるよりて子孫親族の学問をすんとて建立す

呉服祭

あの部穴織祭の条に併せ註せり

胡桃

庖厨本草 此木こうとうに似て最も大なり其実樹皮大に色淡く皮厚く硬くして破せり仁脂多く味最も美し

槇櫨の實

蘇頌曰槇櫨の木葉花酷く木瓜に類せり

對せり或ハ虞美人の曲に唱ふ此ハ両葉撫掌して頻に舞ふ如し○鷺水が新式に口決あり云ふ何とも草を

栗茸

和漢三才図会 山原に生ず高サ寸に過ぎず繊四五分円く巻正白色剥て故に栗茸と云ふ

下簗

その部落鮎の条に注せり

瓜ハ比もゝ孔バ大ヨリて黄色あせを乗むるゝ惟蒂の間を見るヨ重蒂乳のごときものあり故則槙櫨あり大和本草

花ハ林檎又海棠ヨ似て

ありなそ用く実ハ秋熟を

未詳木ハ蜜柑より

長一寸ゝ早実る

九年母 大和本草 俗ヨ九年母ヨリ名を

栗 事類合璧 九月霜降て乃チ熟し其苞おのづゝ裂て墜者久く藏むべし苞裂ざる者腐易し○落栗、球栗、焼栗、栃栗、茅栗、剥栗、打栗、出落栗、三度栗、山栗、錐栗、搗栗、各頭字の部ヨリ

熊栗架を掻 時珍曰熊石巖枯木ヨ在を山中の人ものを結館とし性よゝ木ヨ上り好て栗を食ふ故ヨ攀縁て梢ヨ至ゝ枝を折りてあゝ鋪て居所を設く是を熊の架ヨいふ熊館の類ゝ

茱萸 和漢三才図会 胡頽大抵三種あり其葉と実サ一異てあゝ共ゝ一種春月ヨ當て苗を種る時実熟を大さ小棗のごとき者ものを黄代胡頽子と名く一種五月実熟を大さ棗のごゝ茎長くして下り垂る一種九月実熟をゝ其大さ櫻の子の如くして簇りある

草牡丹 大和本草 葉ハ牡丹ヨ似て宿根より生ず又実をもて生ず是又牡丹芍薬の類ゝ

草の主 菊の異名 堀川百首 このごろの白ひあし

草の紅葉 匡房

草の色草の錦 野山の錦草の紅葉を錦ヨ

林 織てとぞ錦しやうん 新続類

崩魚簗 秋の野ヨ下り簗の破壊るとゝぐ咲ける花の千種ハ邪忠

をいゝ魚簗の形状春の部上り魚簗の条ヨ注を

暮の秋 暮ゝ行秋をいふ秋の暮ヨ限ぐへ

九月盡 九月の晦日をいふ

七月柳散 晋史

蒲柳の質秋ヨ望て先ッ零て

八幡安居の頭 十五日 紀事 凡安居の頭ハ大紀管ゝ故ヨ三年以前その頭人を指ものを先前年の十二月朔日より翌年の十二月十五日ヨ至ゝそ八幡山下の郷家安居の頭を勤む郷家村里中の長をいふその土地の中ゝて姓氏ある者ゝ又十二月八日今日石清水安居頭人の宅ゝあゝて逆所小細の神人長吏の補任を授けものを指部といふ又十二月九日頭人の宅ヨ郷家衆を饗応し能拍子ホあゝものを古那志といふ是小習礼の訛ヨうゝ又十二月十二日頭人夫婦杉山不動堂の前ヨて垢離を修ものを精進入といふ十二月十三日頭人浄衣を着て七所の社ヨ参り奉幣あゝ頭人の婦も又ものを従ふ並ヨ郷家烏帽子浄衣を着て奉供ものの行粧甚ゝ古風あゝ故生川ヨ橋二ツあゝ一ハ安居橋と名く是安居當人の渡る橋ゝ常ヨ不浄の人を禁ず頭人ものを洛せ公ゝ今日山上相知る所の社僧の坊ヨ止宿して精進潔斎をるゝもの間西郊桂の里の女子孫夜又白布を以て頭髪をつゝみ来りて桂飴を奉ぐ是を桂帽子ヨ称ものを今京の童謡ヨいふ桂帽子是あゝ十二月十五日安居頭人夫婦社参本社の前ヨ火あゝ松一本建て白布二疋をその上下の枝ヨかけ人を遣て仮ヨ猪のまゝをしてその松ヨ登せかけ布の枝を伐携て頭屋ヨ帰ヨ後代修頭の故ものを

増山の井 今八十二月十五日ゝ

糒米 本朝食鑑 今製る焼米ハ青稲を以て稃糠を去り炒り過して穀を舂き麁米とあるを此を焼米ヨ称ものを甚佳味あり勢州荘野の市上ヨて焼米を造る青麥粉を以て俵子を作りものを裹こて四方ヨおくる

藥師草 弟切草ゝ

を の部

益母草 めはきぐさ めの部 **癸花** ひくうせひ 嫩なるつ艸

小白花をひらく、内微紅あり、児童其花をとり唾つけ志めし、茎付方を上まして、手足或ハ頬に貼るよしあり、癸のぶくに依て名るなり、○是和産なり、其莫の茎女青に似て七月茎の間に筍咲の花をひらく、五瓣まして少し瞿麥の形あり、その部靖蛉の条に出

蕪三秋物

薯蕷 やまのいも

和漢三才図会 和名夜万都伊毛、俗二夜万乃伊毛、今云長芋、其根の長さ尺たらず、周り二三寸、灰黄色肉白し、煮て食べし

救荒本草 薯蕷溪の辺に崎を出し、時時風水に感じて鰻に変ずる者をこれ人往々あり、○按薯蕷といふ薯茎といふ又山茶といふ、初め唐の太宗諱を蕷といふ因て辟て薯茎と改む、又宋の英宗の諱を薯といふ因て山茶と改む

焼帛 躬恒秘蔵抄 焼きもめふ馬ふどの尾髪をきりてたをみて、その余りを焼て田に立る、其髪をこのぎて鹿のたちあぬ、それを焼てあり云、

八月

八幡祭

放生会 八月十五日諸国ともあり、とりわけ男山の神支を放ち鳥 又て京師の人八幡祭或ハ放生会といふ、社頭義豆の南 八九町あり、京を去ること四里余男山石清水と号、或ハ雄徳山鳩の峯と称す、欽明天皇三十一年冬肥後国菱形の池の辺民家の児三才の时神託して天哉ハ是人皇十六代誉田天皇也、是よりて豊前国に鎮座して八幡太神と称す、傳へいふ貞観元年秋七月八幡太神鳩の峯に移るもくめ釈の行教南都大安寺に居る、これ僧、姓ハ武内大臣の裔なり、勇て貞観の初め宇佐の神祠に詣つ、一夏九旬、昼ハ大乗経を説、夜ハ密咒を誦す、一夕夢中に太神告て云師王城に帰らば我も又隨ひ行王城に居ること当に皇祚を守るべしと、行教やがて山城国山崎に至るその夜太神又夢中に告て云、師我居る所を見よ、覚てこれを見れば東南男山鳩の峯に光を現す、行教これを奏して宮殿と成る 正殿三座中八幡宮 応神 東八氣長足姫尊 神功 西八比咩大神、玉依姫 後嵯峨天皇源の姓を諸皇子に賜ふ時、八幡宮を氏神とし、此社を以て本朝第二の宗廟とす、毎年二月十一日初卯の日神楽あり、御神楽に准ずる、八月十五日放生会あり、養老四年九月征夷の事あり、大隅日向の両国逆乱をなす、宇佐の宮に祈請せしめ、その祝宜辛島勝婆豆米の神軍を率て、その賊国を征し敵を討て利あり、太神託して曰合戦の間多く殺生をいとなむ、宜く放生会を修すべしと、諸国の放生会ありしはこれ始なり、

紀事 今晩神を輦中に迎へ奉り、神幸を促す、左右の馬寮御馬二疋を牽、召使官掌外記史左右兵衛の府弁参議上卿左右兵衛府上臈前駆小舎人屋殿に参る、白木神輿猪の鼻を下り宿院頓宮に至り、行列幸ふ准ずる、この式後三条院延久二年より始る、

八束穂 豊年の稲

当社の祭式甚だ繁多なり、故に略す、

山雀 和漢三才図会 状畫眉鳥に似て、頭黄白に赤色を帯ぶ、眼領の辺に黒き條あり、背灰赤色、脊胸尾ともに黒く、腹淡赤、性慧巧にして囀る好て胡桃を食ふ、低撚の輪を作り竈中に設く、時ハ飛て其輪を潜る、別に箱を竈の隅に安て宿處とす、その鳥藝をなすこと山雀の類を凌へて放ちもの乙由

九月

山口祭 中の巳午の日周防国吉鋪郡仁壁の神社、

敗荷 注に不及

九月中の巳午日祭礼を行ふ、これを山口祭といふ、山口の古名ハ仁壁の庄故に仁壁の神社と号す、祭る神住吉三神を以て

本社と共に合せ祭る神三神味鉏高彦命下照姫の命各一社以上三殿三社をべて仁壁の神社と号也又織機大明神とも又稲荷とも称也衣食の工を主りかふ神なりとなり此号あるを祭れのはじめ織機の神支あり次の日神幸神輿三坐本社の西神幸の地に出し奉る流鏑馬あり皆國主より是を執行せらる　有司ときどき國主の拜礼あり又六月御田の祭あり鎮守の年月詳なり人王十一代垂仁天皇の御宇勅幣を奉らるその傳記失散也

八幡

花の頭

廿日 紀事 山城國八幡山の社僧九月廿日花の頭を修也先六月より撰むべき花莖を造る也を地盤剥といふ我俗板を割を片といひ又剥といふ是板を剥て莖を製るの義なり花の頭といふ社僧の子より髪を剃泉僧の列に加るのとき社僧を饗するに彩笹を以て草花を製し莖を神前の廻廊に飾り酒宴の興を催す故に花の頭と称也

山路草

菊の異名○もとゝ山路のきくハ斧の柄のくちぬるのちも猶やまんと称也

内大臣実継

焼栗

焼る栗なり

山粧ふ

卧遊録 秋山明淨而如粧

破芭蕉

芭蕉翁移芭蕉詞に云唯この蔭は遊びて風雨に破れ安きを愛するのみと云

漸寒

次第に寒きをいふなり秋の末の寒さをいふ

七月

槙賣

ろの部六道参の条

曼珠沙華

天和本草 金燈花鐵色箭とも也

云月令廣義曰冬春葉茂り夏月花を生じて葉死る花葉相違らざる此花下品の其葉石蒜に似たり一類なり此花を國俗曼珠沙華と云翻譯名義集曰曼珠沙は云柔軟又赤華と云酉陽雜俎曰金燈草俗人家に多植を種るとを悪ふ一名無葉草

と云花あるときは葉なし葉ある時は花なし○俳書に曼珠沙華石蒜同物とも也とよく笑信の説に從ひ石蒜は右の部に注也

松虫

和漢三才図会 蟋蟀の類褐色にして長き鬚頭黄なり野草及び松杉の籬に在り夜羽を振て鳴声知呂林古呂林とよぶなどし甚だ優美なり凡松虫鈴虫貧人得がたし夜燈火を照して時に光りを慕ひて来るを捕へて篭中に畜ふ○今俗にリンくと唱を鈴虫といふ也ろ〳〵是松虫なりといひ鈴むしハチンチロリとゆを

兼三秋物

真夜中月

芒夜七子の刻に出て午の刻に入

十寸穂の芒

無名抄 穂の長さ一尺なり故に芒を十寸鏡と書る

真蘓宇の芒

同上 真の蘓枋と云心なり真蘓枋の芒と云

真苧穂の芒

糸 同上

深きもとゝきの名なり又真麻の心なり是俊頼朝臣の哥よりみて侍るなり布の糸をくりうけてと侍る糸なりとの乱也とする やうなり 堀川百首

花もとゝきはもとの糸をくりのけてなんもとも人をおもはゆ　俊頼○おもとの芒と穂の赤きをいふおもとは草の名なり語の轉ドとなるなり赤赫の意なるを白紙とよむ〜て、各別種に注せるハ誤なるなり

水濱臣の松尾梨

形観音寺梨に似て雪のごとく漿多なり今洛の人家所々に接得て項妙寺梨と一双とも也

圓梨

青梨の種類なり大きく皮薄く色青く甘美なり

八月

待宵

八月十四日夜孫明須詩云銀河無声露

暗垂玉簪初上欲四時情擅素瑟宜先賞明夜陰晴未可知○待宵ハ翌の夜の晴曇りはあらざけせ先今宵月を賞もるべし三潮草 待ハ翌の月を待義あるべし

松茸 和漢三才図会 凡松蕈ハ山城の北山の産最佳之赤松の陰所秋の両湿の為ニ醸されて生ず初め菌柔を戴きて見ざるに漸く長ずる者二三寸頭円く柄あり鼓の腿の如し其大なる者尺ニ近一日を経て発く外の色黄白紫を帯び白く細く深く刻こあり其柄太き者柔ありて味良し

舞蕈 同上 湿處或ハ朽木ニ生ず微柄ありて一株庁々と叢生ず火炎茸の如く上黒く元白く味脆く甘し

間引菜 貝割菜 摘菜小菜 和漢三才図会 九蕪菁蘿蔔の類大抵八月種を下し彼岸中ニ苗を生ず其繁きを拔て食ふ摘菜間引菜是なり又曰苗生下地を出ること二寸漸く茁て三葉あるを蔬とす是を貝割菜と号を

猿子鳥 和漢三才図会 正字未詳 状大さ雀のごし全体灰黑胸頸淡赤羽灰黑色ありて黑き彪ありて尾の下両端ニ白者ニ其嘴短くして赤黑く脚黑く頂灰黑頭より胸ニ至て淡赤ありて白き圈あり千葉菊花の後のぶこし猿ありと照こ大ありこあり

豆鳥 豆甘漢い の部 豆畑 豆畑の条をみよ

九月

豆名月 八月十五日の月を半名月といふ九月十三夜の月を豆名月といふ

外市 市部 住吉相撲会の条をみよ

鞠花 菊の異名 藏玉 藏器曰 菊の字本鞠ニ作る鞠ニ従ふ鞠ハ音キク訓マリ又鞠の如き形をいふ

榲桲 藏器曰 樹林檎

の如く花白緋色つくりかせと 此種蕃邦より渡して此初ハ則蛮語あり今京師ニ多し 梨子の如く風味も又梨子ニ似て小ク丸くして色黄ニ菓子

豆引 和漢三才図会 赤俗作角を莢といふ葉を藿といふ莖を萁といふ木綱ニ莢ある穀の総名皆赤ありて大豆ニ黑白黄褐青斑の数色あり大抵夏至十日以前種を下し七月花をひらき九月莢をむすぶ

正木の蔓 真淵翁云まさきの蔓ハ常盤なるかづらをもいふべしとあれども神社よりて用ゐるなり ハさはあるべき中ニ裾と髪とを一ハ一種有々人古今集ニ深山まさきの名ありとあり 外山なる草木も冬のもみぢの去年の古葉色づき落るもあるなり山の岩木あるなり冬のもみぢ南天燭ニ似て黑こあるなり冬のもみぢもみづるあり見ざる山行時ありて目ニつきてこのもみぢ右のごとくハよりみつん○真淵翁の説ニよるときハ定家蔓ニ似て俳諧ニ冬秋季とさくらあるハ古哥ニ色づくと深くなるまりて

青の實 和漢三才図会 冬青其葉冬もすて正青く光沢あり四長ありて表裏ともに鋸葉あり夏小白花をひらき秋実を結ぶ生ハまく熟されば紅ゐ玉のつらつら裂て中ニ白子あり枝をきりて活易し藩籬ニ宜しく堪

海てばき 大和本草 櫧の一種あり葉ハ櫧ニ似て厚く大なり色深青なり面ニ光沢あり屋材ニ器を作り舟の櫓ニ宜し其用櫧ニ同し一類別種あり実ハ櫧より大なり餌ニ宜し民用を助く○実を以て秋ニ宜し

檀 和漢三才図会 其実楝の子ニ如くして小く簇りあり生ハ青く熟して淡赤し

裂き内紅子三四ツ粒あり、其葉秋に至て紅あり、

け

七月

今朝の秋 立秋を

夏解、夏書納 夏八四月十六日入七月十六日解是を夏解と云、一夏九旬の間他の化益の為に聖経及び名号題目を書写し夏終るの後是を堂塔伽藍に納め三界万灵に回向し是を夏書納と云、在家も亦此に倣ふ、

夏解草 釈氏要覧僧尼解夏の日線を以て節を束ねて極越に遺るを夏解草と云、今ち此草を詳にせず、五分法身の座と云、故に吉祥草と名く、漳州府志四時一色泉石の中に生ず山村の人瓶に挿て先を祀る陰字にあり、

牽牛 志の部松子の条に注す、

松の實 志の部松子の条に注す、

葱翠 周礼家に吉事あるに葱翠を用ひ、故に吉祥草と名づく、字彙部ハ伊及反音印草の名、

天和本草 夏解草

兼三秋物

玄兎 月の異名あり

月宮殿 月の都の条

雞頭花 時珍曰雞冠花の形を以て名に命ず春苗を生じ夏に入て高き者五六尺短き者纔に数寸中暑六七月梢の間に花をひらく紅白黄の三色あり中暑花最も久に耐へ霜の後始て萎む、

黄獨 鎮江府志荳蔻に類す葉大にして四く根は芋の如くにして鬚あり味微苦し、○俗に何首烏玉と云者是なり、

枳椇 正字白石李蓋枳椇の実の名の如くその実大さ大豆の如しなを喰へば梨の味あり、小児疱瘡鼻穴閉ぐるものこれを以て其鼻穴を穿つ

ふ

七月

舟形の火 せの都施火焼の条に出ツ

古城 宮城野や荒れる色ある古

藏玉 萩の異名之

枝草 枝草ちとの秋も花をひらく、

藤袴 和漢三才図会高さ二三尺葉女郎花の葉に似て切込あり蘭和名木草云布知波加萬新撰万葉集別用藤袴二字

六七月細き白花をひらく、云ふ今云為袴是なり、倭名抄又アラヽギといふ古哥にもあり、大和本草真蘭和名藤袴八雲御抄にも蘭をふぢばかまといふと書ゆふ葉に麻に似て両岐あり香よし、乾て弥香し、弥香し是真蘭之野にあり秋紫白の花をひらく若葉を ゆでまきて食べし其芳香美味凡菜にまされり、詩経斐詞にもとよ詠ぜし蘭是なり、和訓栞花の色をもて藤と称し、其瓣の蕚をもて袴と称せり、○袴にもあらぬ袴なるむて哥俳諧にもよる用ゝ古今何人もきてぬきうけ為袴なる秋ぞとも野べとなれば曠野

筆津虫 蟋蟀の異名之異名分類古

藤袴とれ窮屈なめてつん芭蕉

き筆の化してもとより筆でつむし秋も今ゆと浅茅生にもとろしある声なるあり、

八月

けふの月 つの部月見の条に出ツ

毛見 紀事土民年の貢を納る凡秋来収納するの法晩秋に縣史先て田地の立毛の善悪を巡検し是を毛見といふ草を毛といふ故に稲麻刈獲さる亦

罌粟子蒔 月令廣義八月十五夜罌粟子を種べば花盛る

兼三秋物

臥待月 八雲御抄子待臥待廿日月あり、挂明抄永徳の頃為重卿廿日月といふ題をもて詠ぜれもろ〻此月の臥待も猶宵の間はもぞ出る」臥待月八八雲に廿日月と遊さをにへども望月よりを廿日月に詠ん

八不審まゝにへども、月の百首あるこゝは八十九日の月又、一説ゝふ〜待月八十九夜の月又ゝ寐まち月ともいふ、

更ゆのち月

藻塩草廿日の月あり、

筆栁

形ホソ〜長〜

蒲萄栁

猿栁 本朝食鑑俗蒲萄栁と称せ或ハ猿栁といふ、味佳ありといへども用ゐまさず、

八月

兢

ゆの部夕顔の実の条ゝ注せ、

木芙蓉

水ゝ出る者ゝ古きゝ草芙蓉といふ、荷の花芦也陸ゝ出る者ゝ古きゝ木芙蓉といふ、時珍曰ク花豔〜〜荷の花の如し、故ゝ芙蓉木蓮の名あり、八九月始めて開〜、故拒霜と名く、中冬凋ミ夏茂ル秋の半始て花を着く、花牡丹芍薬ゝ類せ、紅白黄千葉の者あり、最も寒ゝ耐て落ぜ実を結ぶ、

蒲萄

時珍曰春月萠芽を生じ、葉顔ゝ括樓の葉ゝ似て五の尖りあり、鬚を生ず蔓延数十丈を引、三月ゝ花をひらき穂をなせ、黄白色実連り着く、ゝと星の如し、七八月熟せ紫白の二色有、時珍曰蒲萄酒ゝ造るべ〜、古きゝを酺飲せれば陶然ゝて酔ふ故ゝこの名あり、

袋洗

山海名産図会伊丹ゝて新酒成就の後、猪名川の流ゝ袋を濯ふ、ゝのゝを待て近郷の賤民ゝこれゝ洗滌を乞ふ世風味薄き醴の如し、芦又他ゝ異ゝ、賤の女や袋洗ひの水の汁 鬼貫 青藍云 二季鳥

雁の異名

藏玉ゝ行ゝ古里ゝて

九月

不堪田

二季鳥ゝ〜ふ〜ゝび行ゝ〜ん忠岑

奏

江次第 不堪田の申文九月七日或八五日 公事根源芦ハ訪國の田の損亡〜〜る所々の目録をゝて奉るゝ古きゝ〜ゝそ租税を三分二ゝど免〜ゆふてゝありゝこゝのゝ諸國より坪付帳を奉ぜ大臣陣ゝつきゝ申て諸國ゝ施行あり、

ゝあり、佐ゝゝ塔ざる田ゝいふ心ゝ〜不塔田ゝ申ゝゝあり、

二夜の月

去の部十三夜の条ゝ注ス

福王寺祭

ゝの部鳴滝祭の条ゝるべ〜

佛手柑

和漢三才図会其樹柚ゝ似て刺あり全く柚の葉ゝ似ず稍大く淡青色筋理顕然ゝ〜ゝ畧多羅の葉ゝ似て尖らず

緑豆引

大和本草緑豆一年の内ゝ二ゝ実る故ゝ八重生〜ゝふ○苅収ゝ引

佛甲草

大和本草京都及び諸州ゝ一夏草ゝいふの花あり、又根ゝ〜草ゝ云、根鬚ゝ〜葉ハ細長〜ゝ葉ゝ生り、茎ゝ折て土ゝ挿めハ能生ス滑稽雑談或説ゝゝの葉の形指の爪ゝ似ゝり、故ゝ仏甲草ゝも仏指甲の名あり、此草の葉生ひ出ゝ石地ゝある形、蓮花の如く故ゝ岩蓮花ゝいふ、篤信ハ非〜ゝ、○岩蓮花ニあ〜ぎゝせぎ佛甲草ハ雑物ゝ〜、

七月

冬を待、冬を隣

注不及

小野踊

たの部七夕踊の条下ゝ出、

御霊社御出

十八日御昊の社ハ上ハ京都の北西ゝあり、下ハ京極大炊御門北ゝあり、雍州府志此社始ハ近衛通新町ゝあ

昊上御昊ハ京極の西出雲寺の北ゝあり、上下御昊の社毎年七月十八日御出、八月十八日祭礼あり、神輿二基ゝあり、御昊ハ所ハ崇道天王伊予親王吉備の聖昊、藤原大夫廣継、藤原夫人橘逸勢文屋宮田丸火雷神〜世ゝ火雷神を謂て菅家の昊ゝ〜ゝる者ハ誤ゝあり、傳云御昊八所の内四所ハ桓武天皇の御時ゝ〜ゝを勧請せ、下の四所ハ仁明天皇の御宇ゝ〜ゝを勧請せ、○上出雲寺を上御昊の神宮寺ゝ〜、下出雲寺を下の御霊の神宮寺ゝ〜、傳教大師の草創ゝ〜ゝ今両寺ゝゝゝ

絶より、寛文年中慈眼大師の遺誡によりて、久遠壽院の准后山城國宇治郡山科の郷に於て出雲寺を再興し、毘沙門天を安置し、のふ御炙の社あり、是古を存せるの遺意なり上御炙の御旅所八京極通り中御炙あり、下御炙の御旅所八年々その所を定め、その年神事頭屋の家内に安置し、御旅所に在しの間を以て御旅と称ス

大小星

使 もの部相撲の条に見ゆ、

小鷹狩

滑稽雜談 初鳥狩小鷹狩、少しかりめありと云ふ、万葉新点によるバ差別なし、小鷹を秋とするハ、鶉雲雀その外秋の小鳥狩なり、大鷹ハ冬とす、小鷹の分ハ秋とその種類多し、刺羽といふハ小隼なり、朝鮮より来る雀鷂雀鷹つゝの雄と兄鷂、鷂とのりの雌なり、鶻くちゝ巣あるをとりといふハ秋巣より取を云なり、凡て鷹ハたゝの拵名なり、別て大たゝ鶻を小たゝの拵名なり、

紅梅草

仙翁花 こせの部 るべ、

浮蕾

一名沢桔梗 すゝらせ已 葉ハ葵の形に似て、潤あるところ那岐に似たり、夏の末より秋碧花をひらく、花色あさゝ云之水草なり、花を水葵とも云ふ、葉多し、水葵ハ苔なり花黄なり、○腥し小さきの上の鯤の腸

竈馬

酉陽雜俎 竈馬状促織の如し、俗に云竈馬あるべ食に足の兆 大和本草 蜣蜋に似て黒げ足多く甚高く頭尾さゞりてたゝるゝ竈のあるゝに穴居を鬼茶の方言に井ヒゴ

○海士の家ハ小鮒多しるいゝ孔芭蕉

無三秋物心

萩の枝折 心の月

氷の輪

月を見立て云 東坡詩 氷輪横海濶

氷の鏡

同じ〜月をいふ、

牛蒡引

注に 及胡盧栁

一名豆栁即乾栁 形鳥の卵の如し、摂津あり、淡霜を生ず、

樹練栁

丹波に多し、所謂鶏の子栁、京師にて御所栁を以木練栁といふ、

御所栁

大和の御所村より出ス、樹法の上品なる

紅瓶子梨

瓶子の形なる物 微赤色、極めて大なり、

空閑梨

肥前の産 其味甘梨に亜ぐ、

小瀑江鮒

和漢三才図会 鰌 小き者を江鮒と名く、或ハ名吉、或ハ伊勢鯉、或ハ口女、又伊奈洲走小瀑江鮒と云ふ、中暑八九月稍長ず、大さ六七寸、江海の交にあり、此時泥味多く脂多くして愈甘美、色黒を減じ瀑〜洗ふがごとし、故に小瀑江鮒と云ふ、

八月 小

望月

十四日の月をいふ、

今宵の月

つの部月見の条に見ゆ、

駒牽

駒迎

望月の駒 きり原の駒 忌に依て十六日に改め用ふ、云頭書云信濃勅旨の牧十五所、延喜式に載る所の一なり、天皇南殿に出御あり御馬を分ち取らしむ、出御あるきと云ハ建礼門の前の大庭に於てなり、牽分しむ云、裏書に云、上野九牧延喜式に廿日に云、七日甲斐の勅旨の牧十七日甲斐穂坂の牧廿三日信濃望月の牧、廿五日武蔵勅旨の牧、又十五信濃勅旨の牧廿日上野九牧、以上六分日延喜式にこれなし、この外承平官府十三日武蔵秩父の牧廿八日同小野の牧の御馬を貢ぐ 公事根源 公卿以下次第に御馬を給ふ、馬の差縄をとり御前にまゐる、一疋も取残しなる馬をば引分れ使として次第を以て院東宮にまゐらしめ、あるべき所にまゐらせ給ふ

新菜

秋の田の穂坂の駒を引つれてまゐる海辺の人びも有 御村上御製 金葉 東路をたるゝに生るゝ月の弱き

おくまいやいふ坂の関仲四 拾遺 相坂の関の岩ねを踏まうしゝ山ぢちらゝるかりいらの駒馬遠 猪養 一の戸や衣やつゝく駒むら へ去来

御霊祭

十八日 八所の御霊祭 八所神の名七月の部御霊の御出とゝる条ゐ注を見合せべし 紀事 午後ゐ神輿二基中の御霊の離宮を出て幸の鉾八本、允鉾を床上ゐ建て、捧二本四人を以て持ふを幸の鉾といふ神宝の内特ゐ持ふを尊敬て、又勢力の人鉾を帯の間ゐ立、両手を以持ふを捧げ行ふを祭鉾といふ、又一人笏の先ゐ通祖神の假面をかけて神輿ゐ先ゞ、此仮面の鼻長大あり、俗持ふを王の鼻といふ、別當及び氏子供奉、御旅所より至西のゝゝ今出川下烏丸を歴て、長者町より室町を過り本社ゐ入、上御霊の社八京極通筋違橋の乾二町余ゐあり、下御霊の神輿も同時ゐ拝殿を立つ、鉾五本別當氏子供奉、上御霊の行列の如し、神幸の路次京極を出、椹木町の西より東洞院の西を歴て出水ゐ行、室町を下り二条を過り油の小路の下立賣を上り東へ行、京極より本社ゐ入、下御霊の社八京極通大炊御門東北の方ゐ

定考

十日 名目抄 定考遅ゐ読例あり、例祭八月十八日あり、公事根源 花ハむゝ六位以下の加階をもる人かの藝能行跡格勤をもゝて栄爵を給ひ、ゝる之上卿官の東の廳ゐつきて事を行ふ、次ゐ朝所ゐついて三献の儀式あり、次ゐ安穏の座ゐつゝ、又三献あり、挿頭の花を上卿以下の冠ゐさゝ、大臣ハ白菊、外言ハ黄菊、参議ハ龍膽、其外ハ皆叶の花をさゝ造花ゐあゝ、大ゝ二月の例ゐ同じ、武兵の両省より諸司の輩の舞を撰成をるを列見といひ、そを書あつめて奏をるを擬階の奏といふ、此人々を擇出て定めゝるゝを定考といふ

衣うつ

きの部砧の条下ゐ出、

金剛草

和漢三才図会 山野處々ゐあり、高さ三尺茎枝花葉並ゐ萩ゐ似て小、七月花を開き莢をなす、小豆の莢のごゝ、中の実黒く其根甚ど強し、故ゐ菊人牛馬を繋ぐべし、俗呼て駒繋と云ふ、○陶弘景曰狼茅其根獣の齒牙の如し、故三諸名あり、

革蕈

和漢三才図会 山の麓ゐ木の葉を載出て、状松茸ゐ似て微の外黒く粒々の皺あり、珊瑚乾せば西黒ゐて深草のごゝ裏黄赤ゐて毛糸の如きものあり、

五十雀

志の郎四雀と栢ゐ鮮甲あつて味微苦し、

小雀

正字未詳 和漢三才図会 俗ゐ云古加良、状山雀ゐ似てゐ小、故ゐ俗呼て小雀といふ、山林ゐ多く、頭黒く頬白くして四き紋の如く、背腹白く翅尾黒く、其声滑ゐて多く囀る、捷輕ゐして上下ミえがたし

九月

灯

三月ゐ回し其条ゐ注ゝゝ、

御香宮祭

九日 神社啓蒙 山城国伏見京町の東ゐあり、祭神一座、神功皇后、○古老云鎮座年紀分明ならず、昔より垂跡此地あり、秀吉城を築くの日東の丘ゐ移し奉るとゝ、神の祟ゐあり、故復旧地ゐ返し奉るとゝ、乃今の社地あり、○一書ゐ云この地紀伊郡ゐ属ゐ、例祭九月九日あり、朔日を御出といふ、十日神事能あり、ちゝめ祭る所の神九座あり、神輿ゐ又九基あり、土人本居神とも、今八神輿一基造り山二基、遷物おを出ゐ、○當社八延喜式ゐ載をる所の御諸の神社ゐあり、鎮座年月未考、一書ゐ貞観二年勧請のゝ

後日の菊

紀事 九月十日或八十日禁裏ゐ残菊の宴あり、

御難の餅

十日 文永八年九月十二日蓮上人相州鎌倉龍の口ゐ於て尼難あり、白刃の下僅ゐ一命を全うも、今日宗門の徒餐を作りて像前ゐ供ゐ、ゝをを御難の餅といふ

小倉

祭 十五日豊前國到津の社八企救郡今村の庄到津村にあり祭る神中八應神天皇左八神后右八玉依姫なり、草創年月詳ならず、後鳥羽院文治四年、宇佐八幡を其の地に勸請し、その神秩をかて四時の祭祀備ふ、後より宇佐太祝の子族世々祝史となる、その後清末駿河守といふ人、到津の城に居して常に奉祝ち、天正の季九國乱レて神社灰燼となり、祝史の家族も四方に流離して到る所を去らず、故に里民一宇の祠を立て僅に古跡を存ち、慶長年中細川侯守佐の社を造営し、又到津の社を造り、宝暦庚辰の年小笠原侯更に祠檀謁殿を立て、祭事の古に益日きに加ふ、九月十四日晡後神輿仮殿に遊ぶ流鏑馬あり、夜に入禊を修し舞樂を奏ち、神湯の祝あり當日十音國主家臣をして幣を奉らしめ、又流鏑馬あり晡後本社に還御、一説に小倉祭或八巨掠に作る、山城國宇治の近隣に例祭九月十五日といひ、志ども増山の井その外の書に豊前の小倉と記せるなり、

木幡祭 昔神社山城國宇治郡木幡にあり、雍州府志 祭る所の神正哉吾勝速日天忍骨尊之是地神第二の神にして父八素盞烏尊なり、後に天照太神取て御子とし給ふ、その神下土に降り給ふ、故に山陵多くしてその灵を祭る也、木幡の神社号す、○例祭九月廿日 今神輿二基内一基田中明神之田中社旧所地主の神なり、祭る神詳ならず、或説に柳大明神是木幡の神之

金草 菊の異名なり、藻塩草 名なり、おふ東の 金

菊 花濃黄なり 中黄故名く、

蒟蒻の花 時珍曰春苗を生じ五月に至てこれを移ち長一二尺宿根より自苗生ず根の大さ芋魁のごとし、○蘊頌曰莖斑なり花紫なり、

木の實 清盛成て後古板摸本の増山の井をみてかくの如く一条に記せり

菓物秋多し故に名づく、

柑子 和漢三才圖会 按ずるに柑子八柑類の総名なり 増山の井 再板流布本 九月の部衣打、袖の霜と別条の如く誤め出し、青藍按ずるに衣打ぬめるなり八ども全く衣打者の袖なり霜といふ八九月の季なりと云る心なり出せるを別条の如く書るる書写の誤なり 節環 元禄十年 枝葉集 元禄十六年 本草衣打袖の霜と一条に認めるる誤なるも是ぞ深く考ずして獨稽古なるも別条のごとく認め又糸衣とも衣打と云文字さへ省きて出せる皆誤なり、濱の真砂搏衣の条云露霜を袖に重て打云、

衣打袖の霜

七月

閻魔叅 十六日 釈氏要覧 閻羅王八地獄の主鬼官の総司なり、翻譯名義集 琰魔或八琰羅と云ふ共に静息と翻ず、善を修し造悪の者不善業を静息せるを以て故に或八遮と云ふ、○七月十六日を大斎日とし善事を修し奴僕にも暇をとらせて閻魔堂へ詣でしむるなり、

紫菊 和漢三才図会 紫菊の葉蒲萄に似て実を結ぶ、又一種野蒲萄あり、

槐の花 王安石譯二云槐黄中に其実を懐く故に三公ぶせる位也、○蘊頌曰槐木拯めて大なる者あり按ずるに云槐数種あり葉大きくして黑きを椿槐と名づく昼合夜開くものを守宮槐と名づく葉細くして青緑なるを槐と云ふ四月五月黄花を発く六月七月実を結、和漢三才図会 其花未開時米粒の如く其実莢なく連珠なり中に黑子あり○槐の花本草に四五月開花と云ふ盛に増山の井毛吹草 芽付珍秋と云ふ

狼尾草 付珍曰狼

尾其穂の象形あり、秀でゝ垂ぐ、凝然として田あり故に守田畑の称あり莖葉穂粒ともに粟の如く色むさき黒毛有、

燕尾香 閑室本草 蘭草の葉馬蘭に似て故に蘭草と名くその葉岐あり俗に燕尾香と呼ぶ

無三秋物

犬子草 時珍曰穂の象狗尾故に俗狗尾と名く原野垣墻に多く生ず苗葉粟に似て穂も又粟に似たり色黄白ふして実あり 和漢三才圏会 小児の毒を用て蛙を釣て戯るつくゝ毒

圓座柳 俗云阿波國鳴門例年毒を鳴動して止むと云、形大にして肥円帯附の麦肉起り庶を為す所謂著蓋柳、

八月

芋 藷恭曰子多く細長く〳〵毒多し、

繒行器 絲雀 八朔 紀事 京俗八月朔日家〻の乳母を扶保養所の女子に行器一双を贈る行器の中に生柳茅に菊の花を戚藤の花に白糸餅に赤小豆を点〻る之を茅餅の形戻る白糸に似たり、故に白糸〻と称し又深更と名く和俗赤小豆を称してあずと云ふ物に点ずるを つくゝと云ふ白糸に赤小豆を点ずる、花あつきの義をとりて深更と名つくと云ふ今日童の戯に松茸を以て雉子を作り或は烏賊の甲を以て鷺鷥を作り或は糸紫を以て金灯竜草の実を括り獸の形を作り又桃仁を刻みて松虫を製し毛ホの類を毛を玩び或は互に相贈るまれを頼合と云ふ〇緑雀も雉子鷺の類と同じ又薏苡仁を枝ホの〻折て行器とする相贈る京師の俗これ今日嘉祝の物と云、

えやこ草 和漢三才圏会 榎の根上に叢生ず微一二寸灰黒色裏白〻

榎蕈 龍膳の和名あり、

細き刻あり微香あり味ひ美あり、

九月

榎の實 大和本草 榎本草に楸の類とも今按ずるに楸の類に非ず榎は桑に似て筋多し冬落葉す実は胡椒の大さ秋熟して黄あり味甘し小児好で食ふ、

て

七月

無三秋物

天井守 拾遺 水の西にて月を見ることゝ下に出づ、

照月次 部番椒の条

てらつぎ 木部鳥ぐき

天狗茸 大毒あり故に人ちらつぎ

天王寺一乗會 十四日 摂州大坂四天王寺一乗会は九月十四日或は十五日六時堂に於て法華を修す、法堂傳教大師草創なり且本尊薬師如来日光月光の三尊大師手造なりと云ふ寺説三云九月十五日末の刻衆僧三綱堂の司楽人沙汰人堂仕公人出仕す、先ず時刻を三綱及び一和尚に告て出仕の鐘一番二番を撞諸役人太子堂へ出仕す太子の像を厨輦に入るなり、その式二月十五日の如し、廻廊の下より六時堂へ渡御あり法度の次第振鉾阿弥陀經傳供万歳楽延喜楽陵王納曽利悉く終りて南の刻還御、

天満流鏑馬 廿五日 摂州西成郡天満宮あり祭る所の

神北野ゝ同じ、九月十五日流鏑馬あり、社家ゝ各〻勤む鳥居の辺より天満宮ゝまで馬を馳て的を射る也、

出落

栗 紀事 土俗誤りいふ古へ不孝の子あり、此栗を父ゝ故ゝ出落栗といふ、○一説此栗自ら殼を脱して地ゝおつ故ゝ出落栗といふ、

あ 七月

秋の初風 秋の初つゝのかぜ

秋さるゝ姫 秋の来し支へ、

秋さるゝ姫朝顔 棚機七姫の内之異名分類等ゝる注釈見えず、

秋去衣 八雲御抄 秋去衣とハ棚機の布之御傘棚機の具之云、万葉拾穂抄只秋の衣ゝ、秋さりハ秋ゝ来ゝるといふ事ゝあり、

天の川 銀河 銀漢 雲漢 字彙 天河 箕斗二星の間ゝあり、其長きゝ星河 河漢 と天ゝ竟ゝ、揚泉物理論 漢水の精ゝ氣発ゝて升り精華上ゝ浮ふ宛轉ゝて流る、名づけて天河といふ、ゝ雲漢と云衆星爰ゝ出ゝ、

飛鳥井の鞠 梶の鞠 紀事 棚機ゝ飛鳥井家並ゝ難波家蹴鞠の会恒例ゝあり上加茂松下露拂並二枝鞠上足ホの義あり、堂上及び地下の門人多く集る、滑稽雑談 楮の鞠の事ハ毎年七日飛鳥井家ゝ行ゝ式ゝあり、鞠の露拂ゝ當家門弟の上足の者坪の内へ持参る、是二星ゝ年向る心ゝ、

荒鷹 鷹の雛已ゝ巣を離れ自ら養る時羅を以て捕ふ是を網掛といふ又あら鷹といふ、新ゝ捕へて人ゝ馴ざるを荒鷹といふ、

愛宕火 曽紀事 伊丹池田の愛宕火七月廿三日より廿四至る云、摂陽群談 摂及豊島郡池田村ゝあり、愛宕山ゝ古哥ゝ所謂五月山ゝありとぞ、山上ゝ愛宕権現の社あり、毎年七月廿四日の夜種々の灯篭ゝ火を点ゝて愛宕火と名ゝ、大坂北の町ゝ也

より望ゝ見ゆ星の如ゝ、又愛宕の神社有馬郡逍遥河原新町口ゝあり、祭る所火産昊尊毎年七月廿四祭礼あり、世俗ちまきを愛宕火と称ゝ、

扇置 太平新録詩人皆棄秋扇

朝茶の湯 貞享式 風炉を夏ゝ用ゝ炉びらきを冬ゝ用ふ、木地の炉縁を春ゝ用ゝ炉びらきを冬ゝ用ふ、朝茶の湯ハ朝顔の例を假ゝ秋の用ゝ用ゝ、茶人の家ゝ尋ぬ

青藥 和訓栞 朝貞の条之、朝ごの条ゝ、

牽牛花 蘭をひるの部藤袴の条ゝ注ゝ、

あらくぎ 桔梗

ありのひふ紀 藤袴の条ゝ注ゝ、

青瓢簟 ひの部瓢簟の条ゝ注ゝ、

粟穂 和漢 三才図会 種類凡て数十青赤黄白黒の色あり早中晩あり早粟ハ米実晩粟ハ皮厚ゝ米ヲ一〇秣狼尾草粟奴各頭字の部ゝ注ゝ、

秋津虫 とんぼうのこと、

秋の蝶 との部ゝ、

秋の蚊、秋の螢、秋の蠅、秋の蟬 注釈ゝ及ばむ中ゝ秋の蟬ハ秋ゝ鳴ゝ秋の蟬ハ秋ゝ鳴ゝあり、

兼三秋物

夜朝の月 黒双紙 朝の月八十七日より二十八日ゝあり、

暁月夜 源氏

有明 八雲御抄 十五日以後の月ゝ、

秋月 初音巻 影をきまゝ、ゝ清光を賞ゝ、ゝ有り、云ゝ青藍云空ゝ有て明るゝ、ゝ清光を賞ゝ、ゝ白作ゝ、

○こゝ数人の座寝の種や秋の月貞徳

秋天 や秋のそら九兆

秋風 揚泉物理論 秋氣動其風清シ

秋野の 続虚栗 秋の野やこゝ久るゝ小ゆゆ小ゆ 虚谷

秋水 荘子 秋水時ニ至テ、百川、河ニ灌ぐ涇流之大両ニ涯渚涯の間牛馬を辨へず、炭俵 熊ぐ谷の焼きれる秋の水伐水

秋聲 欧陽永叔ノ秋声の賦あり 畧之 続猿蓑 松の葉も細きもあれど秋の声 風国

秋の七草 万葉 秋野尓咲有花子指折可伎数者七種花芽之花乎花葛花瞿麦之花姫部志又藤袴朝貌之花○是を秋の七種と称す、撫子の一種ハ連能ニ押出シテ夏ニ咲ク 咲をのけ久〳〵盛まて冬迄も有 ゆゑ名ニ霜あゞ徒へハ冬ゝもあり 源氏葵の巻 草花の離ニ咲くるあゞ〳〵こをつとれ〳〵秋のうこゝのゞこうる○霜の後撰ニ咲くる 〳〵この秋 〳〵 千載

秋の山 円機活法 秋色詩 秋山如畫更分明、

秋は夜 物あはれなる余情ニ作るべし○秋の夜を打ゑづ〳〵る嵯峨芭蕉

ありのみ 相模集 さゝりもぎて〳〵ちゝる梨をなさあき人のしるよやるとて〳〵 おきこの〳〵つゆおちりある梨あなゞど千代ありの実と人いふあり○梨といふを忌てありのことゝ呼ぶあるべし、

八月

安濃津 十五日 社説曰伊勢國安濃津城の南ニ八幡宮鎮座往古高良の三神殿中ニ寄坐相傳ふ建武中足利高氏卿、一國毎ニ八幡一社を置んと欲し、伊勢を以て始とし乃官殿を千歳山の上ニ造り、石清水の神を勧請し源家の興隆を祈る、旧記ニ曰ふ永正年中當國兵乱ニよりて、神殿荒廃を、僧願海募りて國中を化して再興を、時ニ享禄二年也、又数十年の後頽廃して僅ニ存を、寛永壬申年城主田丸腦〳〵ニ至ル、祠を林樹の間ニ見る左右何ぞの神ぞ、ある者ハ〳〵村老をめ〳〵ニ問ふ、言ふ〳〵足利将軍の建る所あり、心願を発して土木をあつめ、正殿拝殿神庫華表を造る、寛永十二年初めて祭儀を行ふ、同廿一年垂水藤浮の二村三百石の地をつけて昌泉院を以て別當とす、今寒松院と云ふ〳〵〳〵山上ニあり、千歳山八幡宮と称せり、今の地ニ遷ること、安濃津の城を守を以て安濃津八幡宮と号ス、乃一志郡垂水村ニ属ス、蓋津の城の街坊八奄藝安濃一志の三郡ニ跨ると云ふ、

秋の宮 東宮を春の宮と云ふ、后宮を秋の宮と云ふ、似て七八月淡紅花を〳〵〳〵、

綾巻 茶の部 砧の条ニ出、

藍の花 蓼藍 説文曰其花風ニ遇て吹揚れバ雪のごとし、地ニ聚生ハ絮のごとし、

蘆の花 時珍曰共草東方ニ在て、西方の多ニ〳〵〳〵則西草を以て苗とす、十二月苗を生ず、蔓延るあと数尺方莖ニして中空、筋あり、外ニ細き刺あり、数寸一節節毎ニ五葉面ニ〳〵背緑、七八月花を〳〵〳〵実を結ぶ 和漢三才図会

茜 赤根〳〵以絳を染べし、近世藕方木を以て茜ニ代ふ

通草 蘡薁 頌曰通草の実長さ三四寸核黑く瓤白し、人を食ハ甘美南人謂て燕覆子と、或ハ鳥覆子と名く、七月を過て実を采る○時珍曰通草ハ莖ニ細き孔あり、両頭ニ皆通ず故ニ名く、

粟引 取収を引と云

溢蚊 滑稽雑談 八月の溢蚊を蚊肉を割と云世話より近来秋ニ許用ス

鶺子鳥 和漢三才図会 婆名阿止里此鳥常ニ山林ニ棲不時ニ群飛して寺院の叢林ニ出ること、あり百千群を成して天を蔽ふ状ち雀ニ似て大く脊太し、頭

頸灰蒼まして紡色の斑あり、領黄赤まそ鬐白い背蒼まし赤を帯ぶ黒き斑あり、日本紀天武天皇七年猶子鳥天を敏びて西南より東北に飛ぶ

江鮭 鱒鯰草魚鯉鱮和名阿未

琵琶湖の名産と大きあるもの三尺小き者尺に満ざるものあり、獵魚のごと、江鮭とハ則江湖の鮭なり、河鰒魚よりハ臓多く、湖水にその佳品と、秋八月雨水河より、湖中に流れ入るとき多く川に上る、網を構へ或ハ大なる攪網を以て捕ることを取る、

新走 新酒の尤早きものを新走と云、

秋の暮 湖東問答去来問云春の暮多くといへり、尤秋の暮ハ秋の夕間暮あり春の暮ハ暮春の事に侍るべし、答云春の暮ハ暮春あり、又一片に限るべからず、一句の趣するにしたがへ、○秋の夕暮といふべきを文字の数もなくあるき句もあるべ暑くて秋の暮といふあり、近あるべ下五文字に秋の夕といふる句あり、秋の

九月温酒 御光明寺殿下御抄九月九日ハ寒温のさかひ身内ひやうして時に熱温酒を飲めば病を得ずさて九月より酒を温め用ふるよし、世諺問答に引用、

粟田口祭 十五日 増山の井 白河院の祇園牛頭天王婆竭羅龍王の女頗梨女をめとりて うこのみる八王子あり、ある暦にいる八将神あり、

穴織祭 十七日 摂州豊島郡池田村民家の北にある山上にあり 摂陽羣談 穴織呉服の両社其間僅十町ばかり、日本紀 応神天皇十四年春二月、百済王縫衣の二女を貢ぐ、真毛津といふ、又云同三十七年春二月戊午朔阿知の使主を呉に使主都加の使主を呉につかはして、縫工女を求めしむ阿知の使主を高麗国に至りて更に通路をあらぬ、通を知る者を高麗に乞ふ高麗王乃チ久礼波久礼志二人を副て導き遣はしたまふ、ありて呉に通ずることを得ず呉の王工女兄媛弟媛呉織穴織を與ふ、又同四年二月午朔阿知の使主ホ呉より兎葉に至るの時、韓人大神工女を乞ふ故に兄媛を以て胸形大明神に奉る、今筑紫にいる御使君の祖なり、既にして二女を率て摂津国に至る武庫に来りて天皇崩ずるを聞き及ぶ大鷦鷯の尊仁徳に献ず、この二人ホの後今呉の衣縫蚊屋の衣縫忌寸人○仁徳天皇十六年戊子九月十日、縫媛二人を去ひてつひに祀り祭る、縫衣の神と、毎年九月十七日十八日を穴織呉織両社の祭礼と、和衣荒布の神供を備へ神衣祭と称ず社家の説に応神天皇春二月、縫媛を呉に求むとあり、

秋の花 菊の異名なり、異名分類藻塩草にあり、

秋の花 菊の異名なり、異名分類藻塩草にあり、

秋の穂 孝子傳閔損が後母生處の子に衣をもるに綿絮を以て、損に芦花の絮を以て父母を出さんとせ、損が曰母在せば一子単し母去らば三子寒し と遂に止む、

赤小豆引 大根土用の中種を蒔九月これを収む、

芦 芦の穂絮 秋〜〜の花 昔古き物にあり、或説に菊を秋〜〜と、今按ずるに埃嚢抄に聖一国師重陽の佛事の時に草の花を北の離に植てノント〜〜南の山を見るとあり、下悠然見南山といふ詩に東を北と誤り字の誤なるべし、埃嚢抄によるに藻塩草の秋〜〜花も誤りなり、秋叶の花の、

烏桕 本草別録

烏柎より熏丁乾去甘温にて毒なし 〔多識論〕烏柎今按ニ阿末保志

秋の葉 〔御傘〕もこちのちるなり、

秋の霜 初霜ハ冬なれ

朝寒 〔御傘〕朝寒秋なれ さむき朝寒きなりし、朝氣さむしいつせる冬之、

網代打 〔藻塩草〕網代ハ冬なり然ども九月九日の前に打初て宇治の網代人供御に奉るなれ

秋過て、秋暮て、秋ぞ隔る、秋に後るゝ、秋より後、秋の別、秋の名残、秋の限り、秋を惜、秋深き、秋の湊 注に不及

さ

七月

さゝがに姫 棚機の異名七姫の内之、さゝがにハ蜘のことゝ〔異名分類〕〔開元遺事〕に、蜘蛛を以てあはせを小き金盒の中に納め暁に至て開きて蜘蛛の糸の稀密なるを以て巧の多少を得とうしとしたく〔長明四季物語〕に、姫蜘蛛とてさゝやかなるくもの其つくるかさ或ハ緒のひの糸にいとを引めるを圖として、私おねかひのかへりとせるしてあるべし、云て あはせられてよまれるなる

索餅 〔先代旧事記〕七月七日織女を祭る、又牽牛神ありてその祭供にハ索麪を以す是糸織の象と表を、並に犂鋤を以てこれ鋤耕の象に表を〔十節記〕昔高辛氏の女子七月七日に死をてその霊鬼神となりて人に瘧を病しむ其存せる日麥餅を好めり、故にその死せる日に至りて索餅を以これを祭る、後人これな索餅をくらへバ瘧疾を患せて、

刺鯖 いの部生身魂の条に出ッ

澤桔梗 〔大和本草〕葉大にして葉志なく巻丹の葉の茎に付るが如し花も桔梗に似て淡碧色

桔梗より小なり、山辺に生ず、秋花をひらく、根ハ桔梗のごとし、又浮薔の花をもつ桔梗といふ一名異なるそれなり

五味子 〔本草〕五味子皮肉甘く酸く核辛く苦く都て鹹き味ありて五味具る故に名く、春苗を生ず赤き蔓高木に引く、其長さ六七尺、葉尖り円く杏の葉に似たり、三四月黄白花を開く、蓮花の状に類す、七月実なる莖の端に叢生す、豌豆許の大さのごとし、生ハ青く熟を紅紫

さゞせ荻 葉の細きなるをいふ、さゝれ荻といふ

兼三秋物

哉生明 二日三日の月をいふ、哉ハ始なり、前の月の大なるときハ二日に明を生ず、前の月小なるときハ三日に明〔尚書〕望後月

哉生魄 十六日の月をいふ、魄を生ず 死して魄を生ず○月の照ざる所を魄といふ

佐々良衣壮士 月の別名之〔万葉〕山乃端乃佐々良衣壮士天原門渡光見良久之好藻

盃の光、盃の影 〔御今〕盃の光など月によそへしバ秋なるべし、面の

さやけき 秋の月をいふ、

君遷子 ふの部蒲萄の条下に出て

狭牡鹿 〔和名抄〕牡鹿和名佐乎之加〔和名〕〔壒要略〕顕宗天皇紀に牡鹿ハ左鳴子加和訓の狭雄鹿にて狭ハ狭山狭野などみえていふ詞なり○万葉に小牡鹿と書るハちひさき鹿といへるにハあらずといへて云

猿酒 深山中樹木の虚或ハ岩腹の凹なる所に猴菓を取貯へおき、数日の後熟して酒のごとく味甚だ甘美なり、あせびを猿酒といふ、猟者往て見てぬすみこ食ふ

八月

堺天神祭 三日〔泉州府志〕泉州堺常楽寺天神の像ハ菅神太宰

府に在せり日向より伯耆の人七艇の像の内也と云へり〜〜長徳二年或ハ延喜年中正月海濱に漂ひ来るよし此所に安置せり或ハ昔塩穴の郷湊村にあり故に塩穴天神と称せり中世北の荘に在りしを勧請せり文明二年菅原為長卿の記に云和泉国毛須深井阜部土師向井塩穴高石ハ菅家の氏神天の穂日の命以来の旧領なり今按るに塩穴天神ハ天穂日命なり後に菅丞相を合せ祭る〇例祭六月十三日を夏神楽と云八月三日を秋神楽と云此の日参詣多し神輿堺七道濱おのゝ〜〜表島（渡御即日）還幸〜〜先板の諸抄四日と云へり今三日なり〜〜

三五の夜

つの部月見の条に出ス

西院祭

廿八日春日の神社ハ洛西葛野郡にあり四条通西の土手四町許りに西院村の西平林村の中にあり

名跡志 按るに西院の呉中頃此所の西に齋院居あり故に此辺の名として齋院と書しを後誤りて西院と作る歟〇例祭八月廿八日神輿二基あり其一ツハ住吉の神輿〜〜住吉の社ハ同村の西にあり紀事西院八幡祭と云へり未詳

柘榴

時珍曰榴ハ瘤〜丹実垂々として贅瘤の如し事類合璧 榴大くして盃の如し黄膜ありて子を隔つ子人の齒の如し淡紅色赤潔白なりて雪の如き者あり潘岳賦云榴ハ天下の奇樹九州の名果千房同膜千子一の如し飢を禦ぎ渴を療し酲を解し醉を止む北史李祖收傳元魏安德王延宗李祖收を納て妃とす後に帝李が宅に幸す妃が母二の石榴を帝の前に献む人其意を知るなり祖收が云子孫多しんことを欲す〇今鬼子母神を祭る人ハ必ず備ふるに榴を以てす八千子多子の象とする花の形ハ夏の花の如し

本草 三七春苗を生ず夏高さ三四尺柔弱丈に似て

動く厚く岐あり茎に毛あり穂あり夏秋黄花を開く〜〜蕊金糸の盤紐の如し〜〜茎に毛あり氣香らず花乾くに臨て絮を結きて苦黄

烏鳳

和漢三才図会 今云三光鳥延年寺にあり紺色背の上に赤を帯履白く翅黑く〜〜微赤く項の毛乱起て頂上に冠あり眼大きく顔青く其尾長き者一尺半計り〜〜よく廻轉す其声清越日月星と言ふ如し今三光鳥と称す其雌雄に似て淡く尾短く俱に性勇悍雛を育る時ハ鷙鳥の来るとも敢ハ羽を拔ひ毛を拒む或ハ其眼を啄く其巣鵲の如し〜〜両端に口あり入裏に出尾の長きを以て

澁鮎

の部落

九月

鮎の条に出ス

坐摩祭

廿二日坐摩の傳記ハ夏の条に在り部坐摩の御拔の条に注し〜〜れば爰に六月晦日例祭九月廿二日あり相嘗八千島祭等と新嘗の神事

逆髪祭

廿四日社説に云江州滋賀郡琵琶湖の南逢坂山関の清水大明神ハ延喜年中四の皇子蟬丸の社なり蟬丸双眼盲にして故に敷〜〜延喜廿二年壬午春三月公卿大夫蟬丸を供奉して逢坂山に左遷し奉る各涙雨を濺て帰京を残星留る人白川の紀ノ則長基経古屋の美女師補〜〜に逢ふ故に姉の宮深〜蟬丸を忍ひ密に禁闕を出て相坂山に来る蟬丸と共に名月を清賞し旅駅の山岩川陸を偏歴し〜〜雲鬢髪顛例に国人御名を逆髪と号く天慶九年廿四日逝去しぬ故に毎年九月廿四日の祭祀今に至て怠るなし姉歿去の後蟬丸を延喜才四の皇子及び盲人とする妄説あり〜〜後撰集のゆくへもしらぬ人なりとよめる奇の詞書に論あり

ゐあるべし。水戸学士の一説に唐の南朝元帝の諱を延基といへり。延基の三男襁褓の時より痙にて其上瞽なれば逆は是を相関といふ所に捨のこす子の名を彈児といふいうんとあり。如年より琴をもつて彈ぜし故なりと付しあり。今按事より日本の蟬丸の事を考ふるに延喜と延基とその音同じ。彈と蟬と字の形相似たり。又相関と相坂の関も相似たり。又延喜の御子を捨のこすと彼已回意人彈児の事は古史考巻の三十一にこれをとり、云

俳諧歳時記 按ずるに逆上は坂上の誤なるべし。寺門の説に云、江州相坂山関の明神二所。一所は坂上にあり。一所は坂下にあり。云、元坂上社あるべしを誤りて種々の説を設けたるもの又云二所とも逆祖神を祭る以て関所の鎮守とす。朱雀院の御宇蟬丸の霊を當社に合せ祭り、依て土俗蟬丸の社と称す。下の社の前に井あり、関の清水と名く。清水明神と号。祭礼九月廿四日。上下の社同日。

皂角 時珍曰、皂莢樹 皂莢。故に名とす。

廣志に云、鶏栖子とも云。樹の高さ大なり。葉槐の葉の如し。痩長して刺多し。夏細き黄花を開く。実を結ぶ。三種あり。一種は小さくして猪の牙のごとし。一種は長くして痩薄く枯燥して粗ぶ甚刺多くして上に向かへり。

櫻紅葉 櫻のうちせーあり。

珊瑚 仙蓼 珊瑚仙蓼 三名

同物 園史 茶山茶の如く小さく夏白花を開く。秋紅の実を結ぶ。珊瑚の如く累々たり。大和本草 珊瑚 蓼 橘の如く、及び茅草の如く刺あり。鈍あり。蓼長く節あり。寒と日とを畏る。陰地に冥く本草綱目雑草の部百両金恐くは此と同物 和漢三才図会 仙霊草 [illegible] 云、

栃栗 江東わき栗を呼て栃栗と云

七月

北野御手水 六日 山城國葛野郡北野天満宮にあり。帝闕より北にあるを以て北野と名く。

紀事 七月六日北野松梅院御手洗を神前に供ず。松原の硯に穀の葉を添てこれを供ず。

北野煤拂 七日 雍州府志 毎年七月七日北野社内外の陣にあり所の神室を西の間及び幣殿会所に出しこれを曝ず。その間に宮仕内外の陣の煤を拂ふ。

乞巧奠 名目抄 今の俗キツカウテントと云ハ不足言ス。日〻乞巧奠。乞巧奠とは人々其業に巧ならんことを願ふ意なり。開元遺事 七夕に蜘蛛を以て金盒の中に納暁に開て蛛絲の稀密を視て巧の多少を得ることを。

乞巧針、乞巧瓜 荊楚歳時記 七夕に婦人七孔針に穿ち或ハ金銀鍮石を針とし瓜菓を庭中に陳ねて巧ことを乞ふ。蟢子あるを瓜の上に網するハ巧を得たりとす。

九枝燈 漢武内傳 七月七日常宮掖の内を掃除し、雲錦の帷を張り九華の燈を燃す。西王母降。

公事根源 燈 墨九本あり。灯あり。

禁裏御燈籠 滑稽雑談 當世はおとり。禁裏へ御家門方より燈籠を献ずる。奇巧金銀を鏤め花鳥人形ホの美を盡せり。是を南殿に掛ぶらるゝ。いつのころより始まるか。尋ぬべし。十四日より禁門を啟く。貴賤の男女を庭上に入て是を拝せ

切子燈籠 和漢三才図会 一種岐里古燈籠。聖霊祭ホにもちゐる。用て飾る所紙繒甚奉美。

逆の峯入 紀事 七月の初大峯の修験道山伏の客僧大峯より京師に出て大

ある法螺を吹き自ら金剛杖を擎げ峯々を遍歴して齋料を乞ふ或前鬼木鉢或ハ奈良硫黄ホの物を且那の家に贈る允峯入の法本山派熊野より大峯二入是を順の峰入と云ふ當山派大峯より熊野に出ず是を逆の峯入と云ふ

○春の部順の峯入の条にのべし○貞享式峯入の類も順逆ともに春と秋とを断ぜず今の俳諧の省法に倣ふ秋季に つぎて春とあるべし

春季に つぎて春とあるべし

木曾踊 地名に出て名づくるか

猶考ふべし

清水千日詣 十日 七月九日より十日に至りて京師清水観音に諸人参詣を夜に入て参詣殊に多し今日の参詣平日の千度に当るとなり江戸浅草の観音も同日にて参詣多し俗男

經木流 十六日 摂州四天王寺の東僧坊の前に亀井の水あり六千日と云ふ

白石玉手の水と号ずるもの一白川法皇の上東門院當寺に詣し時其水盤に亀の形あるを見て白石玉手の水を以て亀井の水と詠ずこれ其号の起る所なり新古今濁

亀井の水をむすびあげて心のちりをすすぐ

○七月十六日世俗行書堂にあつて經木の表に法名を記し此水を手向て霊魂を弔ふと摂陽群談にこれを昔ハ月毎に六齋の日講堂にあつて經を誦し参詣の戒名を名帳に記し回向せしと云和泉式部参詣のとき名を名簿に書して詠ずる哥「梓弓なるべしとおもふねどころ

経木書身の数なりぬ今の経木ハ此名簿の遺意なり

桔梗 時珍曰桔ハ結ぶ其草の根結実して梗直なり故に名づく 和名抄 桔梗 和名阿里乃比布木 和漢三才図会 山野及び人家に多くこれを種 凡紫碧の者を桔梗の正色とす 又白花あり紫白相交る者あり 單葉あり八重あり 古今物

蟋蟀 大和本草

蟋蟀は竈馬も今俗混じてこゝろぎいとぶと云

名秋ちろ〳〵野ハあり〳〵みるをちゝ佐ゆの

友則

本草四十一巻竈馬の附録に一名蟋蟀又蟖と云ふ蟖の後夜鳴くイナゴに似て黒一翅あり角あり頭ハ切るる如き哥に俗につゞれさせと云ふ西土の方言クツゝと云ふ古哥に きりぐすとよめり是なり秋の末にあつて故に古歌に霜夜とよめり○今俗にこれを蓑虫と云ふ

家持集 七月 ちゝ〳〵なくこゑをきくとこよなくもの思ふ我ハきくかな

○華つ虫ちゝろむし、ちゝげの庭虫の異名あり頭字の部に詳にして注す

兎 月をとゝ 隋煬帝元清露冷侵銀兎影

既望 いの部に詳

既生魄 既望を生ずる十七日の月 魄ハ月の魄ずる所を魄と云ふ

暉素 月光之 文撰注

金波 月光之 前漢書

霧 京雅孫炎註 天氣下り地氣應ぜざるを霧と云ふ 和漢三才図会 霧霧の二種皆露の変ずる者秋月盛んにして其降や朝夕に多し甚だ多きときハ茅蔬草木凋枯して花雪の如し列子 藻塩草 霧ハ春夏ハ詠ずべし秋に限るべからず連俳に霧と云ふ

八雲御抄の如く春山の霧に鶯又夏霧と云ふも万葉にあり 俳諧にも春夏の季に霧と云ふ春夏にあるべし○朝霧夕霧別義

霧の笆 霧の立つ

霧の海 野原に下りて海のごとくこめるを云ふ

霧の香 御今 霧に匂ひのあるものを霧き物あり 燻ふ霧の香と云ふ別に炷物

あるべし、ひとしく雲名斷の香たるべきと詩るも作る八只秋雲ばかりあり、**霧立人**八雲御抄

雲ばかりなる人をいへり、**霧雨**雲の深き所ハ雨の降ずとこれを云、**木淡**樹上より熟じ美しき桁を木淡とらふ、**伽羅桁**一名透徹桁形長く四く微夫り内中沈香の理の如くして味脆く美し、**錦馬**鹿の異名あり、

八月

北野祭四日

二十二社註式一条院永延元年八月五日祭礼をはじめ官幣あり、後冷泉帝永承元年八月四日に定らる五日母后の國忌によりて之拾芥抄北野祭今ハ四日元ハ五日先例大臣より始て納言参議に至り大頭と称ず催し申あり、料米六十石○祭神三座中ハ天満天神、東ハ中将殿菅三吉祥女、菅の北の方都の西南吉祥院に住り、御名なり、醫水記曰此祭甚だ美麗なり、神輿下立賣の西御旅所に移し奉る其間廿余町の地に蜀錦を敷き供奉の輩後羅の袂をつゝ花管絃の色雲井にひゞくるよし當

碪四手打　綾巻　字林直に巻を擣と衣打ちうち打ちうちと古人衣を擣に両女相對して一杵を執り来を巻が如し然るに今易りに杵を作に對坐してなを執て擣つ其便を取る和名抄唐韻云碪和名岐沼伊太擣衣石之字亦作砧擣衣杵和名都知○綾巻衣を巻木之ゝの緒を巻て打あり○四手打あり○四手打

銀杏の實八雲御抄時珍曰銀杏其葉鴨の掌に似て因て鴨脚と名づ宋の初始て貢を改て銀杏と呼其形小杏に似て核の色白きに因て今白果と名く、

木の子取たの部華府の条に出ツ

秬引苅収る

啄木鳥一名てらつき　時珍曰此鳥樹を劉裂て蠹を取食ふ故に名く、禽經に云ふ有る者雀の如く大なる者鵲の如く面桃花の如く喙足皆青色尖剛く背利く錐の如く長さ数寸舌味より長く其端に針刺あり蠹を啄こと得るときハ舌を以て鈎出しあるを食ふ○昔玉造の天王寺を建し時此鳥群来て寺の斬を啄き損ず故に寺僧と名く守屋が怨霊なりと云ふ、

菊戴鳥和漢三才図会状眼白鳥に似て背翅青緑色頂の上に黄毛花の如き者をいふ故に名づく、

九月

菊花の宴九日　青藍云能諧歳時記に周の穆王昊鷲山に入て慈童八百歳を経ても貌少年の如し、魏の文帝の時名を彭祖と更て文帝に此術を授け奉る文帝この術を受て壽七十歳今の重陽の宴是なり此説妄談の甚しきなるべし、列仙傳に彭祖帝顓頊の玄孫姓ハ錢名ハ鏗周に至て八百歳なりて衰老せず穆王召て大夫とせんとせず病と称して與らず後遂に流沙の西に往彭祖の傳の如く慈童より事を以て附會せるなり、元野史の説は謫語より出ず菊花の宴ハ秦漢以来より既にあり云論ひろく実なる妄談附會の甚しきとなるべしとなり本朝文酔に視賜群臣菊花詩序云紀納言採故事於漢武則赤黄揮宮人之衣尋舊跡於魏文亦黄花助彭祖云又世諺問答に魏文の説を引せられハ古くよりいひつたへる妄談なるべし、元風雅の逸ハ事の虚実よりハ其趣のをもしきに隨ひをきなくしるべし、

菊瓶

公事根源 御前に菊瓶をおくこと 金

菊花の酒

文ちの記 重陽の宴の条に、ことことうり、高に登る 続齋諧記 汝南の桓景費長房に隨ひて遊学をなして累年、長房謂曰九月九日汝が家中災あり急に去べし家人各絳袋を作り茱萸を盛り以て臂に繫て高きに登り菊花の酒を飲しめば此禍除くべし景言のごとくして舉家山に登る還て見れば雞犬牛羊一時に暴死ス長房あれを聞て曰此こそ代るなれ今世の人九日高きに登る酒を飲婦人茱萸の嚢を帶蓋其なり

菊の節句

栗の節菊酒を飲栗を親戚朋友互に贈る

菊花着綿

御湯殿記 九日の夜に入て御殿の南階に小菊を多く植其菊に赤白黄の綿をを九ぬ菊花に作りて枝に付るなり今日綿を菊に取へらるるなり○青藍按むかし菊に着せる移ればこれ面をぬくもあるべし

後撰集 ことありにもこ侍る時九月八日伊勢が家の菊にことを着つるせ

とうるなべ又のあるとをうとそ伊勢数もなき君がよはひをのばへつなるこの宿のはゆるあれんや

藤原雅正

紫式部日記 九日菊のうつろひをきてけるよう老のこゝ捨ぬよのことせつるあるべ菊のはゆるつゆをのうは神ふるそ花のあるべ千代をゆづらん○此外源氏枕の草紙あるべ

中宮の御綿をつくるべいとのちはてあるべ

菊

襲くの部九日小

菊花

時珍曰陸佃埤雅云菊本神の命に注ス

鞠に作る鞠八窮に月令云九月菊黄華あり華事終に至て窮り尽く故に名とす

鞠 和名抄 菊 和名加波良毛本 一云加波良佐波本 和漢三才図会 菊綱に

菊凡百種宿根より自生ス其茎葉花の品々同からず葉單葉心あり白黄紅紫同色浅深大小の別あり其茎株莫紫赤青緑の殘あり其葉大小厚薄表裏の異あり又夏菊秋菊冬菊の分あり百夜草星見草金草くこの草千代見草鼠草山路草少女草弟草茱萸草の主殘草弟茱萸の弟百菊 雅々菊 醍醐菊 大白大紫若菊草隱君子女花 鞠花 秋くの花契草 蘭或菊 承和の色殘菊 野菊

闘菊

古今著聞集 延喜十三年十月十三日御記云仰侍臣令新菊花分三番相撲勝負以甲時各方領花参入一番入自和華二番入自滝口次第進花立庭中 番種花以各洲形二番戒火 左衛門督藤原朝臣候御前 侍作 勝負十番勝方簾中拜舞選進菊中各四本載西方庭

菊の淵

古今 ちの宿の菊のもとにけるいとぞよ

金

目貫

百菊の内あり黄

秋牡丹

大和本草 秋牡丹外農圃六書ことれ

万重ふたん

植九月中菊に先

貴船祭

九日 神社啓蒙 山城國愛宕郡鞍馬の北一里

是水徳の神なり別雷の神宮殿二の摂社なり 神代巻 伊弉諾尊詔遇突智を斬て三段とし其一段八高龍となり

二十二社註式 貴船の社八船玉命と高龍となり 改暦雜事記

九月九日小兒吹逆疫して死亡ス多し仍て相者なりて

トせり和云貴船の神の祟多き所之なり於て弘仁二年（百六代後奈良天皇）秋九月九日疫を追し安今貴船の神楽と称して洛中を振るふ是古の遺意なり○今年より以来毎年九月九日小兒相集りて小き神楽を作す貴船祭と称して市中を振る、市を狭小楽と云ふ

北山祭

廿七日六所の社八洛北鹿苑寺の西南衣笠の麓の民平林の中にあり祭神詳なる例祭九月廿七日　名勝志の説　北山天神祭九月廿六日、古の拜殿に於て三番叟あり、四月廿七日六所明神に猿楽あり、管見記、九月廿日等持院村祭　松尾等持院鹿苑寺に相隣る故に北山祭と称す、類聚国史　北山の神社八大北山村にあり天長五年八月天地変災あらんことを、丁せに北山の神に祈る　名勝志　北山八高橋の西北四五町に在り、高橋八北野平野の間紙屋川の橋なり洛陽より成炎のころ北方にあるを以て古より北山と称す疑らくハ村名なるか○毛吹草に北山祭廿五日と記す諸説迷に異なり、

金柑

時珍曰金橘実を結ぶ秋冬に黄熟す、

枳殼

本草図経　枳ハ橘の如くして小さく高さ五七尺葉橘の如く刺多し春白花を生ず夫和本草　枸橘今案ずるに和名カラタチと云ふ其木多く故に人家植て籬とす盗を備ふ昔より四俗誤りて是を枳殼実と云ふ非なり、

明顕山祐天寺八江戸驪黒にあり、用山八祐天大僧正例年七月十五日より廿五日まで、河弥陀経千口修行この節参詣多し、

夕顔の實

首尾一のもの　瓠瓠瓠の一類なり　瓠長きもの越瓜の如し　瓠瓠の短き柄有て大腹なる者○蒲蘆壺の短き腰の者○其形状各同しかも

七月

祐天寺千部

十五日より廿五日まで

とゝ云ふ苗葉皮子性味八一なり、者未草時珍の説多し○乾瓢八瓠瓠と云生なりを日ほし又鹽をひたし、ありをうけあるもの也

兼三秋物

夕月夜

桂明抄　月の大小ありて不定日二日の夕ゆふ出現あり事分明なり、十日あるいは頃ゆふべ、春は出るなり月を夕月夜と称なり

弓

張月

釈名　弦ハ月半の名なり其形一旁ハ曲

夢野

摂津国風土記云、雄伴郡に夢野あり、父老傳へ云ふ昔刀我野に牡鹿あり、その嫡と此野に居る、その妾の牝鹿淡路国野島に居る、彼牡鹿屢野島に往て妾と相愛ず既に牡鹿来て嫡の所に明旦牡鹿その嫡に語りて云、今夜吾背に雪ふりかゝりと見き、又吾背に草生ると見き、夢何の祥ぞ、その嫡云、夫の妾の所に向往べきを悪と乃ち詐て相ひて式背の上に草生ず矢背の上に射るの祥、又雪ふり白塩穴に塗の祥淡路に渡らば必ず人に射られて海中に死ん謹て復往事あれなの牡鹿感恋に堪ず頃野島に渡る海中行船にあひて終に射殺さる、故に此野を名づけて夢野と云ふ、俗説に刀我野に立る真牡鹿も夢相のゆへなり、河社契仲大人云仁徳記に苑餓野の鹿の夢のことハあるべきなり、

茹菱

ひし部菱取の条に見るべし、

九月

柚

説文　柚ハ橙に似て酢し、

柚味噌

柚の皮ハ苦し橙の皮ハ甘し

滑稽雑談　近世編笠柚味噌といふものを作る柚一箇を二片とす　炙鍬を去熱湯に投て軟くなるを取出て乾て顆て柚味噌に用ふる所の味噌を其片に盛り包て編笠の形ちなす茶に用ふ祇園の茶店関東何某始て製する所へ

行

七月

益母草

秋 行秋のこころ〜ちかづくなり

猪麻 俗曰ちがきと云 茎ハ胡麻ニ似て茎ハ麻のごとく其茎両〻相対して一層ハ東西一層ハ南北なれども十文字なり七月紅紫の小花を開く又微白の物あり本草ニハ花四五月とあれども土地のちがひあるべし

八月

名月 つの郭月見の条ニ出ス

眼白鳥 和漢三才図会 頭背翅尾黄青にして鮮明なり俗にいふ淡萌黄色なるあり眼の眶ニ白圈あり胸臆白くして桃色を帯ぶ腹白く性よく群をなすなり友を好て樊の中ニ在ても亦一樂ニ集り相依て互ニ推て其中一隻飛出群を抜ときハ餘すべて相推て又中ニ抜去初のごとし毎ニ抜を好む

み

七月

鼠尾草 時珍曰 風尾穂の形を以て名ニ命ず○韓保昇曰鼠尾草 此端ニ夏四五穂を生ず車前の如一花赤白の種あり

水懸草 増山の井 説々あり人貞徳云水影草ハあわく七夕のころ心あり、三水懸草ハ稲の事ニ又或説ハ水影草ハ聖霊ニ水むすぶ心なり、

井寺女詣 十五日 江州長等山崇福寺 又逢福寺 地福院ハ大津の側にあり、園城寺又三井寺と称ず園城寺ハ御園ニ隣るを以て名とす三井寺ハ西巌ニ霊泉あり是天智天武持統三帝即位の時この井の水を挹て浴湯ニ献る因て御井と号ず後ニ改て三井と作る是三皇の浴井龍華三會の義ニこの寺平日女人結界の山ニ只七月十五日女人の参詣を許す登山せずあるを女詣と号ず當山ハ智證大師四珍の開基ニ

妙法寺の火 せの部施

火の条

御狭山祭 穂屋廿七日 信濃諏訪郡諏訪明神の祭ニ今在記上諏訪ハ建御方富命下の諏訪ハ八坂入姫命○或説ニ御射山の祭ハ薄ニて神殿を造る其外人の為も祭の程ハ皆薄ニて作る又ここにきと云もものてにあり日本紀ニ三野槌の神ニハ五百筒野鷰の八十玉籤を採らしめ是ハ天照太神を天の岩戸ニ奉らんとせしに時のうたぐみなりと信濃諏訪ニ山祭ニまも薄を以幣とすを故ニここを州信濃と号ず○此祭ニ遠矢を射て進らせること其始ハ田村将軍の安倍高麻呂を伐んとなり信濃國ニ至り此神ニ祈ニ申されしニ梶の葉の狩衣付直垂着る人湖の波上ニ馬を走らせて至懸射ずこれ今至懸射て神事ニなるハこの所謂なり趨波とも記して諏訪ニ侵起ニ出當社ハ桓武の御宇田村将軍の建立ニ出ず此神ハもとべて田猟のてにを主とす○穂屋御狭山ニ作る穂屋この祭ハ貞徳説ニ八月ニ落塩草七月廿日ニ出ず増山の井ニハ七月廿日ニ此説多しなぐふべきなれども勅使を立て穂屋とかふハ勅使尊敬のあまり新ニ仮屋を設けるこ今もその全屋ニ穂屋を造るなり新式秘抄ニ云穂屋つくるハ諏訪祭のてにて諏訪祭ハ年ニ七十五度あり是その一つなり山祭ハ山城笠取の近所にて説あり名所方角抄寄枕秋の寝覚ニハ信濃とも

狭蓑雪ちる 穂屋のもとの苅のこと、芭蕉

蘘荷の花 周礼 庶民喜草を以て盛毒を除く宗懐謂喜草則蘘荷の花也之○叶珍曰崔豹古今註云蘘荷其子花根の中ニ生ず花ひらず敷ざる時食ふべし久しき叶沽爛ず

身に入 湛方生秋夜賦氣入肌以凄凜灑林蕭索甲子紀行

無三秋物

三日月 新月 朏魄文纖月 撰月賦ニ出ス 礼記の注月三日にして魄ニ成ず白云朏ハ盛明なり魄ニ出ス○新月纖月玉鉤蛾眉磨鏡ニ三

日月をもて其外種々の譬喩詩句多し、

○何事のこゝそゝる似たる三日の月、芭蕉

水梨 水梨形も青梨に似て褐色

蚯蚓鳴 歌女釈名土龍地龍子寒蚓本の諸名あり

○時珍曰東方朔賦云其鳴くこと長吟故に寄女と名く、孟夏ちかく出仲冬蟄伏す雨ふるときは先づ出晴るときは夜鳴或は化して百合となる蟲類と穴をあなうて雌雄とあり、

蓑虫 鬼の子 和漢三才図会諸本の嫩蚕漸く舒老蓑を作て中に小虫を生ず其虫桑葉を食ひ蓑を吐き用て窠を作る長さ寸ばかり婆娑として撚りたる丈柱の如し毎枝に縋る其虫も又黒色皺段ありて首と尾と叶ふる首を出す嫩蚕を食ひ其首を動す貌蓑着る菊に彷彿たり、

枕草紙 このむしいとあはれなりみなさびぬるにはあらねどもいかにせんとて親のあはれがりきたなくしたりけるこそ今秋風のふくにあんむるおとこのそらにてなげくらんもいとかなしけれ八月ばかりにはあらねどいとはかなくなりぬるなりけりとあはれなり

蓑虫説 素堂 蓑虫の鳴くこえのあはれなるは秋ちかくなるとなり八孝に専なるものなり仏教にいはく鬼の子なり人清女の華のごとかるべし

八月 三村祭 三村或は水村に在る泉州堺の庄塩穴の下条開口村にあり住吉旧記祭る神伊弉諾尊の御子事勝国長狭の後に生る天平頭天王を合せ祭る乃ち住吉の外宮なり故に朝廷二十年に一度住吉の社造り替をなす事なり当社も先例あり社地元開口村木戸村原村の内にあり俗三村大明神と称す大寺祭と号泉州府志社説云密乗山念仏寺聖武帝の御願に依て行基僧正開基なる所なり社領八十石 例祭八月一日二日三日祭又大寺祭とも木戸村開口村原村の産沙神なり大念仏寺の鎮守なり

三津八幡祭 十五日摂州西成郡大三津の寺三津寺町にあり三津と八高津数津雑波津是なり傳へいふ昔行基寺院を建て三津寺と号後神託ありて八幡を勧請す毎年八月十五日祭礼あり社説に云当社八清和天皇の御宇筑紫宇佐の神男山に迁坐のときは西海より初て至りしかば洲中にその由緒を祝ひ祭るなり又一説に應神天皇行幸の地なりとも云へり○摂州雑波堀江の人月を玩所み賞し各深更に及びて家に帰るまでを月見と称す又雑波の御祓と称す

水引の花 和漢三才図会水引草高さ二三尺葉楊櫨に似て皺あり秋長穂を出し小き花つく紅色其茎円く鐵く紙撚及び水引の如し故に名づく、

水焔涸 月令

九月 三度栗 本朝食鑑上野州下野州に山栗あり極て小なり一年三度栗を収む故に三度栗と称す味佳

水木 和漢三才図会美豆木高さ一丈の三丈葉梅蘇木の葉に似て微厚く冬凋む花藤の花に似て黄色あり二種土佐の山中より出る者高さ一二丈葉粉團花の葉に似て小し正月黄花を開く攢簇て下り垂る子を結ぶ赤色呼て土佐美豆木と云ふ○実を称て秋と云

蜜柑 和漢三才図会太知波奈の和名橘類の総名なり今単に太知波奈と称す乃蜜柑なり其実熟するとき蜜の如し故に名づく、たち花草橘は淮を渡りて化して枳となる其皮を薬とす乃蜜柑なり其実熟するとき蜜の如し故に名づく、たち花草橘は淮を渡りて化して枳となる

ると云ふ

水の紅葉 川の紅葉に同じ、かの郡こうぐ、

七夕 七日の夕、

二星 牽牛 織女 犬飼星 月令廣河鼓 彦星 なかつぬ 義焦林 大斗記二云、天の河の西に星あり煌々として参と俱に出づこれを牽牛といふ天の河の東に星あり微々として氐の下にあり、ちかをを織女といふ、世に雙星とも、倭名抄尔雅注云牽牛一名河鼓 和名比古保之又織女 和名太奈 伊奴加比保之 八太豆女 和訓義解ヒコ星ヒコハ男子の美称織女の夫とを故に男星と云ふ、

二星の屋形 宮中七夕に錦綵を以て結びて棲殿をもて高さ百丈数十人を容べし、花果酒炙を陳ね坐具を設け以て牛女の二星を祭る、本朝式ハ少く異なり七夕の棚をこのき花を折り果を備へ空焼あるこの事あり、

七種の舟 七種の舟ハ色々の宝を七色、舟に積て巡るをいふ、

新吉原燈籠 一日より享七夕ハ七の数を用ふ、三十日迄保元年江戸吉原の遊女玉菊の追薦のため一年七月中の町の場屋各燈籠を出す是より例となりて毎年秋事あり、その燈籠綾羅を以て禽獸諸物を造り奇麗荘観ひとへ代この節男女群集まことを燈籠見物とのふ、「燈籠はもと玉菊の来る夜なれ、不知作者

聖霊棚 たの郡昊祭の条に出ず

鹿鳴草 異名 分類 和名抄鹿鳴草 和名 波木 故に此名あるべし、八雲異本にあり草とあり教長集都にもいとべども鹿のなく、名にあふ草ハ

石蒜 大和本草 老鴉蒜之ちひとなり、秋の山里いふ四月或ハ八九月赤き花さく下品あり此時葉あり花さく故に花葉不相見、拾子の花といふ、彼岸花ともいふ曼珠沙華の条にあり

秋

海棠 名花譜 秋海棠一名斷腸花 嬌姿柔軟真に美人の粧を捲らぬおとし、性陰を好む日を見ると即ち瘁く九月枝上の黒子收め地上に撒けば明春枝を発し老根冬を過る者花発き更に茂る、大和本草 寛永年中中華より初めて長崎に来るなれ以前ハ本邦にあるの色海棠に似たり故に名づく○秋海棠西洋の色に似たり芭蕉

椶 時珍曰椶榜一名漆椶即ち椶なり草にして者故にもと椶といふ他の椶熟なる時ハ黄赤惟熟をとりくども亦青黒色搗碎き汁を浸をもて漆椶といふ簀扇諸物を漆べし故に漆の名あり 和漢図会 椶波造る法椶一斗蒂を去水二升五合に和碓に搗て捕に盛り宿を経てもみを搾る渣も又水に和て二度を経てくびりもみを搾る、其用甚だ多し、

兼三秋物

ちら露 李白詩 秋露如白玉 伊勢物語 ちらくまろ何ぞと人のとゝまるを露とこそへと消ふまるもを

新月 みの部三日月の条に注す、

ちまのほし 月の異名、秘蔵抄 朝教 いちはやふるみとりて空に風ふけばいとゝ冴えまさる星の影

常娥 淮南子 羿不死の薬を西王母に請ふ姮娥これを竊んで以月に奔る 後天文志 嫦娥ハ羿の妻不死の薬を竊んで月に奔る、これを蟾蜍といふ、

真如の月 法華玄義 清浄真如の雲外のごとし○衆生の真如仏性ハ常に煩悩にまれても其体ハ少しも染らぬ汚さず、翁ハ月の雲に掩はるとも其体ハ清く明らかなるが如くにこれを真如の月といふ、真と不妄の義如と不異の義、

篠芒 宗祇曰ちのもきゝ縦に白文なり、

忍草 真潤箇云ちの草ハ和名抄の苔の粧に垣衣をちのふ

縦芒

とよのみくら、古き築地杭なる物の端、古き軒端などは常に生る草なり云ともかとちハ　こくるりれまて苔の類あり、後世の俗名山中にあるひとつの草をもちろの什一を根なしつくりそ、軒にのくるを云ハ古きをこそ得めそのゝ俗名ゝ

○今云忍艸ハ本草にいふ石長生のゝぐいなりべしされとも石長生ハ四時凋まぬ、今俗の搖に掛るのハ冬枯なり○後醍醐帝の廟前にそ御廟年をちのぶハ何をしのぶ草　芭蕉是ハ垣衣に倣て作る之

新澁　七月の部渋取の条に

鹿　格物論　鹿の性驚烈多し、能良草を別に他出す

獸多くハ十二辰八卦に属す、惟鹿独ひとり一千年にして蒼鹿となる、又百年にして白鹿と化し、又五百年にして玄鹿となる、鹿に麋あり、麞あり、

大和本草　鹿の角ハ春生じ夏長じ秋堅く冬脱、牡鹿ハ鳴き牝鹿ハ鳴かぬ、七月の末より八月の中にかけて九月末にかけて鳴く○なぎ、紅葉鳥さをしか、夢野の鹿肩板鹿もろく各頭なり

部にもちゐる、但ちがをを鹿といふハ誤なり、もの部に注す、

鹿笛　猟人鹿角の根及胎鹿の皮或ハ蝦蟆の皮を以笛を作り吹て牝鹿の音を偽る、牡鹿匍匐して来て竟に弦に罹る或ハ陰窪に入る、

鹿垣　此獸田圃に出て穀菽を食ふ農人これを防ぐ、

鹿狩　白虎通　王者諸侯田狩する所以ハ何ぞ田の為に害を除く、

鷸　陳藏器拾遺　鷸ハ鶉の如く色青く背長し、泥塗の間に在て鷸々音速声をなす、村民ハ云田雞の化する所○時珍曰今田野の間に小鳥あり、いなご雨あるぞ時鳴く是なり　和名抄　鷸　揚氏抄云之木一云田鳥　和漢三才図会　按ずるに俗に鳴字を用ふ蓋田鳥の二字を製せるなり○ちと鷸

多識論　杉雞　暮斗志云○時珍曰杉雞、按ずるに臨海異名志云

閩越に杉雞あり、常に杉の樹の下に居る頭上に長き黄毛の冠あり、頸青正色斧鉞のごとし、

鴨突

網　職業盡　下総国萩原辺萩原中に鴨のあり居て動もあるなり、七八間隔て竿羅を持て鴨の正面に向ひ、移ひを付あゞ〳〵〳〵と廻る、最初大輪に廻る、段々近よるまに小輪に巡りて、止々六七尺に間近くなりて、かの竿羅を投てとる之、六七尺の所をあくるにあらずあらず、羅をとゝめ、せてとる手練の業なり是を鴨突といふ山城の石羽辺多し　荒野鴨突ハ堂津のあるなり、淵丈

鴨の羽搔　和訓栞　鶴の已ゞ翼をもちゐる羽をちゞ〳〵音の高く聞ゆ、其数百羽なり、百羽をきとる数搔ともよる、暁天に始めて其数百羽なり、百羽なり、直に暁の事なり、暁の鴨の羽をきゝ、明ぎ君がもの

鷺と看経　和訓栞　俗諺夜ハ我ぞ数〻〻と人をとゝ居時の閑黙なる

鷺　和漢三才図会　正字未詳、俗云志比良長時の人呼て比以乎とふ、按ずるに鷺の状鄰に類して、頭円く尾鰭細く、味もまた鰒に似て大なる者二三尺九万疋と名く、其多くおはすると以ていふ、越中鱠蓼を上とす、相伝て云中華の魚にて四五月唐船多く入朝の時来て群遊す、唐船帰る時九州の翔唐人肉食の腥き気を慕ひ船に着て入唐を夏月鷺日本に多く冬月翔中華の湊に多し、

大和本草　シイラ　又名クマヒキ　筑紫にて猫ソラといふ、味美かく、

八月

白髭開帳　五百　神祇正宗　近江打尾白髭大明神ハ猿田彦なり

社説　比良明神と同体なり○昔ハ開帳あり、元禄中より止む、今只内陣を開て宮殿を拝せしむるのみ、四月上の辰の日祭礼神輿汝御あり、往古の神門石橋の辺ハ今水中二町ばかり湖水の沖にあるなり、縁起にもこれを居のあり、所を稲川

とゝふ社頭より二千町ばかり河あり、鵜川と号す、坎川の北を
務川領とゝふ別當を白頭山延命寺福壽院と号す毎年二
月八講あり、用帳八月五日、

志賀八幡祭 十五日 淡海志 四十代天武天皇即位九
年壬申、近江國滋賀郡に番跡八幡一の御前八幡大井八今の
聖真子是なり、唐尤僧の形聖真子八阿弥陀八幡大井は
今身〇是山王七社の神にて淡海國滋賀郡坂本村に
あり、見瀬村の神社に八あゞ今八山王祭の外神事ありし、

秋社 月令廣義 暦書云立秋の後五戊の日を秋社とす註云
社八居土なり民をして社を祀らしむ以て農を祈る、

死活杖祭 此祭八京都猪の熊三条の南、褐速の神社
にあり、雍州府志 昔刑部省此辺にあり、獄
を断じて以て死刑を行ふ故に刑死の人此辺にこの社を建
て祭祀を修せり、毎年八月神事あり、杖を死活杖の祭と
いふ〇千本引接寺壬生の地蔵ぼさつ毎春修せる所
の念佛會八元死刑人の為に修行せしなり、姑せりとを、

四手打、きとろ打 木の部 槌の条に注せり、

紫苑 鬼の志蘇頌 に曰 紫
苑三月の内、地に布て苗を生ず、其葉二四相連り、五月六月の
内黄白紫花を開く、黒子を結ぶ、方葉 萱草 吾下紐冷着
有跡鬼乃志許草事仁思安利家里 家持〇鬼醜草
忘草 神中抄 鬼のまを草とハ別の草に名まあるを、
忘草ハ愁を忘るゝ草なるべし、こゝき人をもまもれん料に下
紐につけゝれど更にまもるゝ事なし、忘草とゝふ名八只事
まありけん、猶考へるに八鬼のまを草ありけりとゝふことゝ
八誠の鬼にあるべきにこそ、日本紀神一に不順也凶目
汚穢之所云々とゝふ詞之、燕ふ詞あり、凶の字をよめり、
後頼抄 昔人の親子を二人もてり、此ならこゝ孝行まをする

親うせその内歎き塚に詣て在り如く有々る年ありぬれ
ど兄弟うちつれてゆきぬ其兄公につくて私をくりこゝる
堪むに思ひくるもう思に止むをゝ、忘草八思ひをやらくゝ
物へと塚にまをを植くゝ弟八ゝ〜あをを恨こゝ歎ぶ八
忘をあ草ありと植る兄八いつの程にゝ行ぎ世に萱
草を忘草とゝふ事ゝ弟八ゝ〜ゝ他を祈てぬ、ある
日親の塚に声あり、恐るべ〜ぎ〜ゝを君が親の塚を守る
鬼神〜兄八忘草を植て公につゝ八ゝるゝ怠らべ、その
家を思ふをと実に其許八思ひ草を植てゝ怠らば、
至孝ある天帝あ〜ぎ〜給ひて〜ゝ〜ゝ、今より
昼あ〜んてを夢に告ゝ〜べ〜とゝ止ゝぬ弟不思
議にあり山帰るぬ、それ昼あるゝ夢に見ゝ違をば
徳を得ゝ〜ゝ、ゝ忘草八塚〜ゝ〜ゝ人八植
ゝ〜ゝ〜べきゝ歎くゝ〜ゝ人八植へ〜〜ぐる草〜故にまを
にとゝふ鬼のを〜へ〜ゝ〜ゝ
を鬼の師ゝ草〜八ゝゝゝ、
ゝるゝの二寸ばかり

松露 和漢三才図会 麦蕈、俗云
大小叢生さく
松露、沙地松樹ある陰地に生
ぜ、松の津液と秋湿と相感じて菌となる微柄あり、枯ち零
餘ゝに似て円く大き〜外褐色内白く柔に洗ゝく甘香
あり、

濕地茸 和漢三才図会 原野湿地に生ぜ故に湿地
茸と名く、状松茸に似て小く寸ばかりの
過ぎ微の内灰白色柔〜く脆く破せ易し九月盛に出ぐ
又微の外黄色の者あり、延に食ふべし、本朝食鑑 標茅蕈
標茅八茅の多く生ずる地の名下野国黒髪山の下に標
茅ゝ原あり、此則其処多八味茸、草茅草湿の地に生ぜ故に名く、

猪蕈 和漢三才図会 茸茸に似く黒く微脂
潤ひ其裏に穴あり、蜂の巣のゝ毒あり、

代の雁

夜止宿する中更毎に居を換へ古きを代へ
ゝ代田の古ゝ春の部萬代の条に注す

四十雀

五十雀 和漢三才図会 夜に似て大也頭黑く兩頬白く白き四紋黑き圈頸に至て脇背灰青翅尾鬱黑にして灰白の竪條あり腹白色にして胸より尾に至て黑雲の紋あり其の声清潔にして多く囀る四十々々と鳴が如し故に名づく其老るに毛を換色やゝ異にして形ぬすと大なり俗呼て五十雀と云ふ雄腹の雲紋微し

鷓鴣

蘇頌曰狀ち母雞に似て鼠の如く胸の前に白き圈ありて真珠の如く背毛に紫赤の浪の文あり○呼珍曰鷓鴣胡飛とは必南翥る者南に懷南と呼ぶ江左に逆鱗と云ふ張華が注に云飛ては必南に向く東西に回翔して決して翅を開くの始め必先づ南に翥る其志一南を懷ひて北に徂ぎず性霜露を畏れ早晚に歩ると稀に夜栖に木の葉を以て身を蔽ふ多く對一雌今俗其雌を謂て行不得哥と云ふ其性潔きを好む 和漢三才圖会 字彙云鷓鴣其飛数月に隨ふ正月の如きに一たび飛ぶ止む蓋未知然るか否近年亦中華より来るあり

藻塩草

鶏 雉 雞 鳥 状 雉 の 雄 に 似 て 頸 に 紫 の 斑 ○ 此 鳥 は 寒 に 向 る 鳥 な り 仍 て 秋 の 来 る に 紅 葉 の 散 る を 背 中 に 負 ふ て 雪 霜 の 寒 を 忘 ぐ あ り 故 に 寄 る 者 の 上 毛 の 紅 色 と 赤 色 翅 に 黑 き 縱 の 斑 あ り 脚 掌 に 毛 あ り 原 野 に 出 ず 形 雀 に 似 て 黄 赤 色 の 斑 あ り 脚 掌 に 毛 あ り

鶏

和漢三才圖会 今鶏青鶏一物とする は非なり

新酒

本朝食鑑 新酒は新撰の白米一斗を用てこれを醸し須加利布嚢に盛て舟に入其酒の水半滴る復布嚢に入て壓しときは酒おのづから滴り尽て後汁を取滓を去て新酒とす○新走中汲醸醸醸袋あり○各その頭字の部に出す

九月

四十雀

五十雀 和漢三才図会 夜に似て大也頭黑く兩頬白く白き四紋黑き圈頸に至て脇背灰青翅尾鬱黑にして灰白の竪條あり腹白色にして胸より尾に至て黑雲の紋あり其の声清潔にして多く囀る四十々々と鳴が如し故に名づく其老るに毛を換色やゝ異にして形ぬすと大なり俗呼て五十雀と云ふ雄腹の雲紋微し

鷓鴣

蘇頌曰狀ち母雞に似て鼠の如く胸の前に白き圈ありて真珠の如く背毛に紫赤の浪の文あり○呼珍曰鷓鴣胡飛とは必南翥る者南に懷南と呼ぶ江左に逆鱗と云ふ張華が注に云飛ては必南に向く東西に回翔して決して翅を開くの始め必先づ南に翥る其志一南を懷ひて北に徂ぎず性霜露を畏れ早晚に歩ると稀に夜栖に木の葉を以て身を蔽ふ多く對一雌今俗其雌を謂て行不得哥と云ふ其性潔きを好む 和漢三才図会 字彙云鷓鴣其飛数月に隨ふ正月の如きに一たび飛ぶ止む蓋未知然るか否近年亦中華より来るあり

藻塩草

鶏 雉 雞 鳥 状 雉 の 雄 に 似 て 頸 に 紫 の 斑 ○ 此 鳥 は 寒 に 向 る 鳥 な り 仍 て 秋 の 来 る に 紅 葉 の 散 る を 背 中 に 負 ふ て 雪 霜 の 寒 を 忘 ぐ あ り 故 に 寄 る 者 の 上 毛 の 紅 色 と 赤 色 翅 に 黑 き 縱 の 斑 あ り 脚 掌 に 毛 あ り

鶏

和漢三才図会 今鶏青鶏一物とする は非なり 鶏は山林に在て原野に出ず形雀に似て黄赤色翅に黑き縱の斑

新酒

本朝食鑑 新酒は新撰の白米一斗を用てこれを醸し須加利布嚢に盛て舟に入其酒の水半滴る復布嚢に入て壓しときは酒おのづから滴り尽て後汁を取滓を去て新酒とす○新走中汲醸醸醸袋あり○各その頭字の部に出す

四の宮祭

十日 近江國滋賀郡大津の駅にあり祭る神四座大比叡大己貴命 小比叡国常立尊 氣比仲哀天皇 小禪師大々出見尊 按ずるに當社は日吉の神殿の故に四座を以てなり此地に迹を垂れ里民云ふの神鎮坐の日官幣使四位某の卿の故に四座を以四位の宮と号ぶと謂ふ四神鎮坐のゆゑに四位と号ぶ○社説云祭る神五座大比枝小比枝氣比小禪師塩土の老翁の小禪師を本社と云ふ故に四の宮と云ふ例祭九月十日大津浦中の大祭の神輿二基引山十二邊物造花を出す夜に入て相撲あり

下鳥羽祭

十日 山城国宇治郡下鳥羽にあり祭る神牛頭天皇と号ぶ例祭九月十日下鳥羽及び大路の土人本居神と云ふ神輿基あり名勝志云神社は法傳寺の巽二町にあり森の中にあり

白川祭

十三日 名勝志 天満天神の祭なり洛北白川の里南山の上にあり摂社山王春日八幡 紀事 神輿一基鉾五本あり○社説云祭る神天満宮少彦名の尊摂社は前に同じ天満鎮座は延喜八年三月十三日なり旅所は本社鳥居の前二町にあり西にあり例祭九月十三日土人産沙神と云ふ

十三夜

後の月 二夜の月 豆名月 栗名月 高潔云十三夜の月見は我朝の風なりと云ふを近世のえせ儒者は天辺將満一輪月又光彩遍空輪將満と云ふ詩又明の十三家詩は鄭少谷何大復が十三夜の月を翫ぶと云ふ詩を引て異朝にも十三夜の月を賞すと云ふ是ぜ附會の説なり信景云今彼集十二家詩をこゝに是八月十三夜にして九月十三夜にあらずと其他一ツも九月十三夜の月を賞ずる詩文なしと云ふ一句一章なりとも其人臨時の興にて天下の名月とする事我朝のごとく日昼の中右記七十五代崇德院保延元年九月十三夜今宵雲清く月明らかなり是むかし寛平法皇明月無双のよし仰出さる依て我朝九

月十三夜を以明月の夜とす【常盤日記】姓然　万里小路部光卿の御説を引て云十三夜の月を賞せ一日を起す八天暦七年九月十三夜始て月の宴を行ひ給ひしより遺例とす来る迄之但此宴八本八月十五夜の御遊びを行ひ給て行ひ給へ、其由八月十五夜八先帝崇徳の御国忌に当るを八拠しも後世九月に其遊を行ひ給へるなり九月とても十五日八狂其日次も忌とし一夕行ぶとて十三夜に定て九月の宴を用き行ふ也一之○忠通公十三夜翫月詩云閑窓寂々月相臨従属窮秋望已禁潘室昔蹤凌雲訪蔣家舊徑蹈霜尋十三夜影勝於古数百年光不若今馮前軒四首見清明夕價千金○唐に富士あ八々の月も見よ素堂○後の月と八十五夜に對し云也○二夜の月十五夜の月を久久八二夜の月と賞す○栗名月豆名月八浪華の俗十五夜を芋名月とし八十三夜を栗名月豆名月とも之

芝神明祭

廿日より　江戸芝増上寺大門の傍に有る神領也地八増上寺の山際に有る故に飯倉明神と号す祭礼九月十一日より廿日まで　神幸　此節時と云て秋両多し此を以て世俗神明のめくされ祭と云也祭礼の間社内に於て生姜を商ふ　是を根岸生姜と云ふを誤りて一説生姜と云ふ本朝醫方傳に云薑八嘔土を去神明に通ず土俗の事を誤て伝て生姜を賞也此外檜割竜に藤の花を画き内に餡を盛りてあれを風木綿と称す但一風木の餘りにて作せるとい云る

城南寺祭

廿日　【神社啓蒙】城南の社八山城国乙訓の里にあり祭る所の神一座烏羽天皇○社説云祭る所二十二社の内七社あり伊勢石清水松尾稲荷賀茂上下平野春日以上城南神と号す例祭九月廿日神輿二基あり

この地人皇七十四代鳥羽上皇の離宮也て王城の南に有る故に南城の離宮と云

鹿ケ谷祭

廿四日　【紀事】浄土村十禅師祭礼洛東銀閣寺の門前北の方に十禅師の社あり同所に八所明神の社あり神号詳ならず主人産泉神と云祭礼九月二十四日　今九　【雍州府志】鹿ケ谷天皇祭礼今祭祀微なりて其及ばず

猩々菊

黄猩々八万重大まん乱猩々八本紅にて葩大まん小猩々の如くにして輪

女花

菊の異名也女節女菅の異名あり是也

承和の色

菊の異名也【藻塩草】唐よりそ伝ふ也陶淵明はじめて我朝にて八承和帝仁和天皇より始て遊しめし故に承和の名と申す人坊ころ中ぶ菊の品も分とせ也黄あるを用ひ給へるに黄菊をもて承和色と也穢我菊と也申と云云藻塩草の説くの如しと云

類聚国史に恒武帝の菊花御宴を載られ

承和帝より菊を愛し給へり八あ云ふ故帝ひきて菊を愛し遊びの宴一へ後の菊

まら菊

【和訓栞】菊八大要黄を貴べり詩人の賞する所薬用に入もまと同じ菊の異名多く如くよ一八新羅菊の義也とい云花史在編に菊品彩羅一名倭菊千紫紅白とい云

芍薬の根分

芍薬其花肥大あらんと欲を必糞壌をくわへ毎年九月根を取除り去る秋の一ニ也熟

柴栗

栃栗の一

熟栃

腸に秋の一ニ也熟

椎の実椎柴、椎の葉、

【大和本草】椎八閩書に云ふを載て本草に云ふ【羅山文集】余幼年より椎八木の名と云ふ果あり一太平御覧に

在と聞く後に欠考也蓋胡説欽定四庫書南山志を見るに椎は科子に其末尖まる錐に似り故に椎といふ宋書に椎に作る木は從也下畧 和漢三才圖会 椎子 鐵樹 其葉樫に似て鋸歯細なり強く冬も枯て葉落ず其実長く尖る葉頭に似て紫褐色仁白く両岸とあり又丸樫鉤栗椎子の樹相似り小桃の如し俗呼で供器とする○季吟云堀川百首に椎柴を冬の題に出せり其故なる色冬にて一説あるべし実につきて椎は秋季を持るに椎柴も葉も実も秋とあり

松子 新松子

海松 大和本草 海松五葉あり若水信州戸隠山にあり然せば日本に本多あり松と訓ずるは非なるべし松を大之子は果と一食ふべし日本の産は朝鮮より来るなり 倭名抄 松子 漢語抄云五葉松子和名万豆乃美 青松を大坂の里語に新ちりとゆふ

新蕎麦

貞享式 巻式は例の賞翫なり奈何とあるべ然は冬にて秋なる前後の働を賞して

新米

食療本草 粳米新熟の者は氣を動じ年を経る者は赤病を発ず

霜踏鹿

千首 かりのこをいはんとて霜置て岡べは過るさをしかの声 秋名院

江の都に俗せ出ず

七月

楸の葉を戴く

夢華録 唐の時立秋の日京師楸の葉を賣る婦女児童剪て花の樣なるを戴く

一葉

桐一葉 淮南子 一葉落而天下知秋○一葉は桐を以柳を以ふ白体によるべし

一葉の舟

一葉の水に浮びるを舟に見るなり一葉の舟詩文に多し

冷

御今 初秋の事なり暮秋にはあらざるなり

彦星

七夕の都二星の名に出づ

火取香

棚機に焚白北机に居香炉一口納殿の百和香四両盛之六事根源机の上に火とるに終夜空焼そのまゝ

芒麻子

唐胡麻也と

楸

時珍曰楸葉大すして早く脱つ故に名づの邪に注ず

槭

槭と同槭葉は小して早く秀故に名を榎と同

花彙 槭 品字箋 ヒサキ キサヤ ケカフテコブラ ライテンキリ人家往々にあるを栽高さ一二丈白鐵樹に似て皮赤龍の鱗の如く葉は杼木に類して大或は実り或は三月夏間花の花をひらくに似て白色紫点あり風て莢を結ぶ数十簇をなして枝の間に垂る長さ尺あり

蜩

大和本草 時珍曰小にして色青緑なる者尤雅註云小青蟬也然せば山中にあり晩にあり故に名く常の蟬よりは小にして青赤の音聒々間に堪とり寒きと鳴く

兼三秋物

拾穂抄 板に木を漆く綱を

引板

つひく引なり鹿をおどろかす物也

一本芒

大和本草 一窠に多く叢生

八月

菱取

茨実一名菱或は沙角稜峭なるを稜と俗呼て凌角と也中畧自湖中に生ず葉実ともに刺其角硬して人を刺其色嫩なる者青く老る者黑し嫩なる時剥食ふ甘美あり老る時は蒸して食ふ

穆

天和本草 八月九月茎を抽んで三稜あり細花ひらく緑りて栗の毬の如し

酥簞百生

千生 青酥簞 和漢三才圖会 苦瓠俗云酥簞壺盧と一類にして別種なる者明けし葉花小にして壺盧に似て甘の味食ふに堪ず円大なる者多く炭斗に作る長くして細腰あるは

酒樽に作るべし、長五六寸の者あり、俗百生と称す、三寸の者あり、千生と称す、細腰本末相均しき者俗呼て閻夜といふ珍

平蕈 和漢三才図会 平蕈山林の湿地に生ず、苦楝の樹多くあるなり、十月盛に其形松茸に似て瘦傘薄く匾し、故に名く、大さ三四寸亦至て大なる者あり、灰白色裏白く細き刻こまかく、性柔にして脆、其柄多くは正中なれども畧偏て生ず、大小叢生ず、味淡くして俱に灰色、酷深黒、其尾本白く末黒し、腹白く脚黄蕃黒くして鼻の辺に黄の除あり、其肉の味雁に劣らず、脂も又多し、臭香鶴の肉に似たるなり、

鵯 和漢三才図会 俗云ひよどり、鶏に似て尾長く蒼灰色、頭上の毛乱れ起り、眼の辺に微赤色を帯ぶ、胸臆灰青腹の下灰白、倶に黑き斑あり、蓄利く、脚脛短く掌小さく蒼黑く、常に群をなす、乱啼好て草木の実を食ふ、或は云山茶花を食ふ、

鴻 和漢三才図会 菱喰也、雁に類して大なり、背頭倶に灰色、頷深黒、其尾本白く末黒し、腹白く脚黄蕃黒くして鼻の辺に黄の除あり、其肉の味雁に劣らず、脂も又多し、臭香鶴の肉に似たるなり、

鴉 和漢三才図会 俗云ひよどり、与土里状ち鵯に似て尾長く蒼灰色頭上の毛乱れ起り、眼の辺に微赤色を帯ぶ、胸臆灰青腹の下灰白、倶に黑き斑あり、蓄利く、脚脛短く掌小さく蒼黑く、常に群をなす、乱啼好て草木の実を食ふ、或は云山茶花を食ふ、

鳰 古抄秋、貞享式に云、冬の部に入る、

日雀 和漢三才図会 俗云比伽羅状四雀に似て小く、頭背赤色、頰の辺に白毛相交る、腹白く翅尾黑く、其根際あり、尾に交る尾羽、腹黄白蕃、灰白、脚黑し、其声清滑なり、鳴る又河原鶺状鶺に似て稍大く、頭背灰白、眼の後微黑く、背に黑き斑あり、翅蒼黑くして黄を交ふ、

鶺 河原鶺 和漢三才図会 俗云比和止里、雀に似て小く、全体黄色なり、青を帯ぶ、頭背頸翅に黑を交ふ、尾羽、腹黄白蕃、灰白、脚黑し、其声清滑なり、鳴る又河原鶺状鶺に似て稍大く、頭背灰白、眼の後微黑く、背に黑き斑あり、翅蒼黑くして黄を交ふ、

鶺 大和本草 唐鶺、紅鶺、蓼鶺、おのおの状ちを略す、

鯉漬 和漢三才図会 一二才ばかりの小鯉を用て醢とす、造法鮒一升、洗ひ去て塩三合和し、三日ありて後石を以ておしを壓す、或は用く茄子、生薑穂蓼番椒を漬る、又佳、鯉の字未詳、本朝食鑑 鯉小鯉あり、

九月賜

氷魚 九月 公事根源 十月の旬のころ、あるべし、今日も氷魚を結ふ例あり、年中行事 菊りみぢ折り、氷魚を取りて、ふ修ふ、滑稽雑談 いまそ草、ありこきのさうづき 内大臣

百菊 云、和朝に初て菊を愛する中に殊に百種の名あるべし、傳へいふ、足利将軍義輝公御園に植られ、御「龍」愛あり、義景藤孝両人に贈られ、一百種の菊あり、百菊八の種なり、

鴨上戸 和名ほろ、本の部に出ず、

錐栗 倭珍曰栗稍小きもの山栗なり、山栗の四角にして夫らぐるを錐栗と云、

瓢の樹 和漢三才図会 其木の葉女貞に似て厚く狹く長く微淡し、三四月ふ細花を開く深赤色実を結ぶ、大さ豆の如し、自ら裂る中子細小きく黑色、別に其葉の面に子の如くあるもの服用して中ふ小き蚤あり、化して殼に孔口あり、塵埃を吹去ば空虫となる、大なる者は桃李の如し、其文理桃椰子の如し、人用て胡椒秦椒本の抹を収む、瓢に代ふ、故に俗瓢の木と云、或は小児戯に吹て笛とす、駿州に多くあり、祭礼に此笛を吹て神輿に供奉す、

榼藤 時珍曰其子榼の形に象る故に名く、紫黑色微光、大さ二寸四五、編人多く内を剔き去り薬瓢に作て腰に垂る、廣州記 藤に似て樹に附て、通草

稽 字彙 秋再び生る稲あり、古今 川辺の田にあるひつちのわに出ぬべ世を今さくらあきのあとのあとしぬとよ人ちを、

七月

百子姫 棚機七姫の因、百子の池より名くと、

百子の池 古今 あの郭セるの池の名に出づ、

紅葉の橋 古今 天の川もみぢを敷なりけり渡らばにしきの中たえなむ、真淵翁云もみぢを敷とは、秋を待て上

たるとらふのく、紅葉の擣ハ秋ハ日ともおちを専とせされバ也さ
初秋よりて紅葉せぬ此りのもありて凢秋のさかりていふのこ
中思ひ紅葉を擣みてあるをあろう得うゆるよしまて今
よむるハあやまりとるが多し○青藍云此古今集の哥よりハ
天の川原のもみちの擣ある趣よ古くよりよめる又棚機とらせ
んとするとき紅源をわたるともみちのちしらぬ説ハ後よ
設ける
あるべし

紅葉の帳

藻塩草 紅葉の戸ぞりとハ錦の戸帳を七夕よひよせてといふ

夫木 かさゝぎの河原にもみぬ紅葉の戸ありて浪やちらくらん　後九条内大臣

文珠會

八日 公事根源 是ハ東寺西寺まて行なる、仁明天皇天長十年七月八日大法師泰善はじめて文珠会を修せる 大政官府 其略曰文珠会ハ畿内郡邑廣く此会を設け糸食ホを弁じて貧者に施しあふ、是又文珠涅槃経の文に依るなり云〃若衆生ありて文珠師利の名を聞んに十二億劫生死の罪を除却せん若礼拝供養する者ハ生々の處恒に諸公の家に生せんと云〃

そらがミ

秘藏抄に 稲妻をいふ

桃の子

時珍曰桃の性早花植安くして子繁し故に字木兆に従ふ十億を兆といふ其多をいふ之

兼三秋物

望月

説文 望ハ月の満るに日と相望む君に朝するが如し月に従ひ臣に従ひ壬に従ふ壬ハ朝するなり

紅葉鳥

鹿の異名之 藏玉 あくがるる田の山のもみぢゞかりの衣おとやあらし吹

桃吹

この郁木綿の条に出づ

藻に住虫音に鳴

本草 約言 紫菜其中に小螺蛳あり 大和本草 約言にいふ處古哥によめるわれからなるべし藻に付て殻の一片なる螺あ

り、分殻の意なり 古今栄雅抄 蜑の刈藻に付て、枕むし我から
と身をほろぼさぬまよりて名づくる之 古今 蜑の刈藻にすむ
虫のわれからとねをこそなかめ世をハ
うらみじ 直子朝臣○御今ハ難しとせり

鵙

和漢三才図会 鵙 音鶪 兼名苑又鶪
を用ふ日本紀百舌鳥を用未詳 鵙形鳩に似て小く頭背尾
に至て黄褐色眼及び嘴頭の容ふき鶏に似て眼の辺り黒
く眼上の白き條頰に引嘴黒くして末曲る頰臆白く腹
黄赤黒き横彪あり翮白く羽黒し脛掌黒く爪利しくて
毎にかゝるを撃て其肉を食ふ其声高く
喧し奇異といふが如し○秋に至てよく鳴之

鵙の草茎、鵙の早贄

奥儀抄 あしぬしとのくかさしむつきて其家
とふに女鵙のゐる草ぐきをさして曰我家ハ此草茎のまた
ちよ行とうせる里にあるといひてさりぬ男後にたづねてとうぬ
べきよしを契りてさりぬその後心にかゝりてたづねゆけ
まつかりまつ秋をへてころほどにゆきてゆのゝばかり
ぬ、次のとし此春となりて野に行てたとへし草をこゝ
に霞をとりて聳てまべて見えずひねりとぬめをむす
しく帰りぬといへりこれ故将作の傳なりて 袖中抄 鵙の
草茎とハ鵙の草くさとらすなり 奇林良材 鵙の草茎ハ
鵙ハ時鳥の沓ぬひにて有るが、皆手を取てくへさぶりし
よりて其のかるとよくるやうの物をハ草の茎にさしておく
るをいふとハ是を鵙の早贄といふ 藻塩草 鵙早
贄といふてきをしてよろげの草茎にさしおきたる虫ハ蛙な
どをとりて刺て時々の為にそてこゞみハくるすといへり八
雲の御説に説々あり此説に過べからず、さくらせ巳 鵙の性と
して必蛙或ハとらげなどを取て草木の立枝に刺貫き
晒し おくなりこれを鵙の早贄といふ人氣跡き別在な

よりはやくあり予すのあるうちをもをまとり○諸説とりあるを本統あり〜とぞも後の人取用おてよあるを寄もあをべこれもところの説よりとぞし

鵙落 紀事 山林の間囲より鵙の目を縫ひ架頭より居、傍より竊竿を設て鵙鳥を執る是を鵙を落とこそ、

八月

木犀 〜の花の条より出、

九月

百夜草 菊の異名あり 藏玉名よ 〜あふ菊が庭の百夜草 花をもとめて白髭まるあれ 大和の国三輪の里より老翁あり彼庭より一本の菊をうゑて秋菊のもとをぶちの菊秋冬をもとめ、春夏をもとめ花も葉もふるもの所の者不審して乗〜ろの聞より七月一日より毎夜菊の下露を器物ようつりて百夜あり毎月秋花を蒔これより依て秋菊四季ようをもて仮百夜草と号く

紅葉 和訓栞 紅葉をもみぢ紅葉 〜の義なり〜の反ぢ〜そ〜ひ〜みぢ葉とよびきを略〜て もみぢとのこと〜ひ〜略をもみぢ〜もみぢもとよりもみぢ、をもみづ〜ひもみぢもるあひぢすの反づあひりもぢ仮ハ、をこぢあをもをあひぢあの反なあひ○ひとぢもる木ハ桃櫨柞白膠木葛檀柏檜椙梅櫻正木おを各頭字の部よりもち註を○桃のもぢもをもをもる故花とへハ櫻とあるが ぢ〜ひ〜もぢ〜ひ〜ハ桃のやうあるをもぢ、又もをぢハ山ようの深き里へをあ下る花ハあれとうこうへあひこをハちう紫の いろハちぐるをもぢ、おぢ庭もせは

紅葉の舟 和訓栞 源氏よ うもをきもみぢ葉玄旨法印 紅葉をとをきぐろ舟とをを紅葉 のこをあるもりみぢのをぶぬ〜をををを

紅葉かつちる 青藍云俳諧歳時記よ馬琴云紅葉ろちるのろハろ色こをる梅の花ぢいふろよあ〜く

をぐをををもをやきをろうるを、又陸佃が埤雅小茶褐色黄黒色、とより、樹々の下枝ハ早く色つきをろ、雨露のをあよをを黄黒と茶褐色よりををちをるを ちる秋あり、下りをちろちる山のタ〜ぐをめををやしと 『鹿の巻』家隆 『家兄羅文云ろちるハ数々ちるを、云〜社説ろをあるをあ〜、おりちをとをろ、盛よ深をるを ぢの、をろをろハちりををむるををいふをを かをるの 別 といふあをむハ恐るを糸をを、

紅葉狩 紅葉を尋ぬるを狩とふ 後頼集 ちをををを

紅葉衣 をこの原のをちを狩、をのむ蔭ちく咲あ〜しれ、

桃華蘂葉 表黄、裏蘇芳、九月より十月まで一説よ面裏青、又黄紅葉、面黄、裏青、青紅葉 表青黄、裏紅其外 檻紅葉、紅葉重 蝦手紅葉等

紅葉土器 廉丈云増山の井よ重陽の下品〜ちをあり、 よ出ぐ禁中重陽ノ宴ふ どふをちをあるてをあと、御厨子所の預り高橋氏へもとひ をぐをと、紅葉土器の名目ふ〜とより、按むるよ菊の盃よ対 〜とる名 和漢三才図会 深秋をの鰭くれふ

紅葉鮒 ちるべ、 をを変むをを紅葉鮒とりふ、

せ

七月

施餓鬼 施餓鬼棚 紀事 七月朔日より川施餓鬼 十五日より至て寺院の意よ任せをちをを修ををの法門前より檀を四隅より構へれを須弥の四州より氏も、寺僧その上より坐〜経を誦〜、中央る種〜の供物を備ふ是ハ鬼子母神の子をとり食ふ故より、仏戒めて今より汝が食ハ別より与へんと誓ひ〜をふ、ちの故より未世の仏弟子より勅〜て、毎日浄飯七粒づを與へるの飢渇ををくハ〜むと云、○一説より目蓮の母餓獄の中より墮、りりてこの功徳ををうけ、諸の餓鬼ををて食を得さ〜むるよ〜いへり、 施餓鬼通覧廣大施餓鬼の法、浄き所を占定〜地を掃ひ棚を作、

長さ三尺ヨ過ベカラズ、但桃樹柘榴の外用ふるとあれ鬼神あるれてもなを食ふもとをえざ、或ハ浄地の上、大石の上、或ハ泉池江海流水中、これ川鉞ヨ用ふ東ヨ向テ施セ、尤ハを定めてもなを行ふ、大幡二本もなヨ咒謁を書て云、唵摩呢嗟唎呼吒娑婆訶、こを宝楼閣経の咒〻又七如来の幡をあぐ、別ヨ焦百鬼王を用ふるもれハ施食のもづめ、面前鬼ヨ始る故ニ

俱舎論頌 鬼ハ八月を日とも、五百人間の一月を一日として壽五百歳、

攝待 門茶 **仏祖統紀** 宗曉傳曰義井を城南の樂社ヨ鑿法華水とふ、以て行者ヨ飲セ、亭をその上ヨ作り施セヨ湯茶を以セ、屋を結ぶて數楹創て摂待とふ、○往来の人ヨ茶を施セり、門茶とも云、

洗車雨、洒涙雨 天中記 七月の六日の雨を洗車雨とい、七日の雨を洒涙雨といふ、

藻塩草 車を洗ふ雨ハ七夕の別をいふ、しほの夕ヘ雨ふれバ天の川水漲ル、二星會をとゝ

施火焼 大文字の火鳥居の火 舟形り俗説、この洒涙雨をあひ誤り、

施火 妙法の火 **紀事** 七月十六日今宵東山浄土寺の山上ヨ薪を以て大文字を点セ、此字畫凡華の及ぶ處ヨあ事を点ぜ〻む、故ヨ一へいふ室町家繁昌の日、遠望遊観の為ヨもを点ぜ〻む、偽条通りを正面とも、○一説ヨ延徳元年七月十六日、相国寺横川和尚始てもなを作る、是将軍義尚追悼のもめ、凡ヨの月六日より薪を伐点火をるヨ至る、そのてヨ預るり凡数十家あ

蓮 今日申の刻各伐乾ところの薪を擔ひ、山上ヨ登る凡大文字一畫長さ百五十間余、五尺をとりを隔て薪木を積終リて後、日の没するを待て同時ヨ火を点セ、この外北山松ヶ崎ヨ妙法の火を点ど、船岡山ヨ舟形りの火を点ど、愛宕山ヨ鳥居形の火を点ど、洛外所々の山岳光原野ヨ諸人集りて枯麻の枝樒の枝破子公卿薑の類を焼くこなを聖灵の送火

とゝ、又施火とい、

善福寺童相撲 十五日 江戸麻布雑色町ヨあり、麻布山と号も、開山了海上人ハ親鸞上人の弟子ニ、今日明山了海上人の忌日あるが故ヨ寺内ヨ祭る所の麻布権現の社前ヨて童相撲あり

仙翁花 剪紅羅 剪沙花 剪秋羅ともいふ、花の形刻と有てふカ或ハ鉄を以てきりもなるがごとし、俗ヨせんとりふ、秋深紅の花をひ〻、種類数品あり 松本センブシセン フシクロ 眼皮ハ一数異種ニ、カンヒ フシクロハ三四月五六月も咲、依て剪春羅とも云あり、拾て此花和種あり、昔嵯峨清涼寺の北ヨ寺あり、仙翁寺とふ其寺徒て跡ヨ珍花生ず、

無二 附人仙翁花とあり、則剪羅紅あり又紅梅竹とも云、

秋物

千秋楽 盤渉調の曲也 **体源抄** 千秋楽 柏子八又十六柏子 ○王子降誕七夜ヨあなを奏セ、盤渉調ハ秋の野ヨ萩女郎花風ヨ吹〻くが如く吹べきこと、○能書ヨ千秋楽をなして万歳楽、秋風楽、を出さず、秋風楽ハ漢の武帝の時出来て、秋声の辞ありと、

八月

釋奠 献酢 **続日本紀** 聖武天皇天平二十八年癸卯、釋奠服器及び儀式を改め定ず、○二月ヨ同ト、春のせの部こるべ、

公事根源 あくる日釋奠の酢をもるらを、蔵人持て朝餉の前ヨをとゝ、蔵人答てうんやのつるの奉せる、昨日の釋奠の酢音と文字をあ〻いひて、高く聲持て簾の中ヨ入事ニ、延喜二月ヨあるべきや、昨を献セハ八月ヨ限るあど承る猶有職の人ヨ尋ぬべ〻、○釋奠の翌日ある東ニ酢といひもろぎの

鶴領 いの部稲負多の条ヨ注セ、

千振 の部ちゝ、千ちゝの部駆草の条ヨ注セ、

九月

泉涌寺舎利會 八日

洛の泉涌寺舎利殿におゐて毎年九月八日舎利会を行ふ音楽
あり、律師湛海宋の白蓮寺より受持の佛牙あり、

仙蓼 珊瑚之さ の部に出 **椨檀の實** 時珍曰其子金鈴の
如し、熟する時ハ黄色、
金鈴と名く、形に象る之、椨檀
棟之夏のあひ部ころ乃がし、

硯洗

机洗の条 部に出

下に出づ、

水灯會 十六日 城州宇治郡大和田黄蘗
山万福寺にあり、當寺ハ
華人黄蘗隠元琦禅師明暦中の建立之 [紀事] 今宵宇治
川の船中におゐて施食を修む、水中施食の法事之、其式船二艘を
双べ申の刻ばかりに岡屋の前に出、先ッ流に沂て宇治橋の下
に至る、暮に及で船中数个の燈臺を点じ、僧徒左右に坐を
列ね、七如来の牌を安じ、供物を備へ経巻を誦し、音磬をう
ちて流に随ひ下る、ここにおいて後三百六十个の燈を宇治川に浮
べ流にまかせ水に順ひ散乱せしむ、恰も螢火の如し、その灯臺
紙を以て蓮花を造り、内に芯を竪て、その艾ハ焔硝を以て
煮る、火をその末に点じなせバ、或ハ流にまかせて、伏見豊後橋
の下に至るものあり、僧徒亥の刻ばかりに岡屋の前に帰る、其
間遊覧の船数千之 [月令廣義] 南國の風俗、中元の夜家々
各羹飯を具へ齋供を門前に羅ね、或ハ埛衢の所傷亡の野
鬼を祝祀し畢て、水燈三十六をちらせ、流水に
むかひて浮む、名づけて度孤といふ、燈ハ紙燈之、

相撲 頭部

[漢書注] 両々相當りて力を技藝射騎に觝戯とす、故に
角觝といふ [事原史記] 秦の二世、甘泉宮に在て楽を角
力戯俳優戯をなす、漢の武帝この戯を好む、即チ今の相撲
あり [垂仁紀] 大和國當麻蹶速と出雲国野見宿祢と力を撲し
む、蹶速野見に勝てあさハせ、その腰を踏折らせて死せり、
野見ハ菅家の祖之 [扶桑畧記] 柏原天皇の時より、代々天子皆

悉く相撲を好む貞観以後寂然として無事之、今聖主これ
を捨む文楽しろしめて○先ッ二三月のころ大将以下陳の
座に於て相撲使のことを定む、諸国七道に遣して相撲人を召
さしめ給ふを [部領使] といふ、[公事根源] 相撲 江次第ニ仁壽殿東庭の相撲とあり、裏書ニ云南殿出御のとき仁壽殿におゐて召合の抜出あり 是ハ諸国の供御人 供御人ハ相撲を奉行する人諸国の防人之 を
めしあつめて七月に相撲の節といひて天子の御覧あるなり、先
十六日の間に召仰あり、上卿勅を奉りて左右の次将に相撲あるべき
よしを仰らる、左右の近衛方を分て国々へ使を下して相撲を召
すことを万葉にことより使といへり、廿六日に内取といひてあり、仁
壽殿 江次第裏書ニ云、大の月ハ廿六日、小の月ハ廿五日仁壽殿におゐてあそを行ふ 御物忌のとき清涼殿におゐてあそあり、近年御物忌を申すときのきさ之 とりふ内取といふあそ故に 左と左右と右相撲あり に出御ある、左右の角力人 東庭にて角力十五番あり抜障
随て進止す 犢鼻の上に狩衣袴を着て 延元三年江記ニ云角力人三十人次第行列その装束烏帽子狩衣犢鼻褌之光細狩衣の上に帯を着り下衣衣袴を着て徒跣なのし 三十人なり 一しきにまさるものあ取て勝負あ
り、廿八日 大の月廿八九日 小の月廿七八日 召合あり、裏書ニ云召合抜出ハ左右相撲相合之江次第ニ云勝方乱声負ハ左勝ハ抜頭右勝ハ納曽利均
に奏を往最手時を決して左勝負右勝負のときハ右先ツ納曽利を奏し左陵王を奏す、又せんげいあるときハ他の舞を奏す 天皇南殿に出
御、王卿参上して、大将相撲の奏を執る、十七番取て勝方乱声あり、
又廿九日抜手とて、角力をえらぐりて御覧せらるゝ之、神亀三年に
始まりて諸国より召上せらる、寛平七年に八童相撲を御覧あり、
すべて角力の起りを申に日本紀垂仁天皇七年七月當麻邑に勇
士あり、云と○助手最手加手あとこゝろ相撲にいふ所へ助手兄を
脇手といふ江次第にとえてくり、今関脇などいふ事せよ
名を設けり之○童相撲 辻相撲 各頭字の部に分ちて委し

薏苡仁 [和漢三才図会] 苗ハ黍に類し葉の間に枝をかうち
て穂を出し実を結ぶ、其楕の嵩に白花をひらく
九草木の花落て実を結ぶ、此ハ花と実と別之形円く末尖り
端に白條二條を出す、累乾くときハ條脱去て孔となり上下
通ず、小児條を貫きて念珠とす

西瓜 [和漢三才図会] 慶安中黄蘗隠元入朝の時西瓜扁豆ホの種を携

〈来り始て長崎ゟ種〉本朝食鑑　水瓜ハ西瓜ノ俗ゟ瓜中水多シ故ゟ名ク大和本草　三月種を下ル　蔓延て地ゟ布、四五月黄花を開く　甜瓜の花のごとし、

鈴虫

和漢三才圖会　金鐘蟲　月鈴　児俗ニ云鈴虫　蛁蟖　蟋蟀の類　真黒ゟ、松虫ゟ似て首ゟ尻大ク背窄く腹ゟ黄白色あり、夜鳴声鈴を振が如し、里里林里里林ゟ鳴て〇鈴虫の弁ゟの部松虫ゟ条ゟ

さげの庭鳥

きりぎりすの異名ゟ

異名分類　爾雅　薄草の聚

蓬が杣のもけの庭鳥

兼三秋物

芒

生うを薄ゟ云ふ又芒ゟ云ふ杜采ノ〇時珍曰芒葉皆茅の如し七月長き茎を抽んで穂をなす、蘆葦の花のごとき者ノ〇侵芒　篠芒　鷹の爪芒　糸芒　簇芒　十寸穂の芒　麻苧穂の芒　真蘇苧の芒　穂芒　花芒　尾花　鬼芒等各頭字の部ゟ

相撲草

和漢三才図会　野原湿地ゟ多し葉地ゟ布て叢生ス忍冬ゟ似て微扁く石菖ゟ似て濶く秋茎を起て嶺ゟ穂をなし青白色細子あり其茎ゟ強建長さ六七寸小児茎を取て穂を絡結て綴のごとし二角を用ひ其禅めゟ持て相引く切る方輸ゟ

透徹栃

仰羅栃　こるべ

ささのる

ささのるを鹿ゟ云ふハ誤ノ先板の諸抄ゟ引ゟ秋の部ゟ出ゟ其ゟ引を注ス、

古今　ささのるゟ秋の萩原朝ゟ来て旅ゆく人を引ゟ

真淵翁云ささのるハ日本紀ゟ螺蠃と書ゟ

一ゟ似我蜂ゟ云、蜂ハ桑の木の虫を取て来て己が巣ゟ七日咒ひ終ゟ已が如き蜂ゟ

ゟ

ゟ其子ハ一夜巣をゟ

其如く今別ゆを

ゟ

ゟ

ゟ

とゝよ所まそ、祢宜出雲を遥に拜むられを神送とゝよ今日四天王寺石の鳥居の辺よりまさ神送りあり、大坂所々の神社も又神送り

爵入大水為蛤 爵為蛤飛物化為潛物九月節 月令 決記戌月之候、

醉楊妃 百菊の内に大白入薄紅みそ方重大々輪 **芒散** 其花老る時絮のやうなりて、風にまゝ散乱るゝて鷲毛のむくゝ、

追加

は **八月** **八朔梅** 冬の部冬の梅の条に注す、

七月 **星草** 大和本草 穀精草、沢中水田の中に叢生す、茎の中より一茎を抽んで、其形其龍に似て茎の末に白花の円きあり○俗太数のブチとゝよ、

り **七月** **琉球芋** 大和本草 甘藷 蕃八番薯と載菜の葉に似たり根八瓜樓根に似たり 根の下に短き蔓あり根の鈴此ひげあり、又鵞の卵に似て大きあり、鴨の卵に似てふとあり、大なる八重さ一斤あり、長きあり、円きあり、夏月蔓長く生ず中暑決種元禄の末琉球より薩州に渡る 燒土にまろ〳〵、寒地に植、分ち生せ侯、

ぬ **八月** **鷄** 大和本草 和品 鬼ツグミとゝよ常のツグミより三倍ちと大あり、ほゝ〳〵多し、山中にあり、鶏の字順の和名抄に唐韻を引けを、中華の書に八怪鳥ゝとゝよ、

を **九月** **万年青の前おき** 決詞 増山の井に出ツ、万年青の実おき牡丹の胴とゝ出花に用ふるあり但し池の坊三ケの傳受あり

わ **八月** **鴨の羽盛** 鴨の羽りり千名の羽

秋 追加を

増補歳時記柔草秋之部 終

七十九